三重県埋蔵文化財調査報告　214

コドノＢ遺跡（第２次・第３次）発掘調査報告

－　多気郡明和町上村　－

２０００．７

三重県埋蔵文化財センター

序

多気郡明和町は、斎宮跡や斎宮・伊勢神宮で使用した土器を製作していたとされる水池土器製作跡などの国指定史跡をはじめ多くの遺跡が存在することで知られています。これらの埋蔵文化財は、我々の祖先が残した貴重な文化遺産であり、現代に生きる私たちはこれを積極的に保護し、後世に伝えて行く責務を担っています。しかし、一方では地域経済の活性化、あるいは住民の生活や安全の向上のために各種の公共事業も必要とされます。そこでどうしても現状保存の困難な部分については、発掘調査を実施し、記録の保存を図ってきているところであります。

以下に紹介致しますコドノＢ遺跡（第２次）・（第３次）発掘調査は、前年度のコドノＡ遺跡・コドノＢ遺跡（第１次）調査に引き続くもので、一般地方道多気停車場斉明線の整備工事に伴ってやむなく実施されたものです。この発掘調査の成果が消滅した遺跡に代わり、地域の歴史ひいては文化を伝え、活用されていくことを切に望みます。

なお、文末ながら、協議から発掘調査にかけて多大のご理解とご協力をいただいた県土整備部並びに松阪地方県民局建設部、明和町教育委員会をはじめ、発掘調査にご助力いただいた地元の方々に心より感謝申し上げます。

平成12年7月

三重県埋蔵文化財センター
所長　藤　澤　英　三

例　　言

1．本書は、三重県教育委員会が三重県県土整備部から執行委任を受けて実施した、平成10年度・11年度一般地方道多気停車場斉明線緊急地方道路整備工事に伴う、多気郡明和町上村字コドノに所在するコドノＢ遺跡（第２次・第３次）の発掘調査結果をまとめたものである。

2．調査は、下記の体制で行った。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

コドノＢ遺跡（第２次）調査

調査第１課主事　西出　孝　　主事　奥野　実

コドノＢ遺跡（第３次）調査

調査第１課主事　西出　孝　　資料普及グループ研修員　打田　久美子

3．発掘調査後の出土遺物の整理は、調査担当者の他、資料普及グループが行った。本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

4．本書の執筆・編集は、西出が担当した。石器に関しては、株式会社アルカの分析による。

5．当調査区の位置は、国土座標第Ⅵ系を基準とし、図面上の方位は、座標北を用いた。真北は、座標北のＮ０°20′Ｗ、磁北は座標北のＮ６°40′Ｗである。

6．本書で用いた遺構表示略記号及び遺構番号は、下記のとおりである。

ＳＨ：竪穴住居、平地式住居　　ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＤ：溝　　ＳＦ：焼土坑　　ＳＫ：土坑

ＳＸ：方形周溝墓　　ＴＰ：テストピット

7．調査にあたっては、県土整備部道路整備課、松阪地方県民局建設部、明和町教育委員会、並びに地元の方々のご協力を得た。また、現地作業に際しては、以下の方々に　ご尽力いただいた。記して感謝の意を表したい。

－コドノＢ遺跡（第２次）調査－

川村芳昭・児島賢一・高森留吉・永田信夫・池田文子・磯崎りさ子・小川　陽・大西み志

川村澄恵・櫛谷みよ子・小林君栄・小林つる子・阪井志づ・島あつ子・清水艶子・鈴木律子

高橋きよ子・高橋ひな・辻井眞子・中西　芳・西川好子・西場妙子・長谷川久江・樋口茂子

脇坂栄子

－コドノＢ遺跡（第３次）調査－

児島賢一・高森留吉・小川　陽・高橋きよ子・高橋ひな・西川好子・西場妙子・樋口茂子

8. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ．前　言 ……（西出　孝）…… 1
1. 調査の契機 …… 1
2. 調査の方法と経過 …… 1

Ⅱ．位置と歴史的環境 ……（西出　孝）…… 3
1. 位置と立地 …… 3
2. 歴史的環境 …… 4

Ⅲ．コドノＢ遺跡（第２次）調査 …… 4
1. 基本的層序 ……（西出　孝）…… 4
2. 遺構と遺物 ……（西出　孝）…… 4
（１）縄文時代 …… 8
（２）弥生時代 …… 8
（３）古墳時代～奈良時代 …… 22
（４）平安時代末期～鎌倉時代初期 …… 24
3. 石　器 ……（株式会社アルカ　角張淳一）…… 38
（１）はじめに …… 38
（２）器種別の観察 …… 39
（３）まとめ …… 43
4. 結　語 ……（西出　孝）…… 51
（１）焼土坑（集石炉） …… 51
（２）円形の平地式住居 …… 51
（３）方形周溝墓 …… 51

Ⅳ．コドノＢ遺跡（第３次）調査 ……（西出　孝）…… 62
1. 基本的層序 …… 62
2. 遺構と遺物 …… 62
（１）弥生時代 …… 62
（２）古墳時代末期～奈良時代初期 …… 62
3. 結　語 …… 64

挿　図　目　次

Ⅱ．位置と歴史的環境

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　遺跡地形図 …… 2
第３図　調査区位置図 …… 3

Ⅲ．コドノＢ遺跡（第２次）調査

第４図　遺構配置図 …… 5・6
第５図　調査区平面図 …… 5・6
第６図　調査区土層断面図 …… 7
第７図　ＳＦ32・88・91実測図 …… 9
第８図　ＳＨ92実測図・遺物出土状況図 …… 10
第９図　ＳＸ86実測図・土層断面図 …… 11
第10図　ＳＸ90実測図・土層断面図 …… 13
第11図　ＳＨ40実測図 …… 13
第12図　ＳＨ56実測図 …… 14
第13図　ＳＨ61実測図 …… 15
第14図　ＳＨ72実測図 …… 16
第15図　ＳＸ７実測図・断面図 …… 17
第16図　ＳＸ44実測図・断面図 …… 18
第17図　ＳＸ57・ＳＨ69実測図・土層断面図、
　　ＳＸ57遺物出土状況図 …… 19
第18図　ＳＸ62実測図・土層断面図 …… 20
第19図　ＳＸ62遺物出土状況図 …… 21
第20図　ＳＸ74実測図・断面図 …… 21
第21図　ＳＸ80実測図・土層断面図 …… 22
第22図　ＳＸ89実測図 …… 23
第23図　ＳＨ10実測図 …… 24
第24図　ＳＨ33・35・42・46実測図 …… 25
第25図　ＳＨ24実測図 …… 26
第26図　ＳＢ18実測図 …… 26
第27図　ＳＦ32、ＳＸ86・90、ＳＨ92出土遺物実測図 …… 29
第28図　ＳＨ40・56・61・72、ＳＸ57出土遺物実測図 …… 30
第29図　ＳＸ62出土遺物実測図（１） …… 31
第30図　ＳＸ62出土遺物実測図（２） …… 32
第31図　ＳＸ80・89、ＳＨ10・24・33、ＳＫ20、ＳＤ40
　　出土遺物実測図 …… 33
第32図　ＳＤ1・4・22・37・78・83出土遺物実測図 …… 34
第33図　遺構混入・包含層等出土遺物実測図（１） …… 35
第34図　遺構混入・包含層等出土遺物実測図（２） …… 36
第35図　遺構混入・包含層等出土遺物実測図（３） …… 37
第36図　遺構混入・包含層等出土遺物実測図（４） …… 38
第37図　出土石器実測図（１） …… 40
第38図　出土石器実測図（２） …… 41
第39図　出土石器実測図（３） …… 42
第40図　出土石器実測図（４） …… 44
第41図　出土石器実測図（５） …… 45
第42図　出土石器実測図（６） …… 46
第43図　出土石器実測図（７） …… 47
第44図　出土石器実測図（８） …… 48
第45図　出土石器実測図（９） …… 49

Ⅳ．コドノＢ遺跡（第３次）調査

第46図　調査区平面図 …… 63
第47図　調査区土層断面図 …… 63
第48図　ＳＸ38、ＳＢ40・41実測図 …… 64
第49図　出土遺物実測図 …… 65

表　目　次

Ⅲ．コドノＢ遺跡（第２次）調査

第１表　方形周溝墓一覧表 …… 27
第２表　竪穴住居一覧表 …… 27
第３表　出土遺物観察表（１） …… 53
第４表　出土遺物観察表（２） …… 54
第５表　出土遺物観察表（３） …… 55
第６表　出土遺物観察表（４） …… 56
第７表　出土遺物観察表（５） …… 57
第８表　出土遺物観察表（６） …… 58
第９表　出土遺物観察表（７） …… 59
第10表　出土石器類観察表（１） …… 60
第11表　出土石器類観察表（２） …… 61

Ⅳ．コドノＢ遺跡（第３次）調査

第12表　出土遺物観察表 …… 66

図　版　目　次

コドノＢ遺跡（第２次）調査

図版１　調査前風景（東から）／調査区遠景（西から）…67

図版２　調査区遠景（東から）／調査区全景（西から）…68

図版３　ＳＦ32（北から）／ＳＦ32（礫除去後、南から）…69

図版４　ＳＦ88（右）・ＳＦ91（左）（西から）
／ＳＦ88（礫除去後、南から）……70

図版５　ＳＸ86（西から）
／ＳＸ89（旧コドノ古墳調査前風景、南から）…71

図版６　ＳＸ89（奥）・ＳＸ90（手前）（西から）
／ＳＸ89断面（南から）……72

図版７　ＳＸ80（真上から）／ＳＸ57（右）・ＳＸ62（中央）
・ＳＸ74（左）（真上から）……73

図版８　ＳＸ44（南から）／ＳＸ７（南から）……74

図版９　ＳＨ92（北から）／ＳＨ40（西から）……75

図版10　ＳＨ57（西から）／ＳＨ61（東から）……76

図版11　ＳＨ69（南から）／ＳＨ72（南から）……77

図版12　ＳＨ10（北から）／ＳＨ33・ＳＨ35
・ＳＨ42・ＳＨ46（真上から）……78

図版13　ＳＨ24（北から）／ＳＢ18（南から）……79

図版14　ＳＤ47・ＳＤ49・ＳＤ50・ＳＤ51・ＳＤ52（北から）
／ＳＨ92出土土器（北から）／ＳＸ62出土土器（北から）
／ＳＸ62土層（東から）／テストピット16（南から）
……80

図版15　出土遺物（１）……81

図版16　出土遺物（２）……82

図版17　出土遺物（３）……83

図版18　出土遺物（４）……84

図版19　出土遺物（５）……85

図版20　出土遺物（６）……86

図版21　出土遺物（７）……87

図版22　出土遺物（８）……88

図版23　出土遺物（９）……89

図版24　出土遺物（10）……90

図版25　出土遺物（11）……91

図版26　出土遺物（12）……92

図版27　出土遺物（13）……93

コドノＢ遺跡（第３次）調査

図版28　調査前風景（東から）／調査区全景（東から）…94

図版29　ＳＸ38（南から）／ＳＢ40（南から）……95

図版30　ＳＢ41（南から）／出土遺物……96

Ⅰ．　前　　言

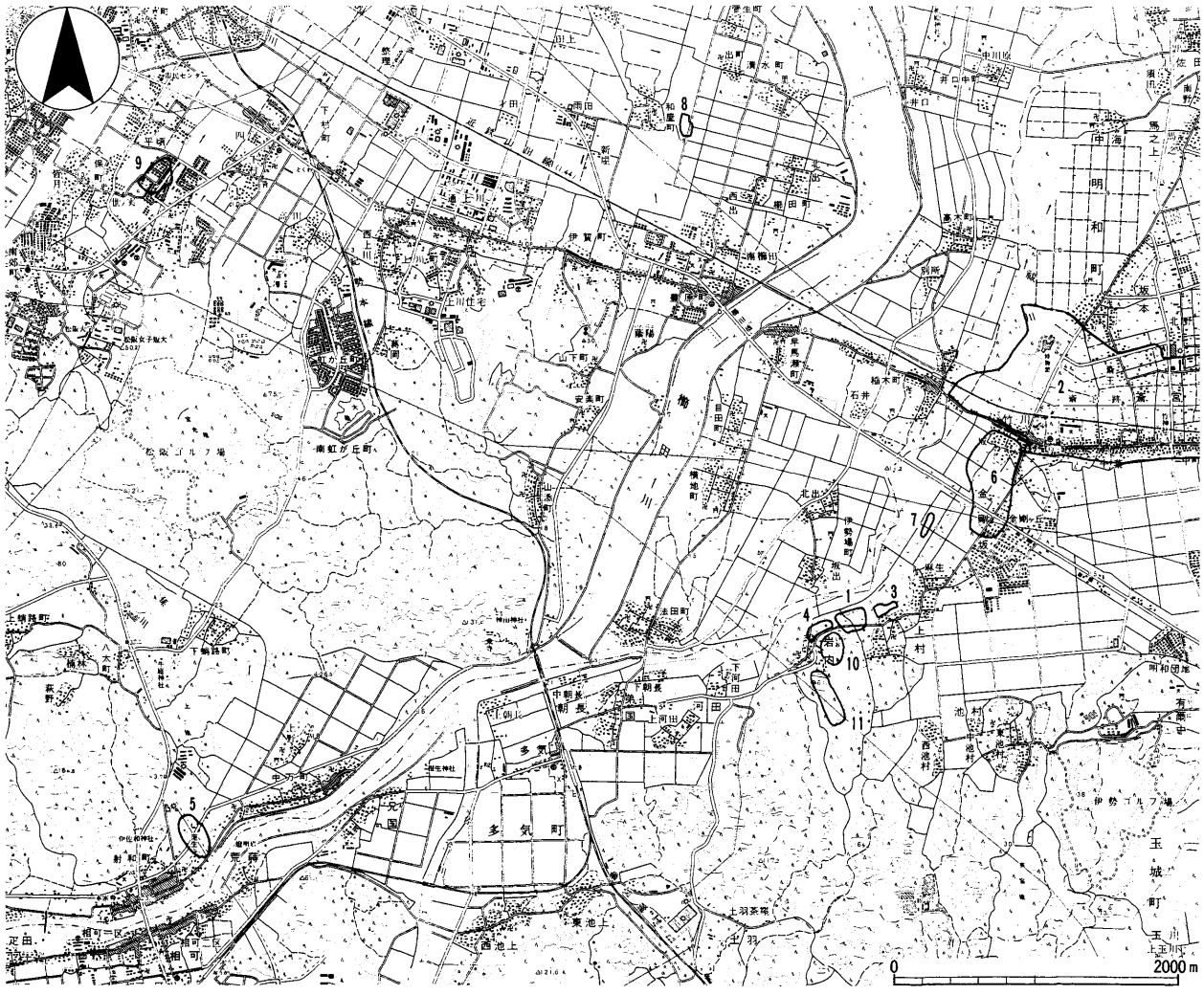
1．調査の契機

一般地方道多気停車場斉明線は、多気郡明和町と隣接する同郡多気町を結ぶ地域の幹線道路である。国道42号線と県道鳥羽松阪線（旧国道23号線）を繋ぐ近道として通行量は多い。路線内には対向に難渋する箇所も多く、通行の安全と地域の振興のために従来より度々、整備事業がなされてきた。今回の事業計画予定地付近は、以前から遺跡の集中する地域として知られていたが、平成５年に分布調査を行った結果、改めて石器・土器等の散布が確認された。平成８年度の試掘調査においても、古墳時代・中世の土師器とともに土坑・溝等が検出された。この遺跡の取り扱いについては、その保護に努めるべく関係機関で協議を重ねたが、現状保存は困難と判断し、やむなく平成９年６月から９月初めにかけて発掘調査を実施（コドノＡ遺跡・コドノＢ遺跡第１次調査）して記録保存することとなった。今回の調査はそれに引き続くものである。対象としたのは、平成10年度がコドノＢ遺跡の第１次調査区から東に隣接する部分（第２次調査区）、平成11年度が第１次調査区の北に接する部分（第３次調査区）である。

2．調査の方法と経過

（１）コドノＢ遺跡（第２次）調査

コドノＢ遺跡第２次調査区は、第１次調査区より



第１図　遺跡位置図（１：50,000）〔国土地理院　松阪・国束山　１：25,000より〕

浅い谷を挟んで20mほど東に位置する。弥生時代～古墳時代初期にかけての遺構・遺物が中心となる約1,900㎡の調査を行った。

① 調査の方法

調査は、遺構面に影響のない範囲で重機による表土の除去を行った。

小地区の設定は、4m×4mを基準とし、北から南へアルファベットを、東から西へは数字の番号を与え、地区名は北西隅の杭を基準とした。

② 調査の経過

調査日誌（抄）

ー平成10年ー

10月13日　第1回目の表土除去開始。（調査区東端からNo. 19のセンター杭まで実施）

10月14日　作業道具搬入。表土除去終了。

10月15日　4mグリッドの地区設定。

10月19日　作業員を含めての調査開始。

10月29日　午前中で作業を終了し、午後から調査区西半の表土除去開始。

11月2日　表土除去終了。4mグリッドの地区設定。

11月4日　教職員研修で度会郡錦中学校谷口北斗先生参加。（6日まで）

11月19日　SX89の墳丘測量。

11月24日　教職員研修で四日市商業谷口由和事務長参加。

12月2日　調査区西端まで遺構検出終了。

12月18日　清掃後、スカイマスターによる調査区の写真撮影。作業員による今年の作業は終了。

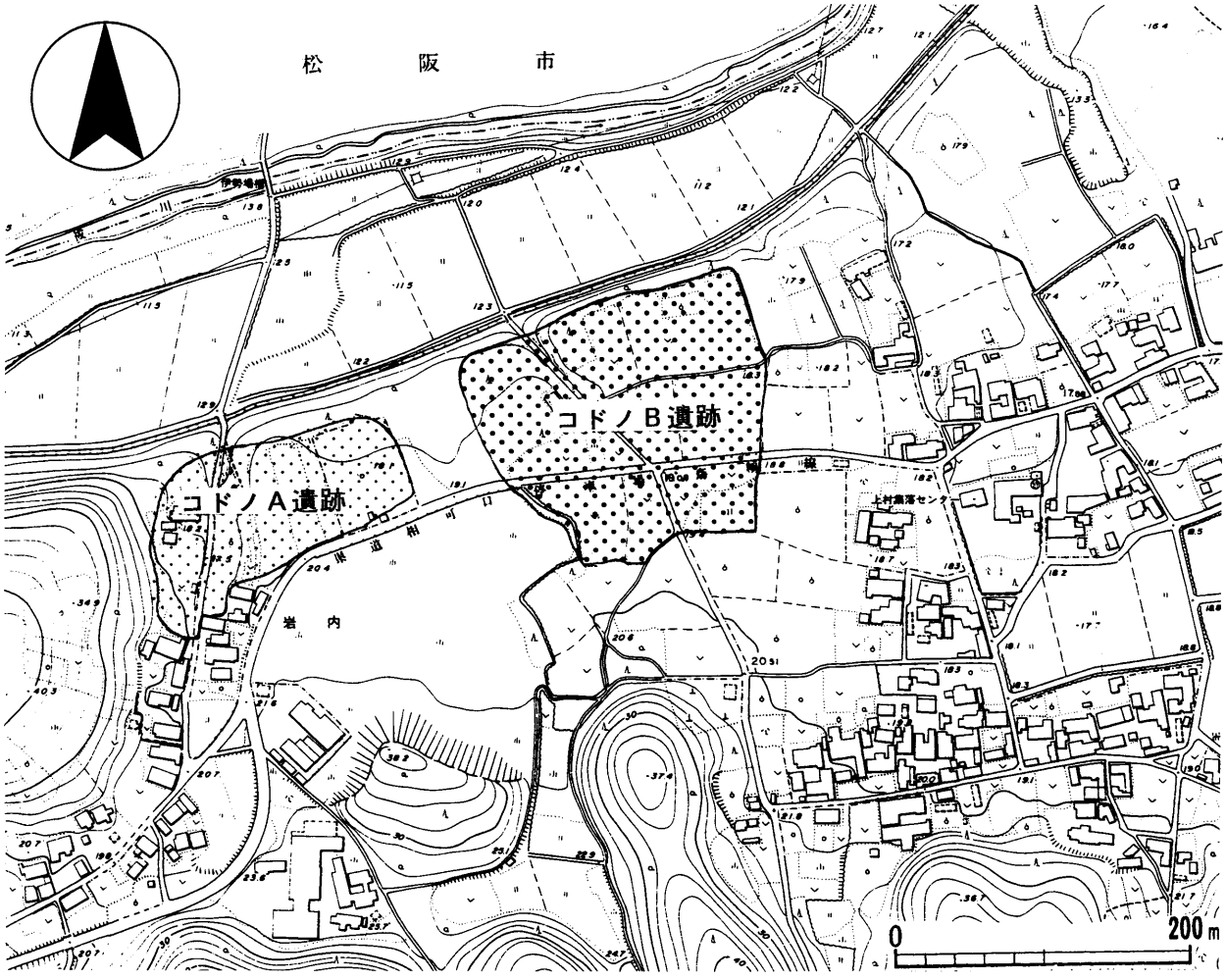
1月6日　遺構実測開始。

1月8日　実測・遺構レベル測定終了。

1月22日　清掃後、ヘリコプターによる遺構写真撮影。基準点測量。

1月23日　現地説明会を開催。140名の参加を得た。

1月29日　撤収完了。



第2図　遺跡地形図（1：5,000）

（2）コドノＢ遺跡（第３次）調査

第３次調査は、第１次調査終了後、整備された道路の拡幅工事に伴い行われた。この拡幅工事により将来、整備される予定の調査区の東を南北に走る町道との乗り入れがスムーズになると思われる。従って今回の調査区は第１次調査区の北に接しており、東西に細長い。調査面積は、約300㎡である。

①　調査の方法

調査は、遺構面に影響のない範囲で重機による表土の除去を行った。

小地区の設定は、４ｍ×４ｍを基準とし、北から南へアルファベットを、東から西へは数字の番号を与え、地区名は北東隅の杭を基準とした。

②　調査の経過

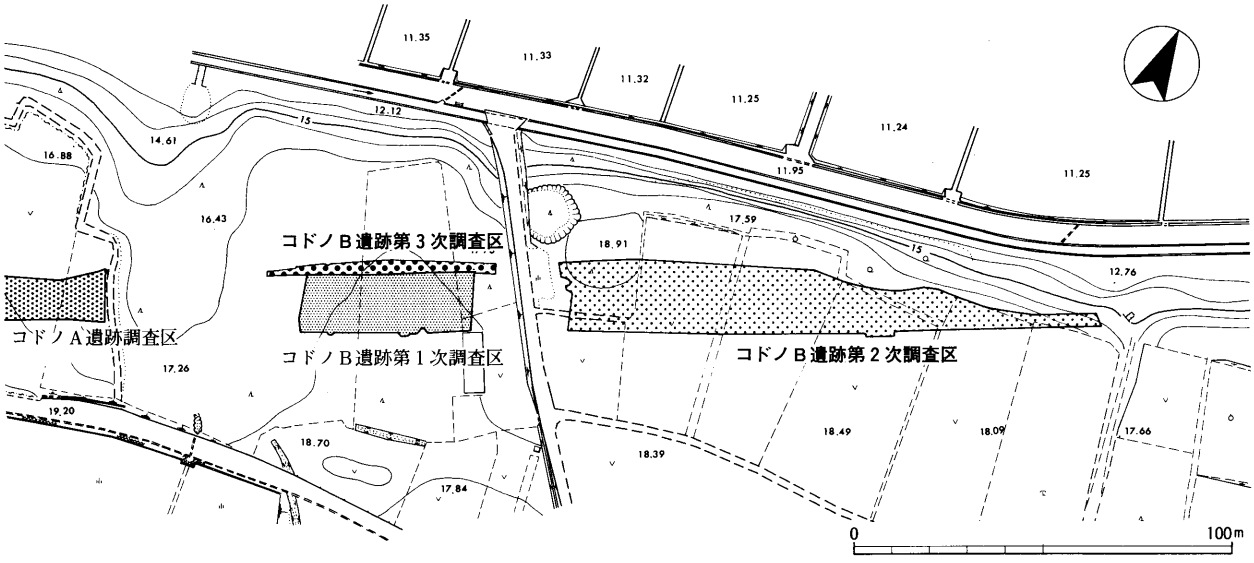
調査は平成11年10月26日、重機による表土の除去から開始した。11月２日から作業員による作業を始め、ほぼ６日間で遺構の検出・掘削を終了。11月10日午後から翌日にかけて写真撮影。11月16日より実測・遺構レベル測定・調査区の国土座標測定を行い、11月19日すべての調査を終えた。その後、12月２日、松阪地方県民局建設部へ調査地を引き渡した。

Ⅱ．位置と歴史的環境

１．位置と立地

コドノＢ遺跡（１）は、三重県多気郡明和町上村字コドノに所在する。現在の行政区画では明和町の南西端にあたる。祓川を境に北は松阪市と接し、西は同郡多気町と近接している。祓川は、紀伊山系高見山に源を発する櫛田川の支流で、当遺跡の西約1.6㎞の地点で櫛田川と分岐する。国指定史跡である斎宮跡（２）（明和町）に斎王が入る前、禊をしたと想定される河川でもある。永保２年（1082）年、洪水により現河道に急変するまでは、祓川が櫛田川の本流であった時期もあるとされる。当遺跡は、地形的にはこの祓川右岸の洪積層の低位段丘上に立地し、標高は18～19ｍである。遺跡の北側は比高差５～６ｍの氾濫平野となっており、また、南側には多気町・明和町・度会郡玉城町の３町にまたがる高度40～100ｍの玉城丘陵が迫る。

第２次調査区は東西に細長く、東は城堀遺跡(３)、西はコドノＢ遺跡第１次調査区に隣接するが、東西ともに谷によって分断されている。調査区の北には、段丘崖が迫り、南は玉城丘陵まで畑地が広がる。現況は北と東の一部がそれぞれ山林・荒地であるが、大部分は畑地であった。また、調査区北西の山林の一部には墳丘が遺存し、従来からコドノ古墳と呼ば



第３図　調査区位置図（１：2,000）

れていたが、今回の調査によって方形周溝墓（ＳＸ86）であることが判明した。この方形周溝墓の付近では、石器が散布していたことも知られている。

第３次調査区は第１次調査区の北に接し、西のコドノＡ遺跡の調査区と東のコドノＢ遺跡第２次調査区の間に位置し、東西に細長い。調査区の中央部分から東と西は小さな谷に向かい、中央部の標高18.2mに比べ、0.6～１mほど下がる。調査前は山林で、この山林は北の段丘崖まで続く。

２．歴史的環境

コドノＢ遺跡周辺の歴史的環境については、拙著『コドノＡ遺跡・コドノＢ遺跡（第１次）発掘調査報告』[①]で触れているのでここでは省略したい。

本章では後述するコドノＢ遺跡第２次・第３次調査の理解を深めていただくためにも、平成９年度に実施したコドノＡ遺跡・コドノＢ遺跡第１次調査の概略と判明した事実を述べたい。

まず、コドノＡ遺跡では縄文時代から奈良時代の遺構が主である上層（約1,100m²）の調査を行い、その後、石器の剥片の出土が見られた下層（約200m²）の調査を行った。上層の調査では掘立柱建物１棟・竪穴住居１棟・柵もしくは柱列と思われる柱穴群３・土坑・溝６条等が確認された。古墳時代末の遺構がほとんどであるが、一部縄文時代晩期の土坑、中世の柱穴も含まれる。下層の調査では遺構は確認できなかったものの、取り上げた遺物は合計307個に上り、その中には良質のチャート製のナイフ形石器６点、スクレイパー１点等旧石器時代のトゥールが含まれていた。

続くコドノＢ遺跡（第１次）調査では遺構は、大きく弥生時代前期末と古墳時代末の２つの時代に分かれる。弥生時代の遺構では県下では最古級の部類に入る方形周溝墓が２基検出された。その他の遺構としては、掘立柱建物２棟・柵と思われる柱穴群２・土坑・溝３条等が確認され、調査区西部で一部、中世の遺構・遺物が見られた以外は、コドノＡ遺跡の上層のものと大きな時期差はないと考えられる。

〔註〕

① 西出　孝『コドノＡ遺跡・コドノＢ遺跡（第１次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1998年）。

〔参考文献〕

・『宮川流域の自然と文化』（建設省三重工事事務所、昭和63年）

・奥　義次「第１編　原始社会」『大宮町史歴史編』（大宮町、昭和62年）

Ⅲ．コドノＢ遺跡（第２次）調査

１．基本的層序

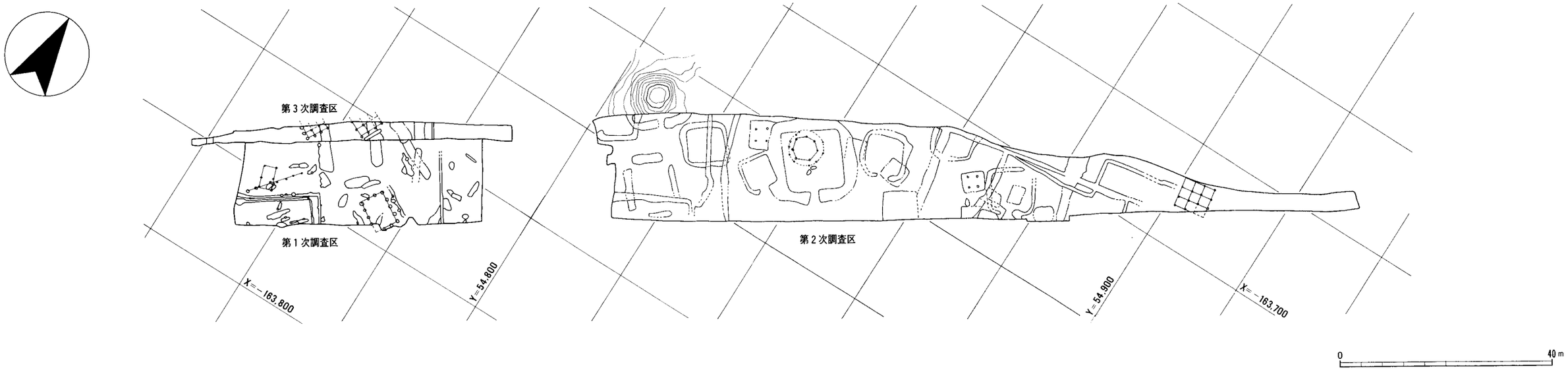
調査区は北を流れる祓川に沿う洪積層の低位段丘端に位置する。西の第１次調査区と浅い谷を挟んだ東方の東西に細長い約1,900m²が調査範囲である。

基本的な層序は、第１層が耕作土、第２層が遺物包含層で、にぶい黄褐色土（Hue10YR 4/3）、第３層が褐色土（Hue10YR 4/4）で、第３層上面が遺構検出面である。包含層は、場所によっては第２層と第３層の間に暗褐色土（Hue10YR 3/3）の層が見られる箇所がある。地山は、褐色土の以下は順に黄褐色土、赤褐色土、多くの礫が混じる黄橙色土となり、黄橙色土以外はいずれも約10～30cmの厚さである。

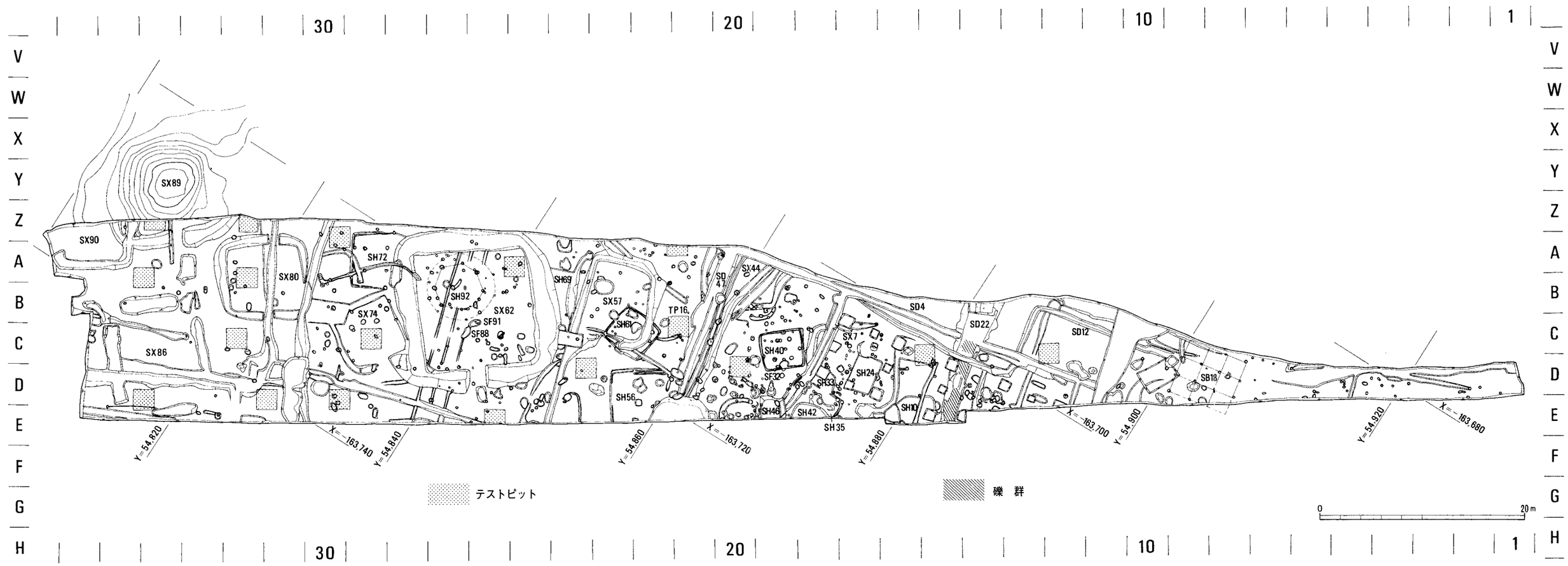
２．遺構と遺物

今回の調査において検出した遺構は、縄文時代早期の集石炉、弥生時代～古墳時代初めの平地式住居・竪穴住居・方形周溝墓、中世の竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝等である。そのうち、溝については遺跡の南から北の祓川の氾濫平野に向かって流れるものと、調査区の東西の谷に向かって流れる溝が格子状に見られたが、そのほとんどが13世紀前後の中世のものである。

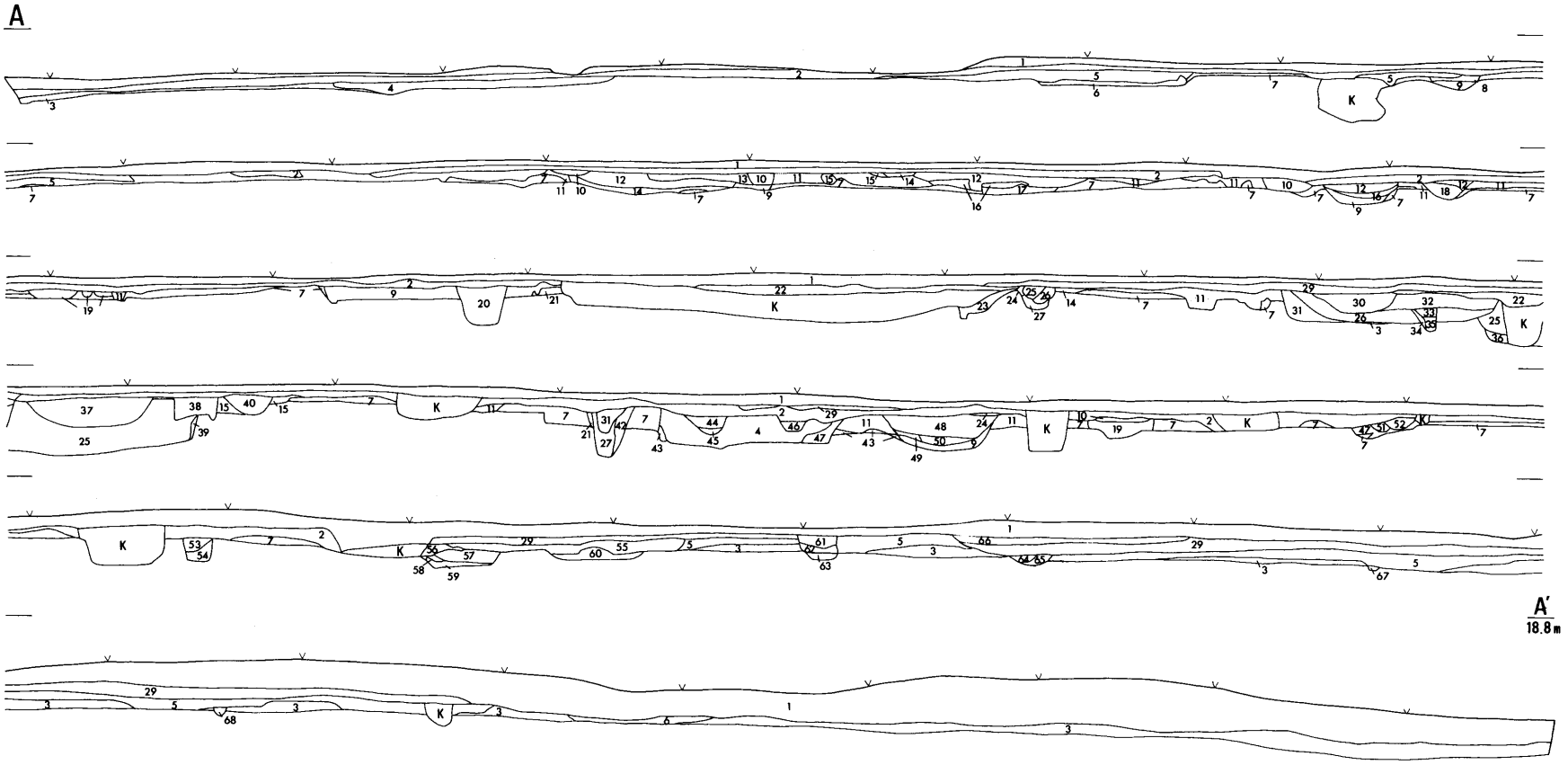
以下には、縄文時代早期の集石炉と密集して確認された弥生時代～古墳時代初めの竪穴住居・方形周溝墓などの遺構及びその主な出土遺物（土器）を中心に述べていく。



第４図　遺構配置図（１：800）



第５図　調査区平面図（１：400）



1　黒色土10YR2/1（小円礫が混じる）　［耕作土］
2　にぶい黄褐色土10YR4/3　［包含層］
3　黄褐色土10YR5/6（多くの礫が混じる）　［地山Ⅱ］
4　黒色土10YR2/1（3がブロック状に混じる）
5　暗褐色土10YR3/3（7と褐灰色粘土の粒、炭化物が混じる）　［包含層］
6　黒褐色土10YR3/1（7の粒が混じる）
7　褐色土10YR4/4　［地山Ⅰ］
8　黒色土10YR2/1（5が混じる）
9　黒色土10YR2/1
10　黒褐色土10YR3/2
11　黒褐色土10YR2/2
12　黒褐色土10YR3/2（褐色土がブロック状に混じる）
13　黒褐色土10YR3/2（12よりやや白っぽい）
14　黒褐色土5YR3/1
15　黒褐色土5YR3/1（7が混じる）
16　褐色土10YR4/4（黒色土10YR2/1が混じる）
17　灰黄褐色土10YR4/2
18　暗褐色土10YR3/3（7がブロック状に混じる）
19　黒褐色土10YR2/2（7が少し混じる）
20　黒色土10YR1.7/1（7がブロック状に混じる）
21　褐色土10YR4/4（黒褐色土10YR3/1が混じる）
22　灰黄褐色土10YR4/2（明黄褐色土の粒が多く混じる）　［旧耕作土］
23　黒褐色土7.5YR3/1
24　暗褐色土10YR3/3
25　黒色土10YR1.7/1
26　黒色土2.5Y2/1
27　黒色土2.5Y2/1（黄褐色土が粒状に混じる）
28　黒褐色土10YR3/1
29　黒褐色土10YR3/2（堅くしまり、少量の遺物含む）　［旧耕作土］
30　黒褐色土2.5Y3/1
31　黒色土10YR2/1（黄褐色土が混じる）
32　黒褐色土10YR3/1（明黄褐色土の粒が少量混じる）
33　黒色土5Y2/1
34　黒色土5Y1.7/1（3が混じる）
35　黒色土7.5YR1.7/1
36　黒褐色土10YR2/2（黄褐色土が混じる）
37　灰褐色土10YR4/2
38　黒褐色土10YR3/2（7の粒が混じる）
39　黒色土10YR1.7/1（黄褐色土が混じる）
40　黒色土10YR2/1（7が混じる）
41　黒褐色土10YR3/1（7が混じる）
42　黒褐色土10YR3/2（多くの黄褐色土が混じる）
43　黄褐色土10YR5/6（黒色土が混じる）
44　黒色土2.5Y2/1（黄褐色土がブロック状に混じる）
45　黒褐色土2.5Y3/1（黄褐色土がブロック状に混じる）
46　黒褐色土10YR2/3
47　黒色土10YR2/1（暗褐色土が混じる）
48　黒色土10YR2/1（こぶし大の礫が混じる）
49　オリーブ褐色砂礫2.5Y4/3（黒色土が混じる）
50　黒色土10YR2/1（砂礫が混じる）
51　黒褐色土10YR2/2（暗褐色土が混じる）
52　黒褐色土10YR2/3（炭化物が混じる）
53　明黄褐色土10YR6/6
54　黒褐色土10YR3/2と灰黄褐色土が混じる
55　非常に堅くしまった暗褐色土10YR3/3（多くの砂礫が混じる）　撹乱かも？
56　黒褐色土10YR3/2（褐色土が粒状に混じる）
57　堅くしまった黒色土10YR2/1
58　黒褐色土10YR2/2（褐色土が混じる）
59　黒褐色土10YR2/2（褐色土が多く混じる）
60　堅くしまった黒褐色土10YR2/2（礫が混じる）
61　黒褐色土10YR3/2（こぶし大の礫が混じる）
62　黒褐色土2.5Y3/2（5㎝大の礫が混じる）
63　黒褐色土2.5Y3/2
64　黒褐色土10YR3/1（礫が混じる）
65　黒褐色土10YR3/1（3と礫が混じる）
66　非常に堅くしまった黒褐色土10YR3/1（礫が混じる）
67　黒褐色土10YR3/1（3が混じる）
68　灰黄褐色砂質土10YR4/2

第6図　調査区土層断面図（1：100）

（1）縄文時代

今回の調査では多くの遺構から早期・晩期の縄文土器が出土したが、遺物出土状況・埋土から縄文時代の遺構と判断したのは焼土坑（集石炉）3基である。

A．焼土坑（集石炉）

ＳＦ32

調査区中央南部のＤ19グリッドに位置する集石炉である。楕円形で、長軸約1.14m、短軸約0.8m、深さ約0.15m、南北軸方向はN31°Wで、火熱を受けて破砕・赤色化した子供の拳大の礫の集石が見られた。埋土には、炭化物や焼土塊が混じる。底面及び壁面は船底形で、その一部は焼土化していた。集石を除去して再検出するとＳＦ32より一回り大きく（長軸約1.5m、短軸約0.87m、深さ約0.4m）北西方向に延びる先細りの形状となり、ＳＦ32は一度改変されたものと考えられる。

出土遺物　礫の除去後、押型文土器（1）が出土した。ネガ楕円文で内面にスス付着。

ＳＦ88

調査区西方中央部のC27グリッドに位置する。長円形で、長軸約1.3m、短軸約0.65m。最深部の深さ約0.37m。南北軸方向はＮ3°Ｗ。壁面の立ち上がりは前述のＳＦ32に比べ、垂直にちかいか、オーバーハングしている。炉の底部には火熱を受けて赤色化した子供の拳大の集石が確認されたが、ＳＦ32と違って礫を積み重ねたものではなく、底面に敷詰められた状態であった。埋土には、炭化物や焼土塊が混じり、集石下の底面は焼土化していた。土器は出土していない。

ＳＦ91

ＳＦ88に接し、B26グリッドに位置する。長円形で、長軸約1.28m、短軸約0.63m。最深部の深さ約0.34m。南北軸方向はN40°Ｅ。壁面の立ち上がりはかなり急で、規模、形態ともにＳＦ88と類似する。埋土は炭化物が混じり、底面の一部は焼土化していた。火熱を受けた集石は出土しておらず、何らかの理由で炉を廃棄した後、礫をＳＦ88に移し替えた可能性も考えられる。土器は出土していない。

（2）弥生時代

今回の調査の遺構・遺物の中心となった時代である。平地式住居1棟・竪穴住居5棟・方形周溝墓9基が確認された。

①　弥生時代前期

A．平地式住居

ＳＨ92

調査区西方中央部に位置する。円形に柱穴が2重に巡る建物である。壁周溝は確認できず、外側の杭列穴から推測した建物の直径は約6.6m。内側中央に2つの主柱穴、さらにその周りに8つの主柱穴や、補助柱穴をもつ建物と推定した。松菊里型住居[①]に見られる中央土坑はないが、一応円形の平地式住居と推測する。中央の主柱穴の直径は約0.25～0.45m、深さは約0.25～0.45m。その他の主柱穴の直径は約0.25～0.75m、深さは約0.06～0.33m。杭列穴の直径は約0.15～0.35m、深さは約0.05～0.2mである。

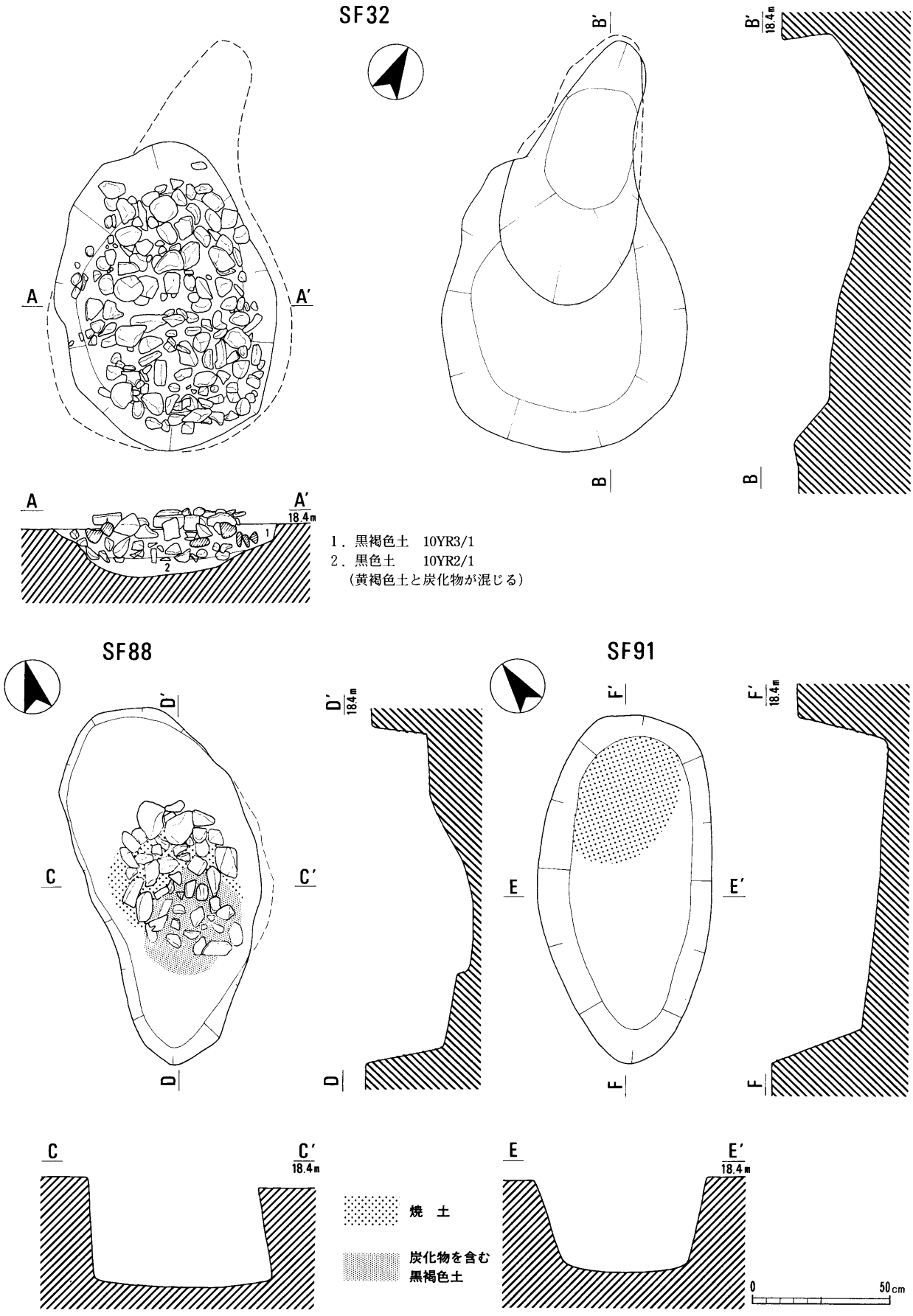
出土遺物　柱穴からの出土遺物は時代不明の土器1片のみである。しかし、住居の中央部付近で大型の甕（16）の下半部が土中に据えられたかたちで見つかっており、周囲の状況・出土遺物などからＳＨ92に伴うものと考えた。16は口縁部が直角近くに外反し、口唇部に刻目がなされる。頸部には5本の沈線が巡る。胴部外面にはススが付着。

B．方形周溝墓

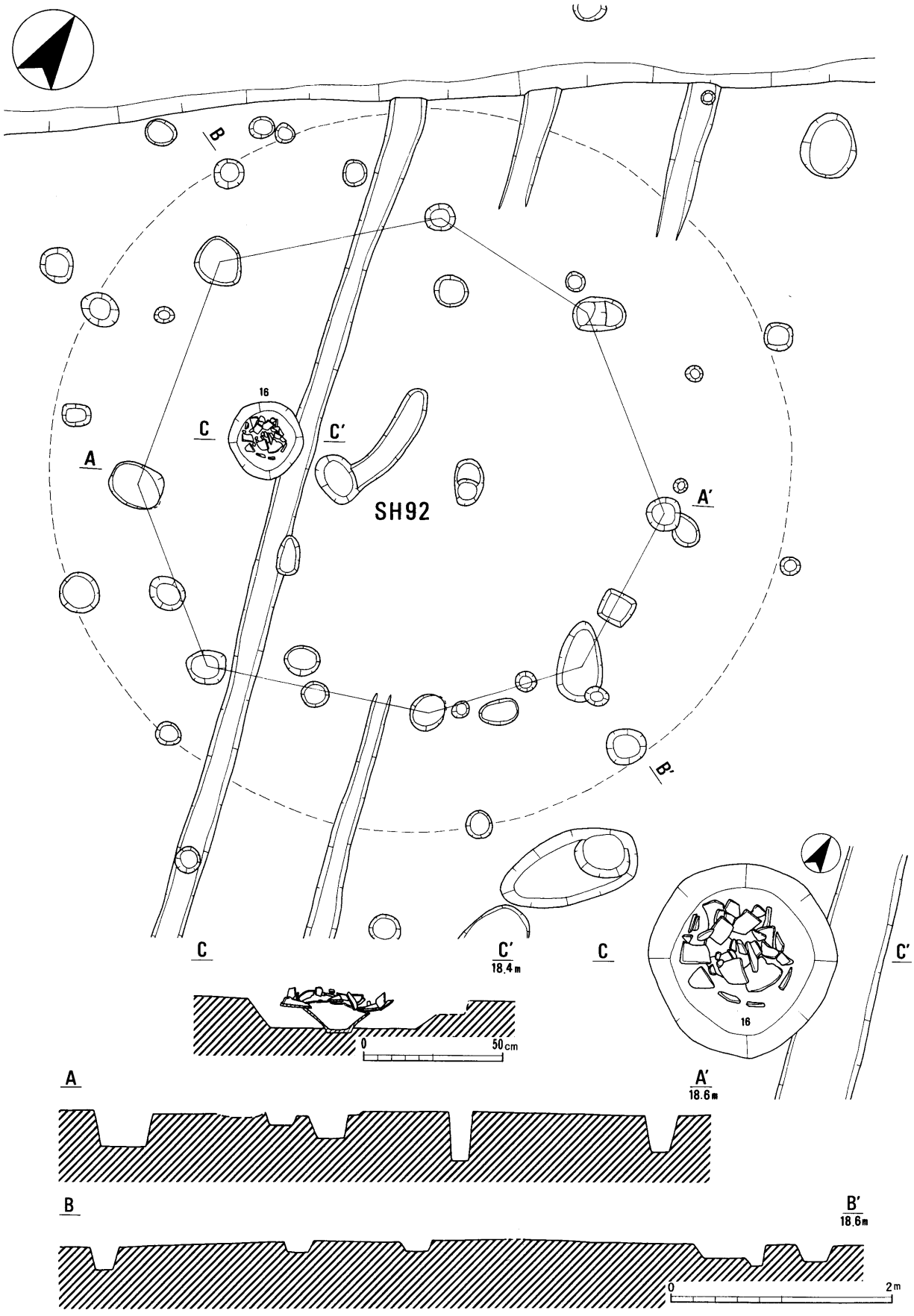
ＳＸ86

調査区西端南部に位置する。四隅すべて陸橋をもつタイプの周溝墓で、今回の調査でこのタイプはＳＸ86だけである。墳丘部での規模は東西約7.3m、南北約9.6m。北周溝は長さ約5.6m、最大幅約1.19m最深部約0.3m。南周溝は長さ約4.4m、最大幅約1.2m、最深部約0.23m。東周溝の長さは不明。最大幅約1.3m、最深部約0.28m。西周溝は長さ約7.8m、最大幅約1.4m、最深部約0.13m。南北軸方向はN38°Ｗ。ＳＸ86の位置は調査区西側の谷（現在は町道）への落ち込みが始まっており、東周溝と西周溝では約0.5～0.6m程の比高差が見られる。削平も激しいため、周溝が浅く、断面形状は明らかでない。

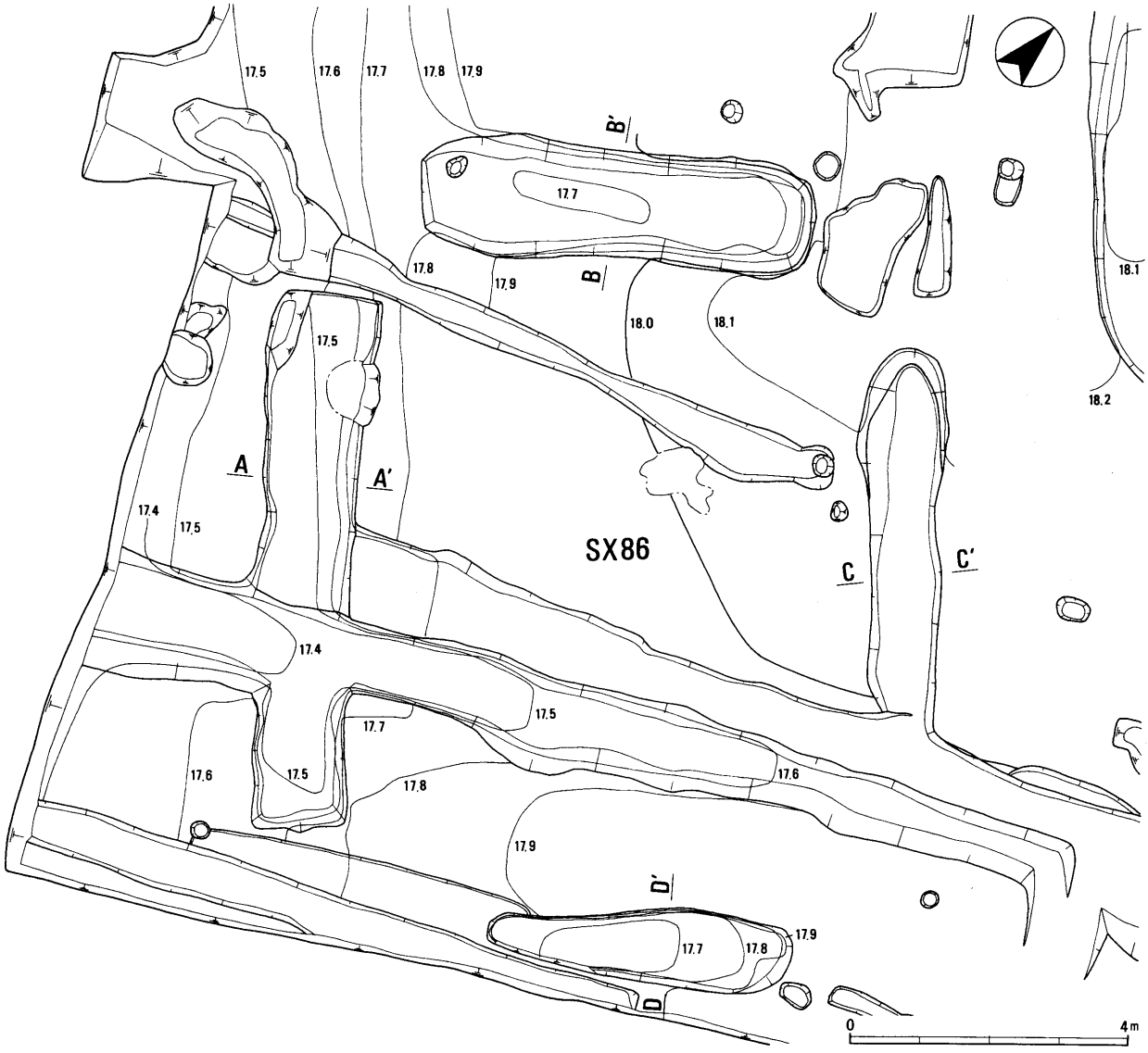
出土遺物　小片のため器形が不明なものが多いが、2～11は壺、12は甕である。2は口唇部に刻目、口縁部内面に垂下するヘラ描き沈線を持つ。3は頸部でヘラ描き沈線が巡る。4は体部で、削り出し突帯の上にヘラ描き沈線がなされる。5～10はいずれも

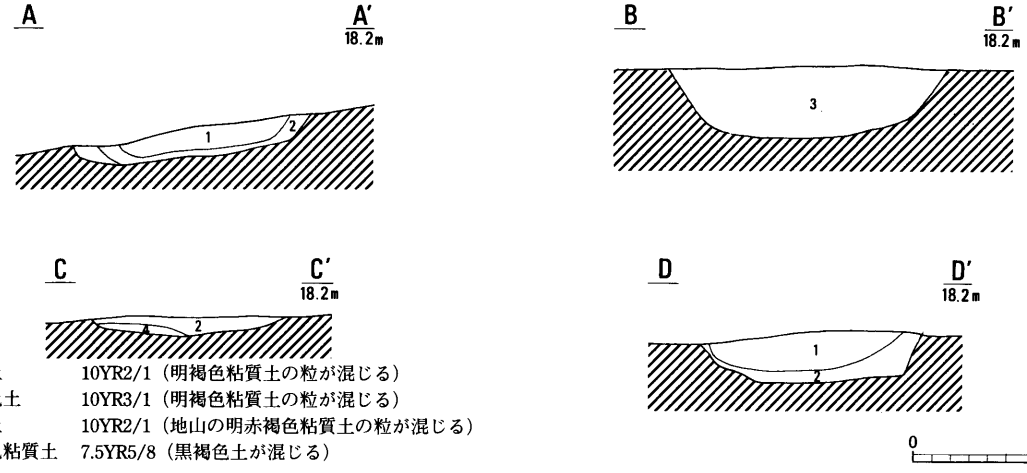


第７図　ＳＦ32・88・91実測図（１：20）



第8図　ＳＨ92実測図（１：50）・遺物出土状況図（１：20）





1．黒色土　10YR2/1（明褐色粘質土の粒が混じる）
2．黒褐色土　10YR3/1（明褐色粘質土の粒が混じる）
3．黒色土　10YR2/1（地山の明赤褐色粘質土の粒が混じる）
4．明褐色粘質土　7.5YR5/8（黒褐色土が混じる）

第９図　ＳＸ86実測図（１：100）・土層断面図（１：40）

壺肩部で、ヘラ描き沈線が施されるが、10のみは沈線の下に刺突が見られる。11はわずかに肥厚した口縁端部に沈線が巡り、口縁部内面に凹線をもつ。12には、半裁竹管による沈線が施される。

② 弥生時代中期

A．方形周溝墓

ＳＸ90

調査区西端北部に位置する。南部を検出したのみであるが、左右逆のＬ字状の周溝が見つかった。推測する墳丘部での規模は東西約6.0m、南北は不明。溝の最大幅約1.0m、最深部約0.3m。断面形状は舟底形。南北軸方向はＮ32°Ｗ。今回検出した他の墓と違い、西の方に陸橋部を持つが、前述のＳＸ86同様、調査区西の谷へ落ち込んで行く所に築かれているために削平が激しい。周溝は途切れず、調査区外の北へ伸びていた可能性も否定できない。土層の観察から周溝が交差するＳＸ89より古い方形周溝墓であることが判明している。

出土遺物　13・14は壺、15は甕である。13には半裁竹管によると思われる沈線、14は口縁部内面に凹線、15は口唇部に刻目を施す。

③ 弥生時代後期～古墳時代初期

A．竪穴住居

ＳＨ40

調査区中央部に位置する。東西約4.2m×南北約3.8mのほぼ正方形である。深さは約0.1m。南北軸方向はＮ38°Ｗ。壁周溝は全周する。４主柱穴で柱間は東西約1.7m、南北約1.8m。主柱穴の規模は径約0.25～0.37m、深さは約0.05～0.2m。東西の柱穴間の中央に径も深さも同様の柱穴が見られるが、ＳＨ40に伴うものであるかどうかは判然としない。中央部やや西寄りに長軸約0.3m、短軸約0.2mの範囲で炉の痕跡と思われる焼土が残る。南辺中央に長軸約1.0m、短軸約0.6m程の楕円形の貯蔵穴をもつ。

出土遺物　17は１辺が約23㎝、厚さ約1.8～5.9㎝程のほぼ正三角形の石皿と思われる石である。上述の貯蔵穴の西南隅で出土した。自然面を下にして置くと座りが良く、上面の２／３程は滑らかに摩滅している。砂岩製。

ＳＨ56

調査区ほぼ中央の南壁沿いに位置する。東辺はＳＤ47や撹乱で消滅し、南辺は調査区外南へ伸びるため検出できなかった。東西約5.5m以上、南北約5.0m以上と思われ、今回検出した竪穴住居の中で最大規模であったと推測される。深さは約0.15m程。南北軸方向はＮ31°Ｗ。壁周溝は北辺と、西辺の一部で確認できた。特に北辺の一部は２重に壁周溝が見られた。主柱穴は確認できなかった。

出土遺物　18は高杯の脚部、19は台付甕の脚部である。18は、内弯する脚部に櫛描横線文が入るものである。

ＳＨ61

調査区中央やや西寄りに位置する。東西南北共に約4.3mの正方形プランの住居である。深さは約0.1m。南北軸方向はＮ５°Ｅで、他の同時代の竪穴住居とやや方向を異にする。南辺の一部を除き、壁周溝が確認された。西北部1/2程で貼り床が残る。柱間が東西約2.8m、南北約2.3mの４主柱穴を推定するが、他の遺構・撹乱により一部は判然としない。主柱穴の規模は径約0.17m以上で、深さは約0.12m程である。住居中央南東寄りに長軸約0.3m、短軸約0.2mの範囲で炉の痕跡と思われる焼土が残る。

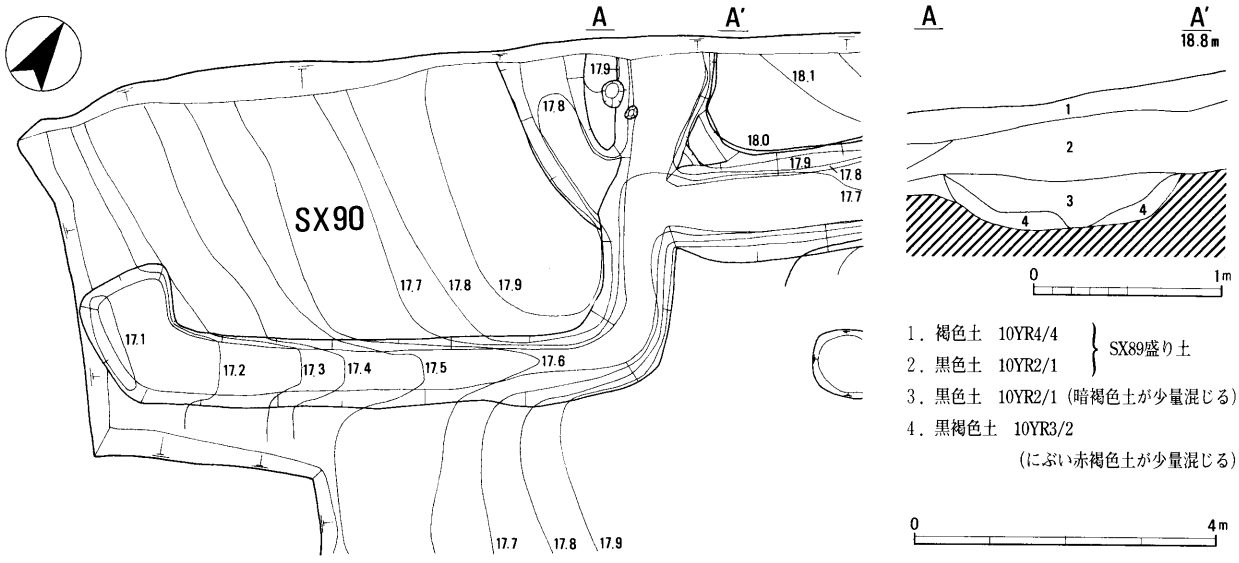
出土遺物　20～22は台付甕の脚部。23は橙色の高杯の脚部中位に３方向透かし孔が穿たれるもの。24は台付き壺の脚部で櫛歯刺突列と櫛描横線を持つ。

ＳＨ69

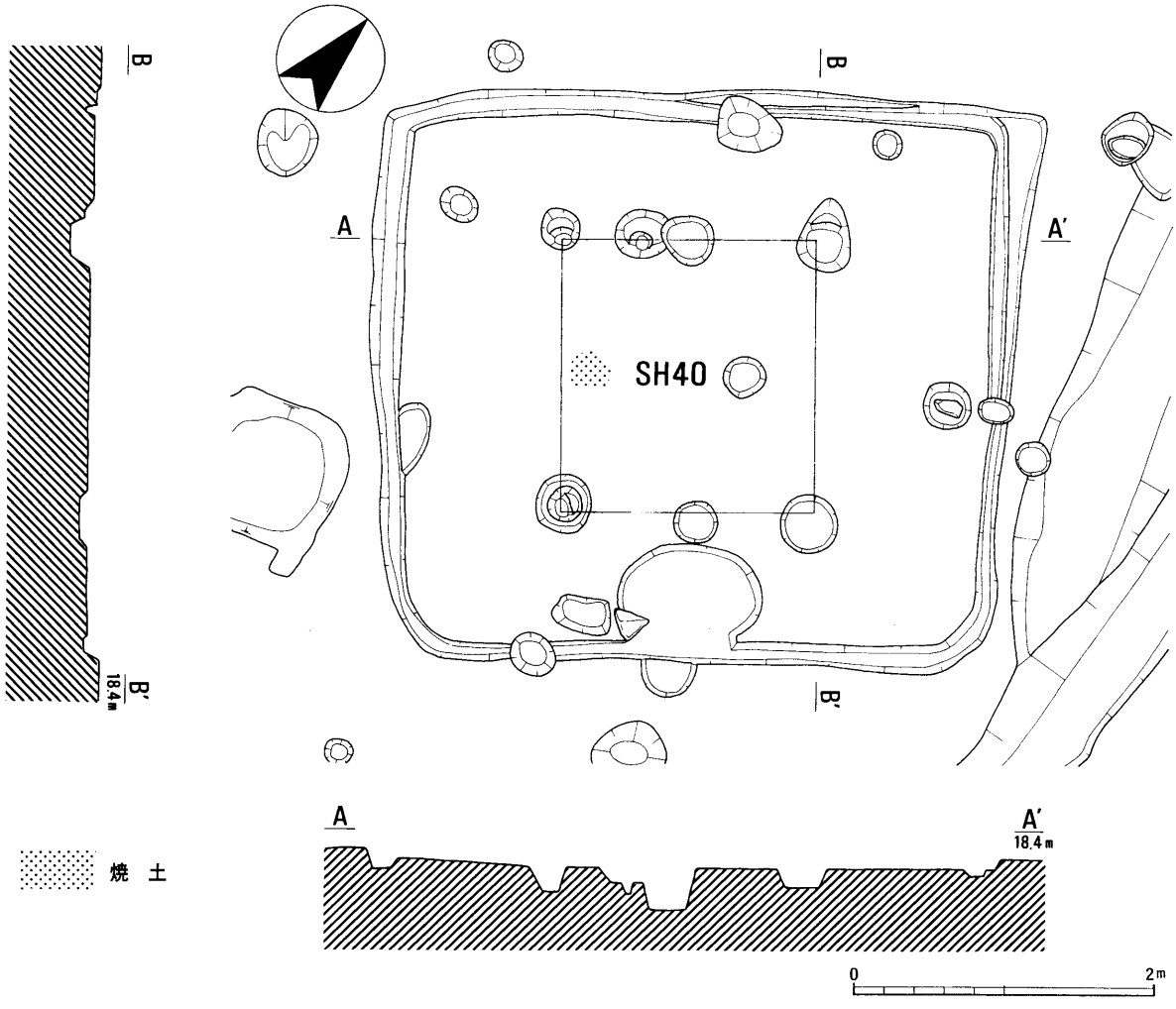
調査区中央やや西寄りに位置する。ＳＸ57とＳＸ62の周溝に大部分が削平されており、北辺が一部遺存している。主柱穴・壁周溝とも確認できなかった。上述のＳＨ40と同規模の一辺が約４m強の正方形プランの竪穴住居であったと推測する。深さは約0.2m、南北軸方向はＮ20°Ｗ。

ＳＨ72

調査区西方北部に位置する。ＳＸ62により東辺の様子は不明である。南北は約5.5m、東西約5.0m程のほぼ正方形プランの住居であったと推測する。深さは約0.2m。南北軸方向はＮ31°Ｗ。壁周溝は東辺以外の所々で途切れたものが確認できた。主柱穴は４ヶ所で確認でき、柱間は東西約2.2m、南北約2.3m。主柱穴の規模は径約0.3～0.4m。深さは約0.5～0.7mと他の竪穴住居と比べるとかなり深く、特に南にある２主柱穴からは根石が見つかった。



第10図　ＳＸ90実測図（１：100）・土層断面図（１：40）



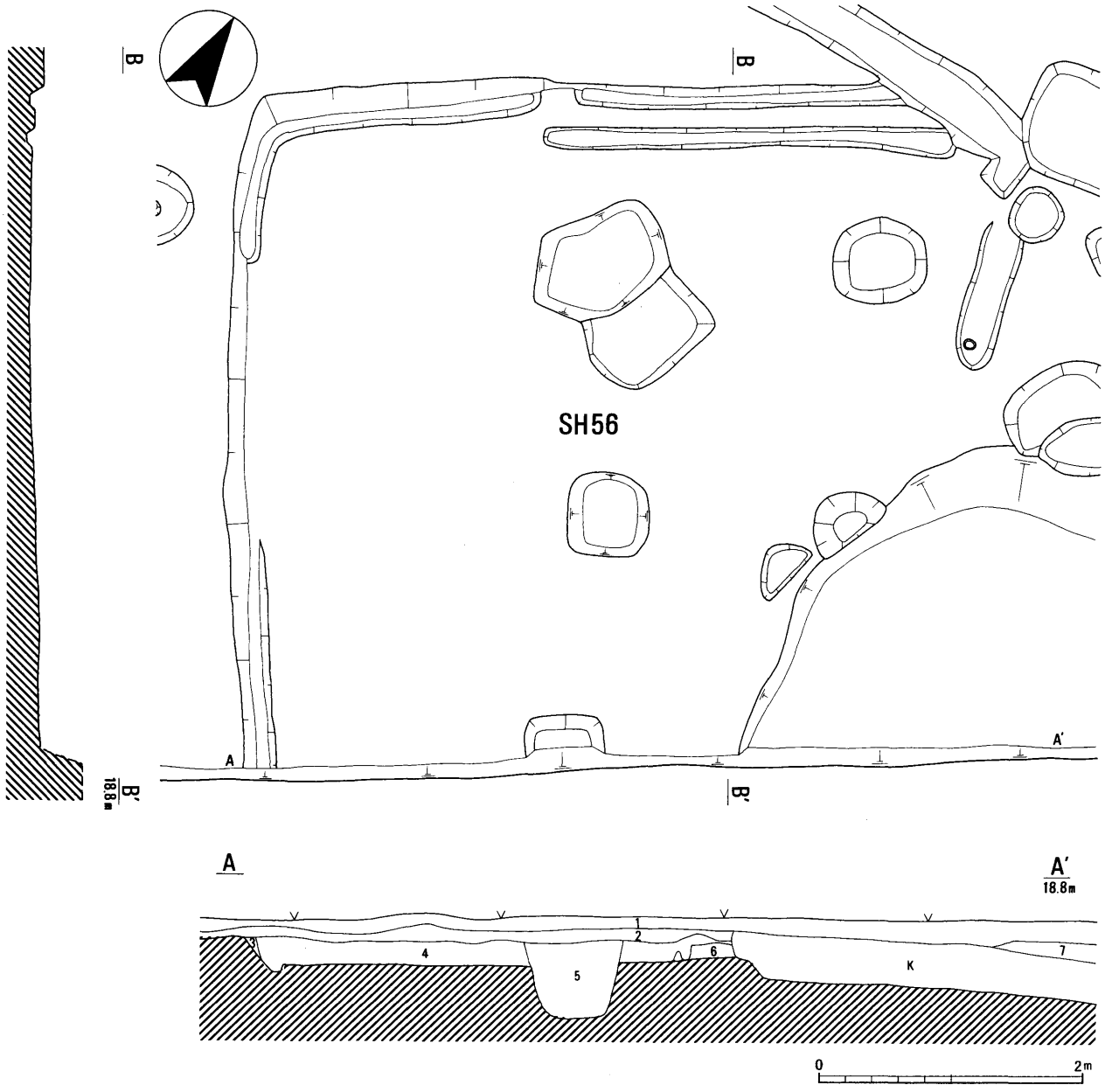
第11図　ＳＨ40実測図（１：50）

出土遺物　25は鉢の底部、26は台付甕か壺の脚部と考えられるが、26は前述の21・22に比べ、器壁がかなり薄く疑問もある。

B．方形周溝墓

ＳＸ７

調査区中央やや東よりに位置する。２本のＬ字形の周溝によって形成されており、北隅と南周溝中央に陸橋をもつ。周溝が２ヶ所途切れる方形周溝墓は今回の調査でこのＳＸ７だけである。西周溝の一部で周溝が確認できなかったが、ＳＨ33・35により削平されたものと考える。墳丘部の規模は東西約7.6m、南北約7.2m程と推測する。周溝の最大幅約1.0m、最深部約0.24mで、断面形状は周溝の内側が垂直に近い角度、外側は緩やかな角度で掘削されている。底面はほぼ平ら。南北軸方向はN28°W。遺物は少なく、正確な築造時期は不明である。しかし、南周溝に陸橋をもつことと、第２次調査の結果等から方形周溝墓は調査区の西方ほど古いと考えられることか



1．黒色土　10YR2/1　（小円礫が混じる）〔耕作土〕
2．にぶい黄褐色土　10YR5/6〔遺物包含層〕
3．褐色土　10YR4/4　　〔地山〕
4．黒色土　10YR2/1
5．黒色土　10YR1.7/1（３がブロック状に混じる）
6．褐色土　10YR4/4（黒褐色土が混じる）
7．灰黄褐色土　10YR4/2（明黄褐色土の粒が多く混じる）〔旧耕作土〕
K．撹乱

第12図　ＳＨ56実測図（１：50）

ら、この時期のものと推定する。

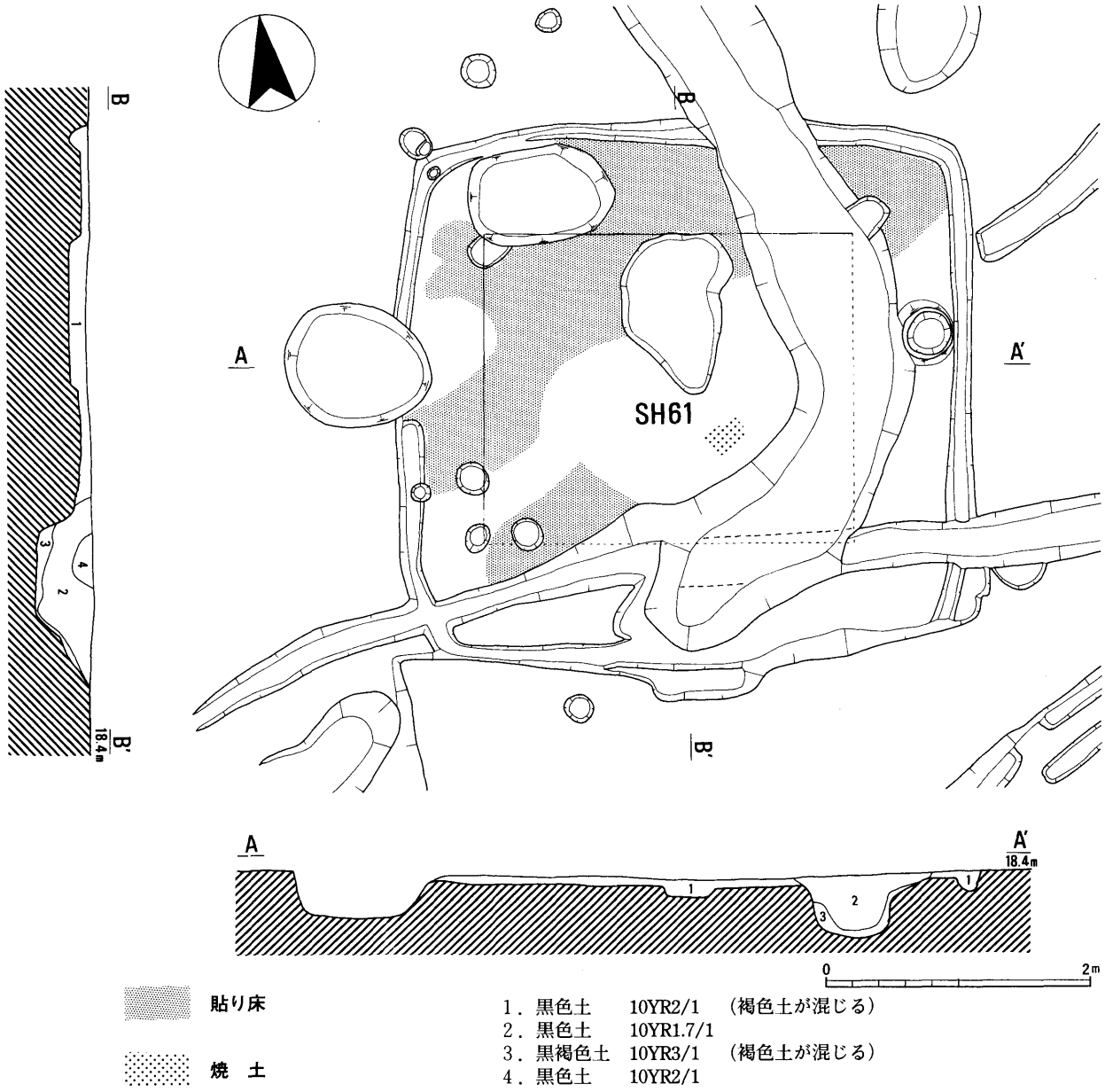
ＳＸ44

調査区中央北部に位置する。南部のみを検出した。南周溝はＳＤ47・49・50・51等の中世の溝によって切られているが、中央部に陸橋を持っていたと推測する。墳丘部での東西の規模は約6.8m。周溝の最大幅約1.1m、最深部約0.19m。断面形状は逆台形。南北軸方向はＮ13°Ｗ。他の周溝墓に比べ全体に周溝は浅く、陸橋に向かい屈曲する角度も鈍角なために方形周溝墓であるという確証はない。遺物も少なく、所属時期も不明であるが、西隣のＳＸ57と規模・方向が類似するため、この時期の方形周溝墓とした。

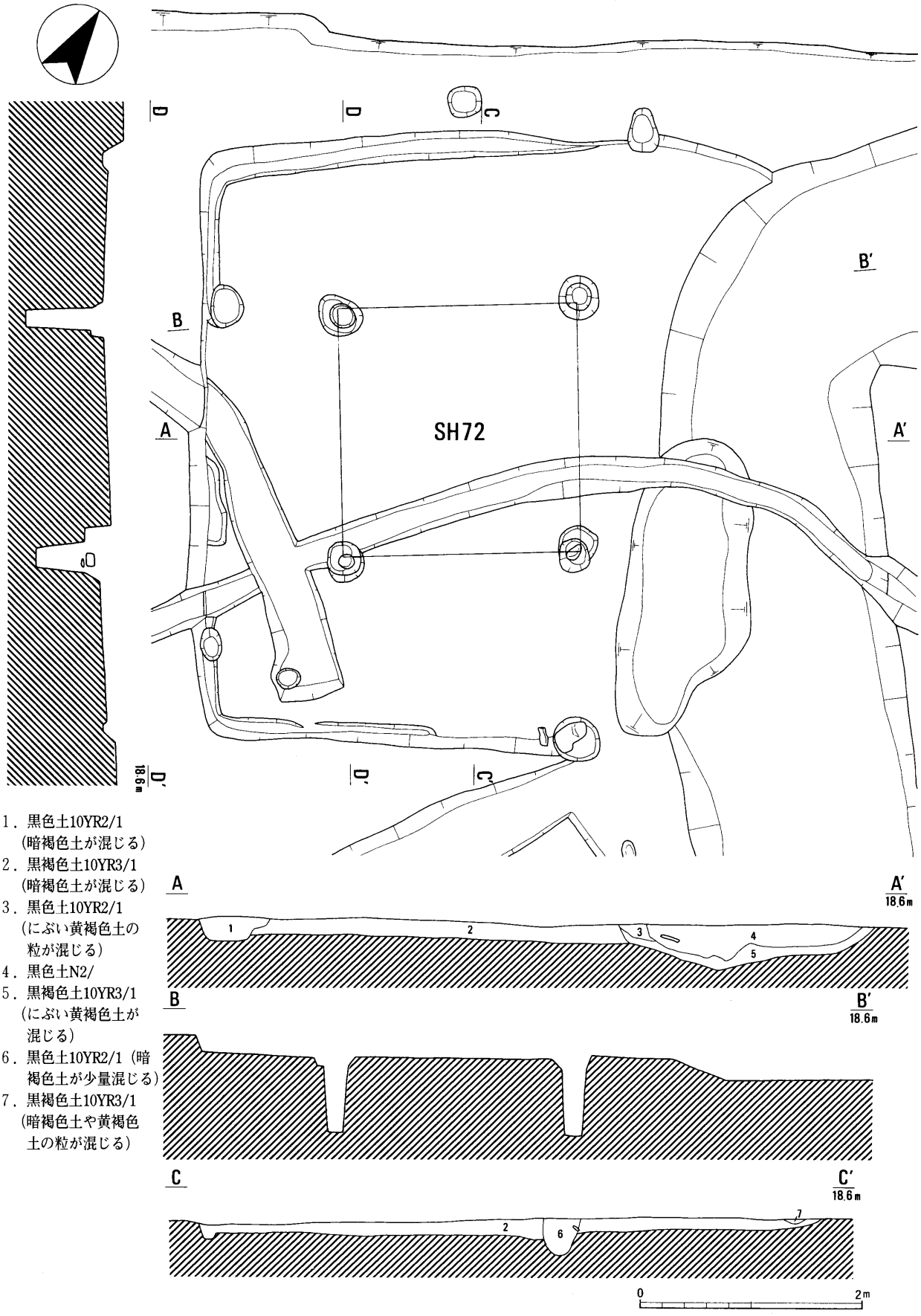
ＳＸ57

調査区西方北部に位置する。中世の溝のために周溝の南西隅付近ははっきりしないが、南周溝の中央部に陸橋を持つタイプのものと考える。墳丘部の規模は東西約7.4m、南北約7.2m。周溝の最大幅約1.14m、最深部約0.44m。断面形状は残りの良かった西周溝などは浅いＵ字形で、他の方形周溝墓に比べ幅の割に深いものであった。南北軸方向はＮ16°Ｗ。

出土遺物　27・28は同一の広口壺の上半部と下半部である。肩部内面にオサエ・ナデがなされ、他の部分はハケメが見られる。口縁部は肩部から口縁端部に向かってわずかに内弯する。29は長辺約25cm、



第13図　ＳＨ61実測図（１：50）



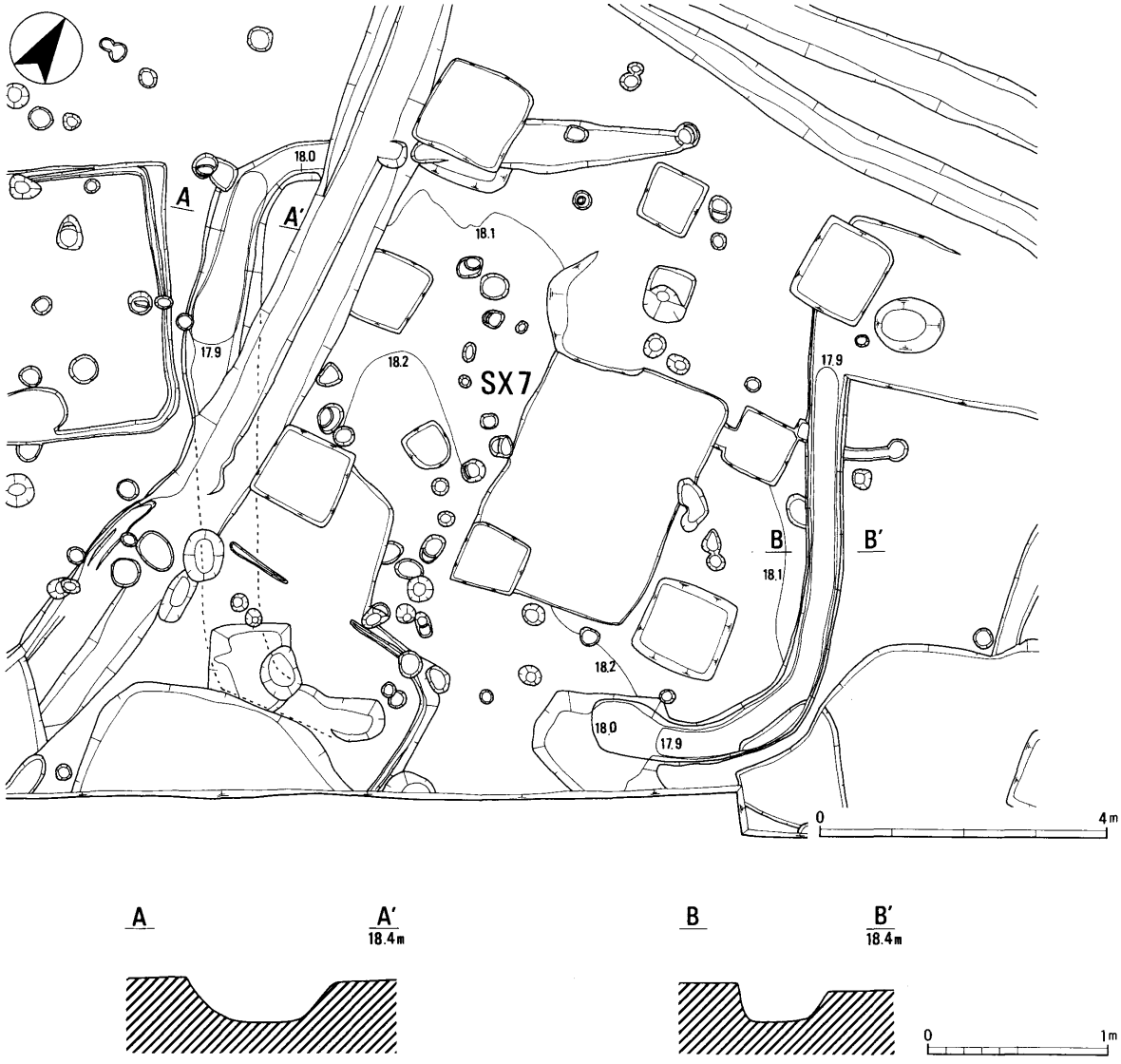
第14図　ＳＨ72実測図（１：50）

短辺約14.3cm、厚さ約7.2～8.2cm程の砂岩と思われる方形の石皿である。ＳＸ57東周溝の陸橋に近い屈曲部で出土した。両面共に自然面は平らで滑らかであるが、１方の面にのみ中央に点状に赤色顔料の付着が認められた。側面は１側面を除いて整形したと思われる。

ＳＸ62

調査区中央よりやや西に位置する。今回の調査で最大規模の周溝墓。南周溝の中央部に陸橋をもつタイプのものである。西周溝の一部がＳＸ74の東周溝と重複しており、切り合いは不明確である。墳丘部の規模は東西約11.3m、南北約11.8m。周溝の最大幅約2.7m、最深部約0.6m。断面形状は周溝の内側は垂直に近い角度、外側は緩やかな角度で掘削されている。底面中央がやや深い。南北軸方向はN36°W。

出土遺物　30～36・39～41は広口壺である。30～32の胴部は球形に近い。30は頸部に貼り付け突帯をし、刻目がなされる。口縁部はやや外反する。31・32は体部である。31は底部周辺を除き、外面に横方向にミガキ調整がなされる。32の外面はハケメが明瞭に残るものの、内面は剥離が激しい。30・31と比較するとかなり器壁は薄い。33・39は外反する口縁部で端部外面に２条の沈線が見られる。34の外面には垂下するヘラ描き沈線が、内面には櫛歯の刺突が見られ、口縁端部にも沈線が施される。35・36は頸部片で35は粘土貼り付け後、刻目を、同じく36は刺突を入



第15図　ＳＸ７実測図（１：100）・断面図（１：40）

れている。37・38は壺の肩部と思われ、櫛描横線と櫛歯の刺突がなされる。40・41は口縁端部に広い面をもつものである。41は口縁部が大きく外反し、頸部に櫛歯の刺突が入る。45は高杯の杯部で、内外面ともにミガキ調整を丁寧に行っている。47は24と同タイプの櫛歯刺突列と櫛描横線を持つ高杯の脚とした。51～53はミニチュア土器か。54は鉄鏃。腸抉柳葉式のものである。古墳時代前期から中期のものと思われる。55は長円形の底の平らな自然石を石皿として流用したものである。長径約38㎝、短径約24.5㎝、厚さ約7㎝。ＳＸ62南西周溝の陸橋に近い屈曲部で出土した。上面中央部に長さ約10㎝、幅約5㎝にわたり、赤色顔料を擦った跡が認められる。

ＳＸ74

調査区西方中央部に位置する。東から南の陸橋へ向けての周溝がＳＸ62の西周溝と重複する。北西隅が試掘坑のためにわからないが、南周溝の中央部に陸橋を持つタイプのものと考える。墳丘部の規模は東西約6.0m、南北約5.9m。周溝の最大幅約0.9m（ＳＸ62との共有部分を除く）、最深部約0.13m。断面形状は逆台形状で南北軸方向はN55°W。今回の調査で最も小規模な方形周溝墓である。周溝も浅く、特筆すべき遺物もなかった。

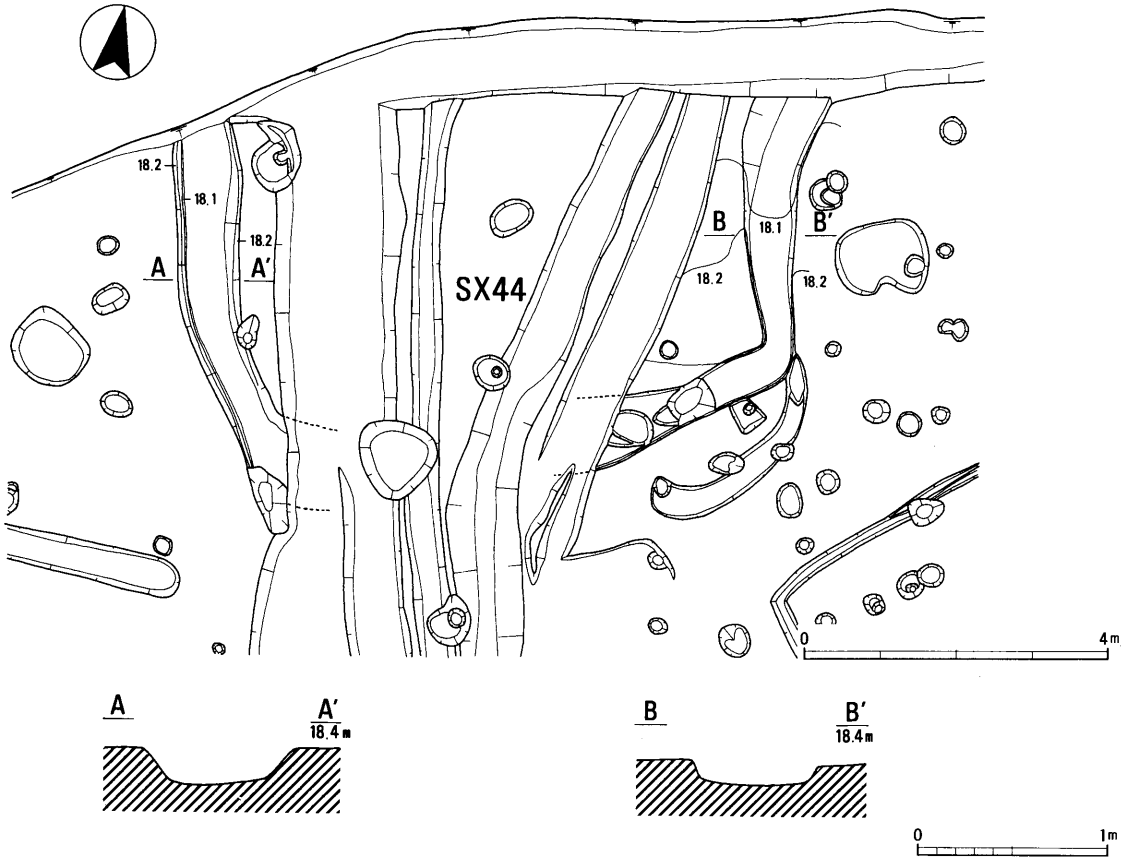
ＳＸ80

調査区西端南部に位置する。陸橋部がなく、周溝が一巡する今回の調査で唯一のタイプである。墳丘部の規模は東西約7.5m、南北約6.8m。周溝の最大幅約1.4m、最深部約0.33m。断面形状はＳＸ62同様、周溝の内側は垂直に近い角度、外側は緩やかな角度で掘削されている。南北軸方向はN32°W。北周溝と南周溝はＳＤ83によって、東周溝はＳＤ78によって切られている。

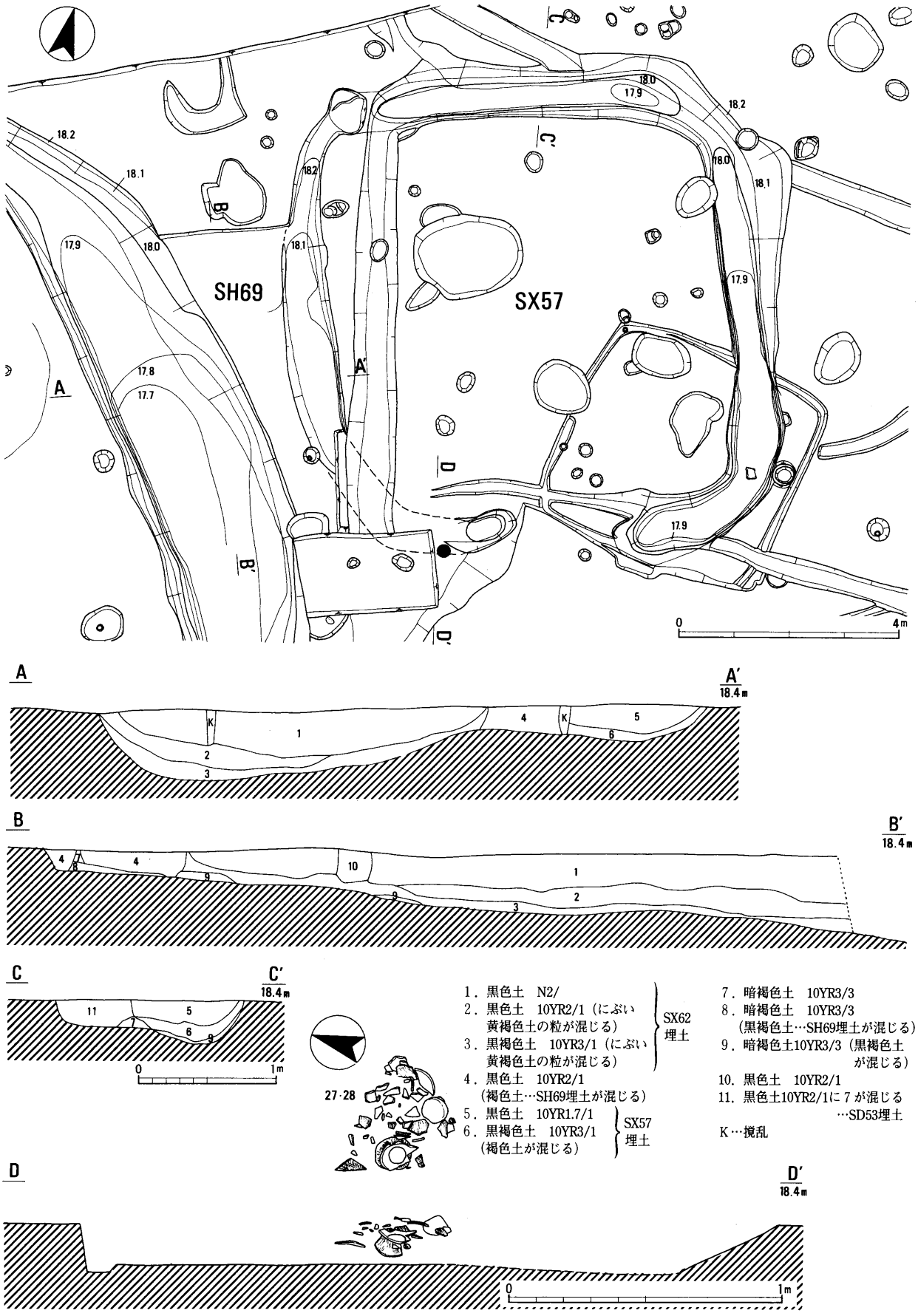
出土遺物　56は広口壺の口縁部で、口唇部に櫛歯羽状刺突列を施した後、それぞれ２つで一対をなす円形浮文と、帯状の粘土の貼り付けを縦に行い装飾している。57は橙色の短頸壺の口縁部か。58はＳ字口縁台付甕で山田編年[2]のＢ類に相当するものと思われる。

ＳＸ89

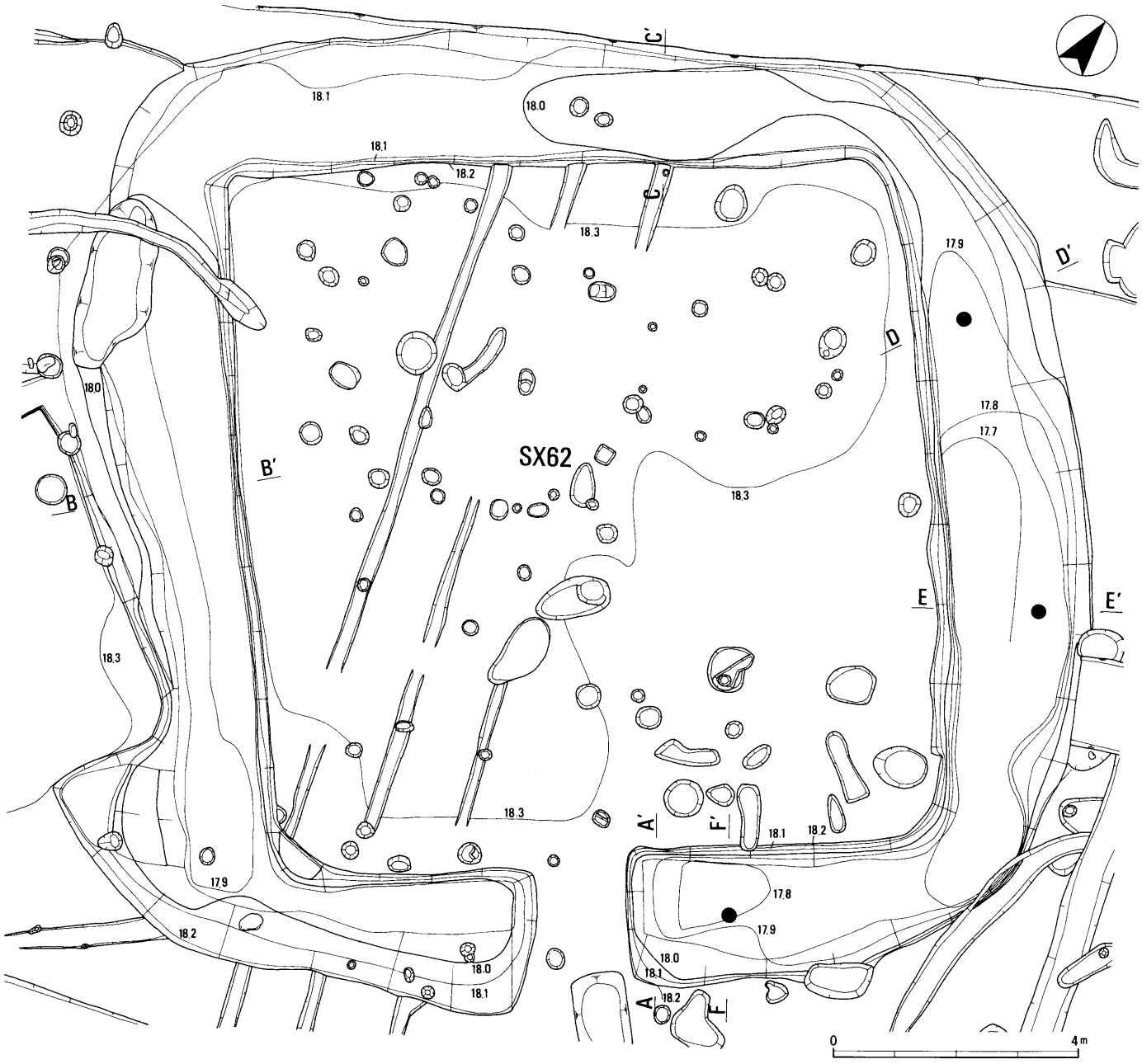
調査区西端北部に位置する。墳丘部が残存してお

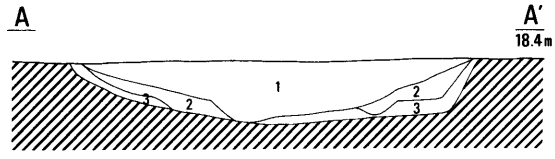


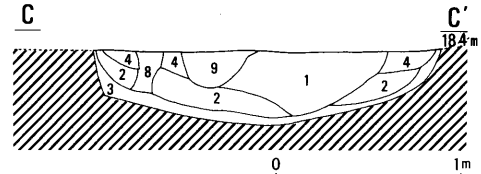
第16図　ＳＸ44実測図（１：100）・断面図（１：40）

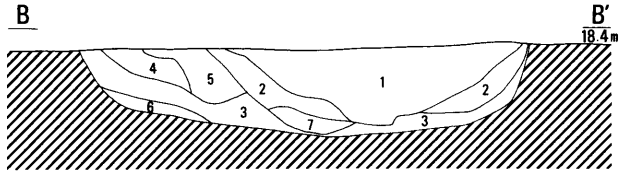


第17図　ＳＸ57・ＳＨ69実測図（１：100）・土層断面図（１：40）、ＳＸ57遺物出土状況図（１：20）



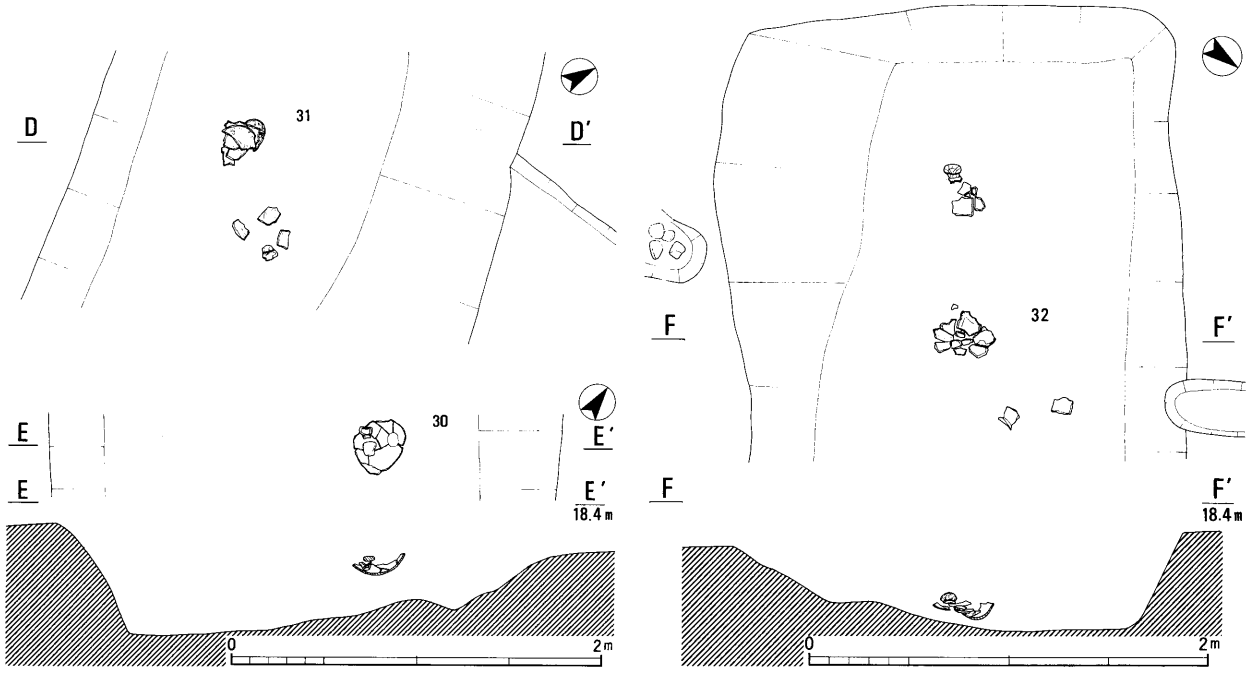




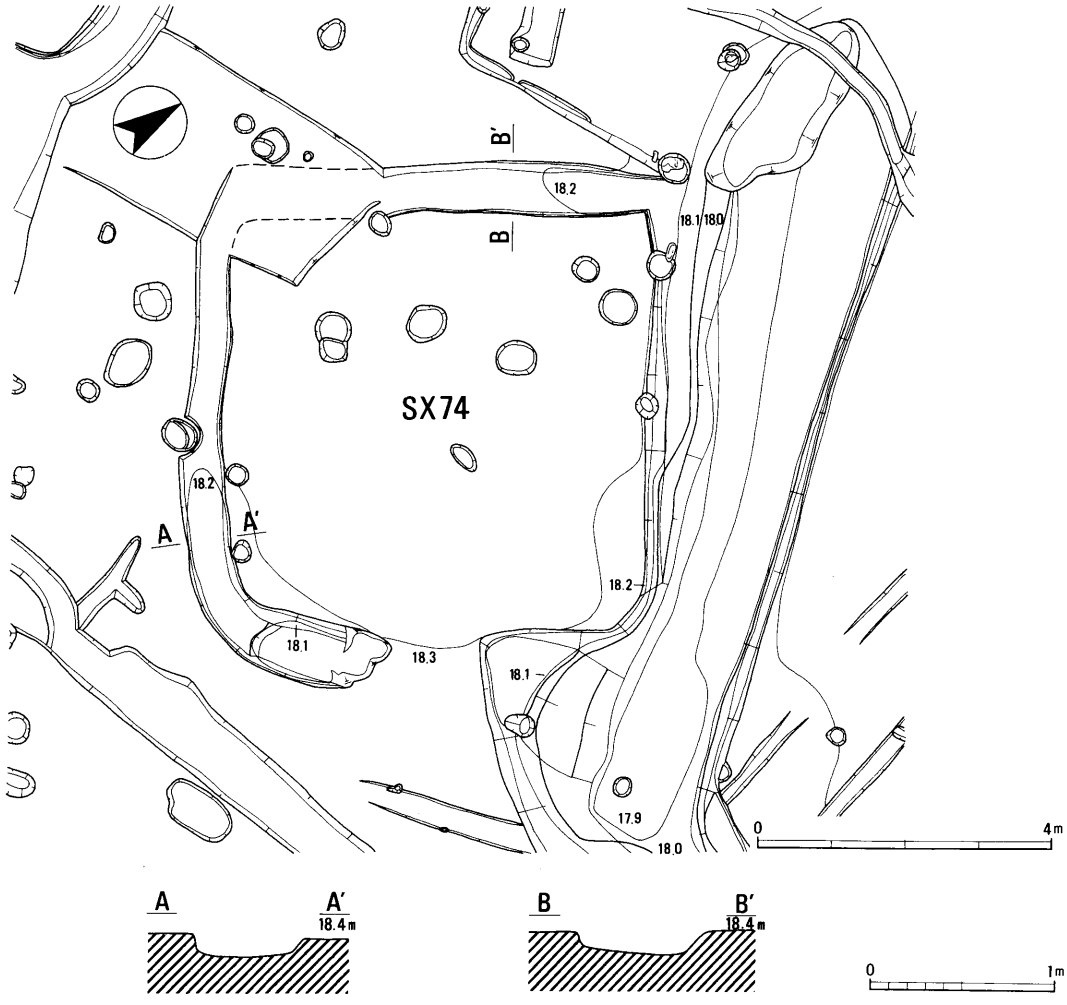


1．黒色土　N2/
2．黒色土　10YR2/1（にぶい黄褐色土の粒が混じる）
3．黒褐色土　10YR3/1（にぶい黄褐色土の粒が混じる）
4．黒色土　10YR2/1
5．4より灰色が強い黒色土
6．明黄褐色粘質土　10YR6/6〔地山〕
7．黒色土　10YR1.7/1
8．黒色土　10YR2/1（やや黒が強い）
9．黒色土　10YR2/1（やや灰色が強い）

第18図　ＳＸ62実測図（１：100）・土層断面図（１：40）



第19図　ＳＸ62遺物出土状況図（１：40）



第20図　ＳＸ74実測図（１：100）・断面図（１：40）

り、従来コドノ古墳として知られていたものであるが、調査の結果、盛り土の残る方形周溝墓と確認された。南部の一部を検出したのみであるが、南周溝の中央部に陸橋を持つことが判明した。墳丘部の規模は推測で一辺約10m程と思われる。高さは約1.0m程。周溝の最大幅約2.1m、最深部約0.4m。断面形状は逆台形状。南北軸方向はN36°W。

出土遺物　59は壺の肩部から体部で、青海波の文様を持つ。60・61は台付甕と思われ、60の外面には櫛歯の刺突がなされる。62は土製の紡錘車で、算盤玉形の断面形態のものである。

（3）古墳時代～奈良時代

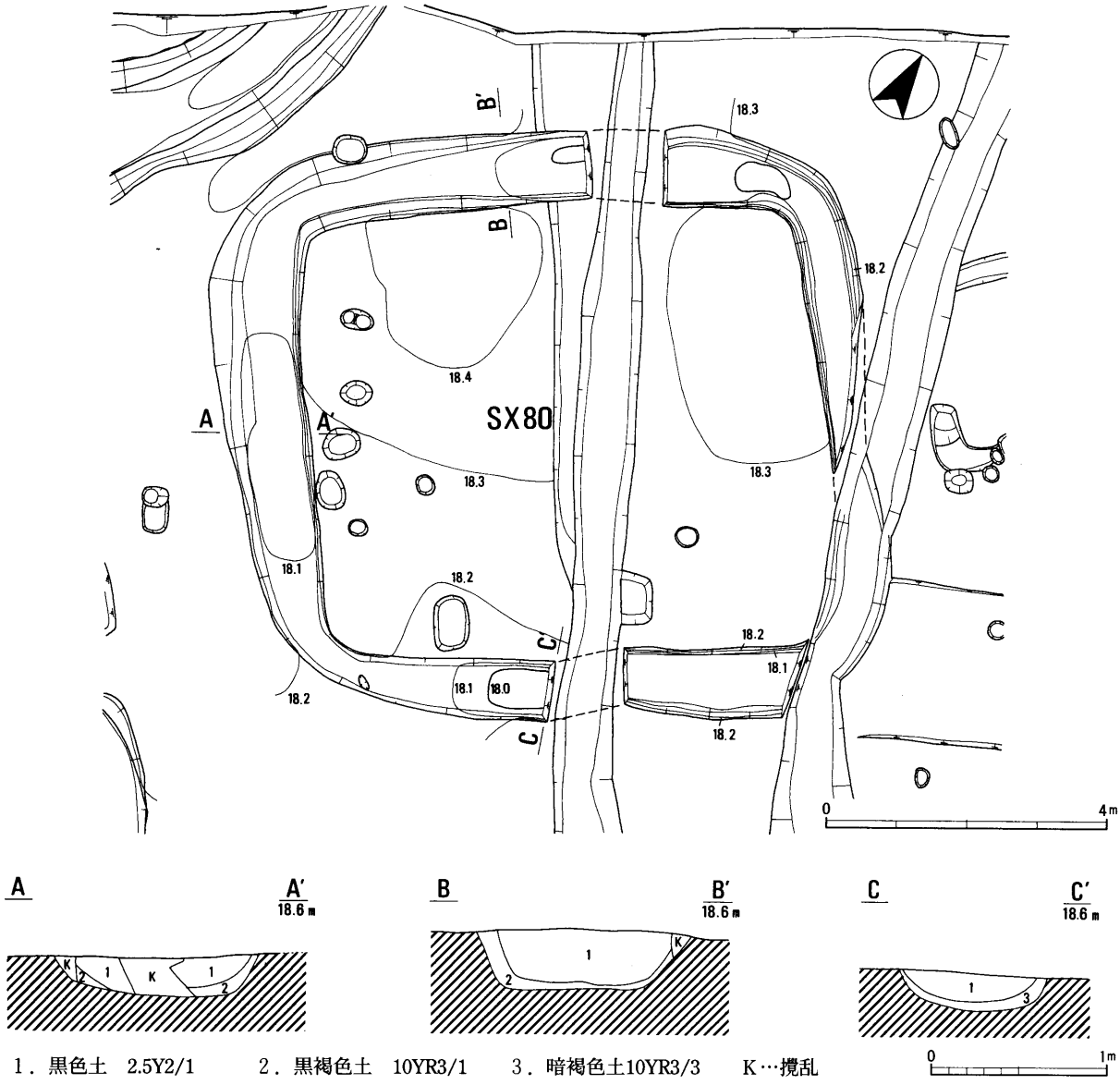
調査区東方南壁沿いに集中して竪穴住居4棟が確認された。

A．竪穴住居

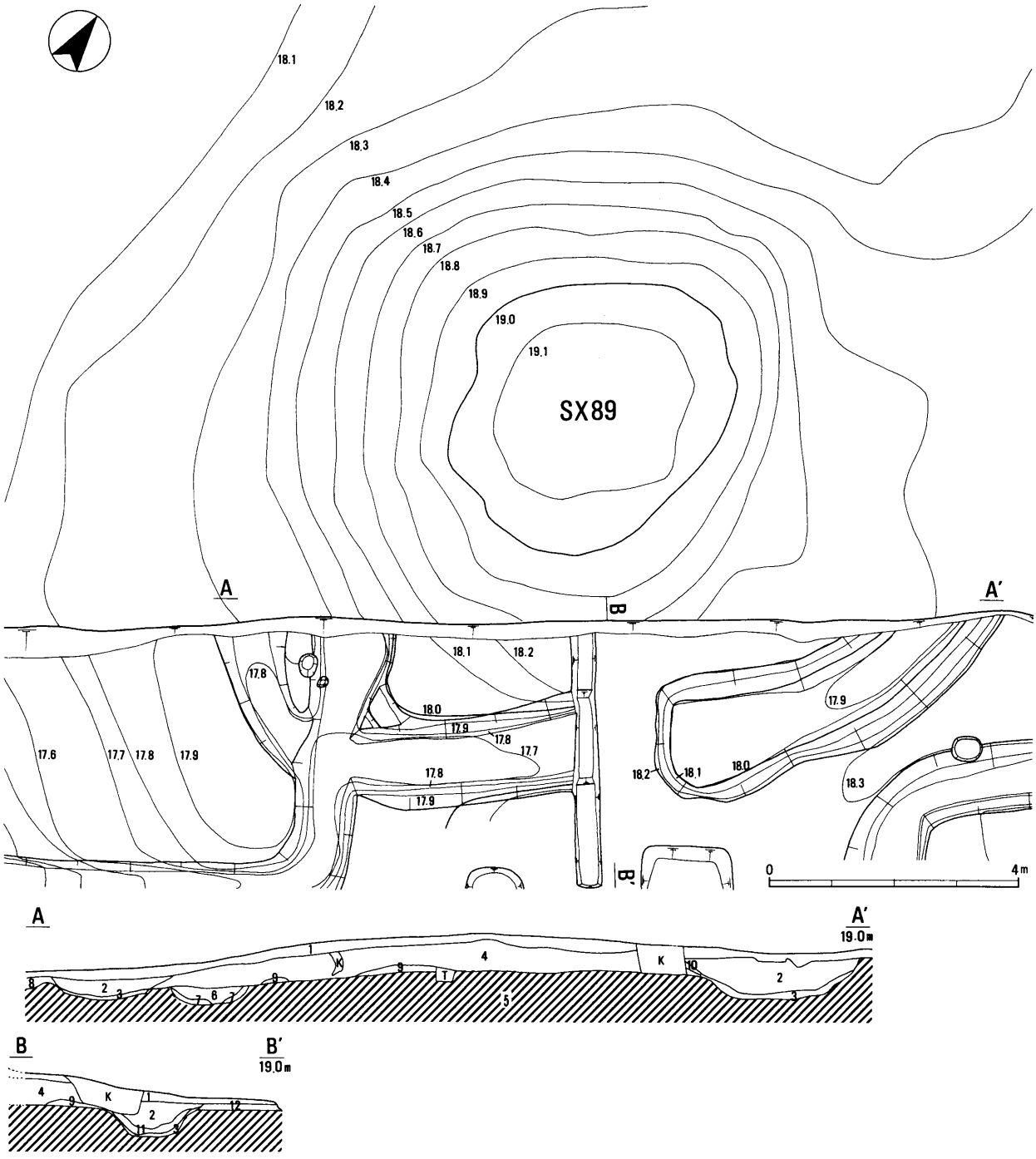
SH10

調査区東方南壁沿いに位置する。調査区外南へ伸びるため性格・規模共に明らかではないが、一辺約4m程度の隅丸の竪穴住居と考えた。検出面からの深さは約0.4mと深い。主柱穴・壁周溝とも確認できなかった。7～8世紀初め頃の建物と考える。

出土遺物　63は土師器の椀である。口縁部の立ち上がりは急で、端部は細くすぼまる。64・65は土師器甕の口縁部で、口縁端部は上方に立ち上げている。66は管状の土錘。



第21図　SX80実測図（1：100）・土層断面図（1：40）



1．褐色土　10YR4/4…SX89表土
2．黒褐色土　10YR2/2
3．黒褐色土　10YR3/2（にぶい赤褐色土が混じる）
} SX89 周溝埋土
4．黒色土　10YR2/1…SX89盛土
5．明赤褐色土　5YR5/8〔地山Ⅱ〕
6．黒色土　10YR2/1（暗褐色土が少量混じる）
7．黒褐色土　10YR3/2（にぶい赤褐色土が少量混じる）
} SX90 埋土
8．黒色土　2.5Y2/1
9．暗褐色土　10YR3/3
10．黒褐色土　10YR3/2
11．黒褐色土　10YR3/2（にぶい赤褐色土の粒が混じる）
} SX89 周溝埋土
12．褐色土　10YR4/4〔地山Ⅰ〕
K…攪　乱
T…トレンチ

第22図　ＳＸ89実測図（１：100）

ＳＨ35

調査区中央よりやや東寄りの南壁沿いに位置する方形の竪穴住居である。ＳＨ33・ＳＨ42・ＳＨ46などと重なっているが、南辺以外はほぼ遺存している壁周溝により、その存在が明らかになった。規模は東西約5.3m、南北は不明である。深さ約0.2m。南北軸方向はN°０Ｅ。主柱穴は特定できなかった。住居の時期は明らかではないが、須恵器が出土しており、重複するＳＨ33より先行するものである。

ＳＨ42

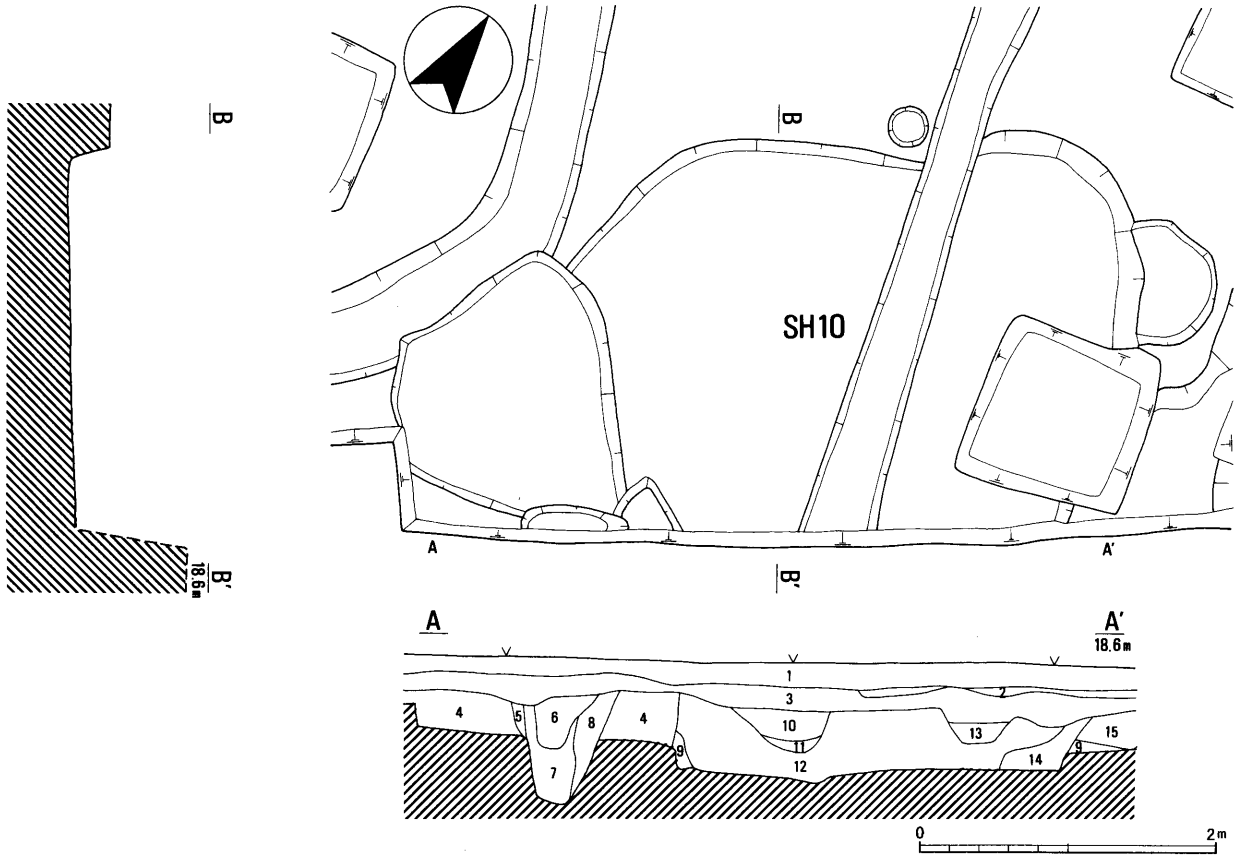
調査区中央よりやや東寄りの南壁沿いに位置する。調査区外南へ伸びるため性格・規模共に明らかではないが、一辺約３ｍ程度の隅丸の竪穴住居と考えた。中央部での深さは約0.8mと深い。主柱穴・壁周溝とも確認できなかった。出土遺物より古墳時代初めの建物と考える。

ＳＨ46

調査区中央やや東寄りの南壁沿いに位置する。調査区外南へ伸びることや他遺構との重複のため規模・形状は明らかでないが、東西については土層の観察から約3.3m程度と推測される。深さは約0.4m。主柱穴・壁周溝共に確認できなかった。遺物は少ないが、重複関係からＳＨ35・42よりは新しく、古墳時代のものと考える。

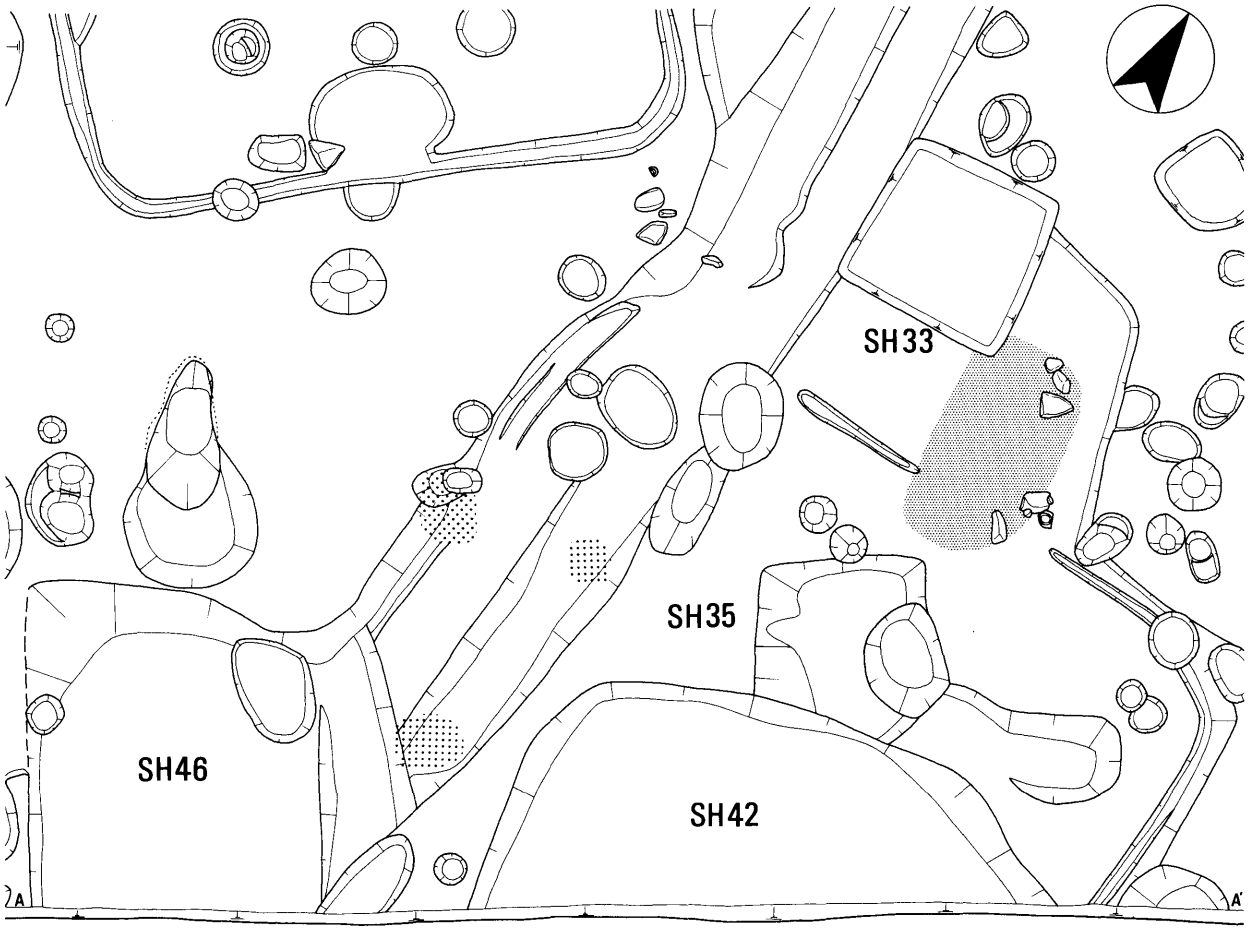
（４）平安時代末期～鎌倉時代初期

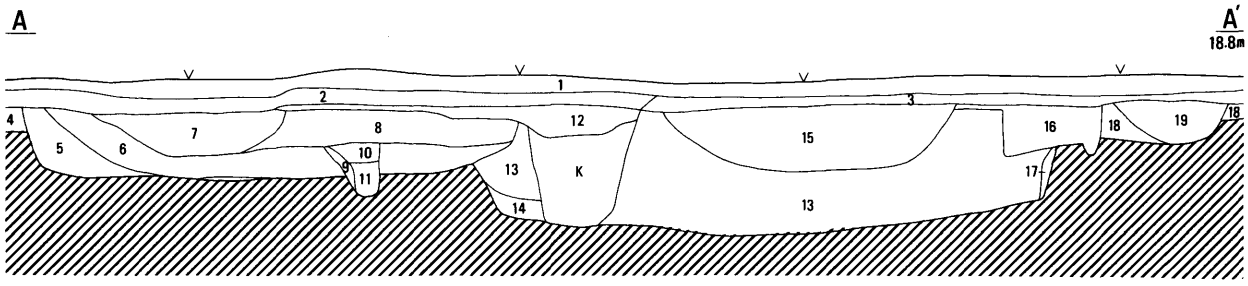
掘立柱建物は、調査区の東方で１棟確認しただけだが、東端にも根石を伴う柱穴が見られ、この辺りは中世の遺構が広がっている可能性が考えられる。



1．黒色土　10YR2/1（小円礫が混じる）〔耕作土〕
2．黒褐色土　10YR3/2（堅くしまり少量の遺物含む）〔旧耕作土〕
3．にぶい黄褐色土　10YR4/3〔遺物包含層〕
4．褐色土　10YR4/4
5．褐色土　10YR4/4（黒色土が混じる）
6．黒色土　10YR2/1（黄褐色土が混じる）
7．黒色土　2.5Y2/1（黄褐色土が粒状に混じる）
8．黒褐色土　10YR3/2（多くの黄褐色土が混じる）
9．黄褐色土　10YR5/6（黒色土が混じる）
10．黒色土　2.5Y2/1（黄褐色土がブロック状に混じる）
11．黒褐色土　2.5Y3/1（黄褐色土がブロック状に混じる）
12．黒色土　10YR2/1（黄褐色土がブロック状に混じる）
13．黒褐色土　10YR2/3
14．黒色土　10YR2/1（暗褐色土が混じる）
15．黒褐色土　10YR2/2

第23図　ＳＨ10実測図（１：50）

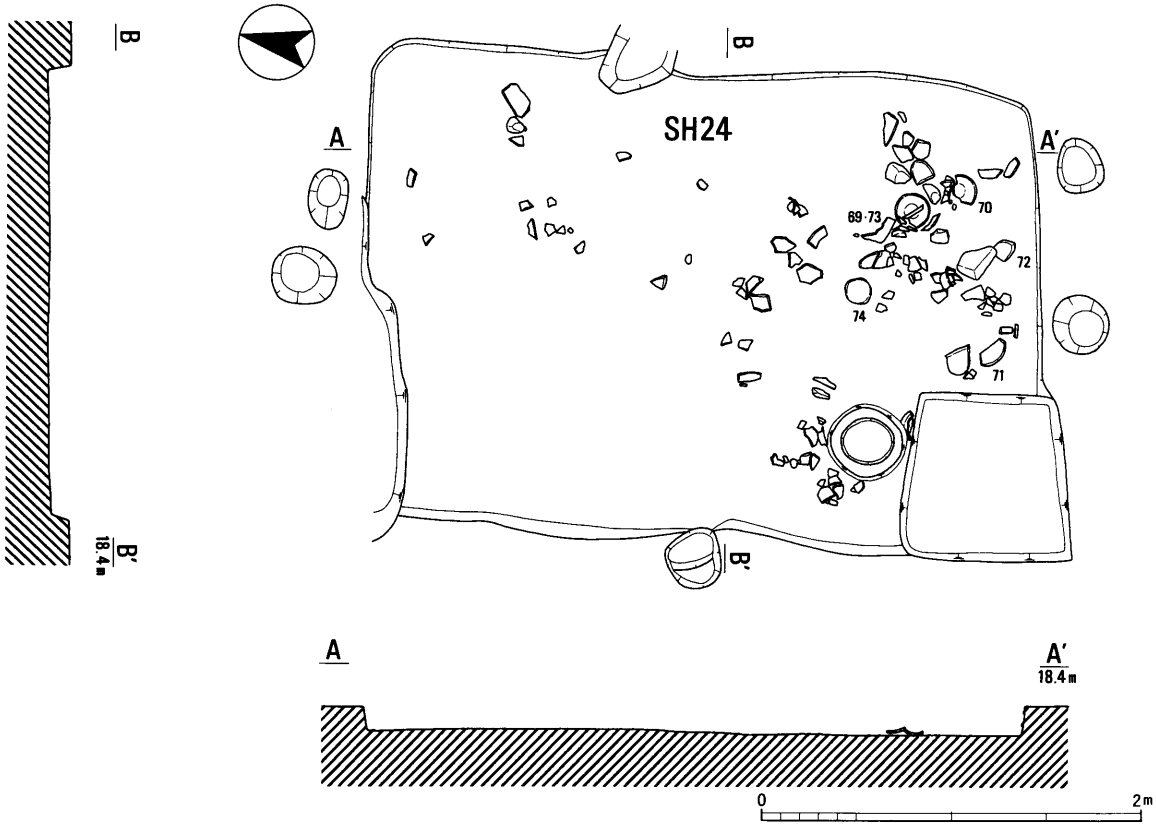




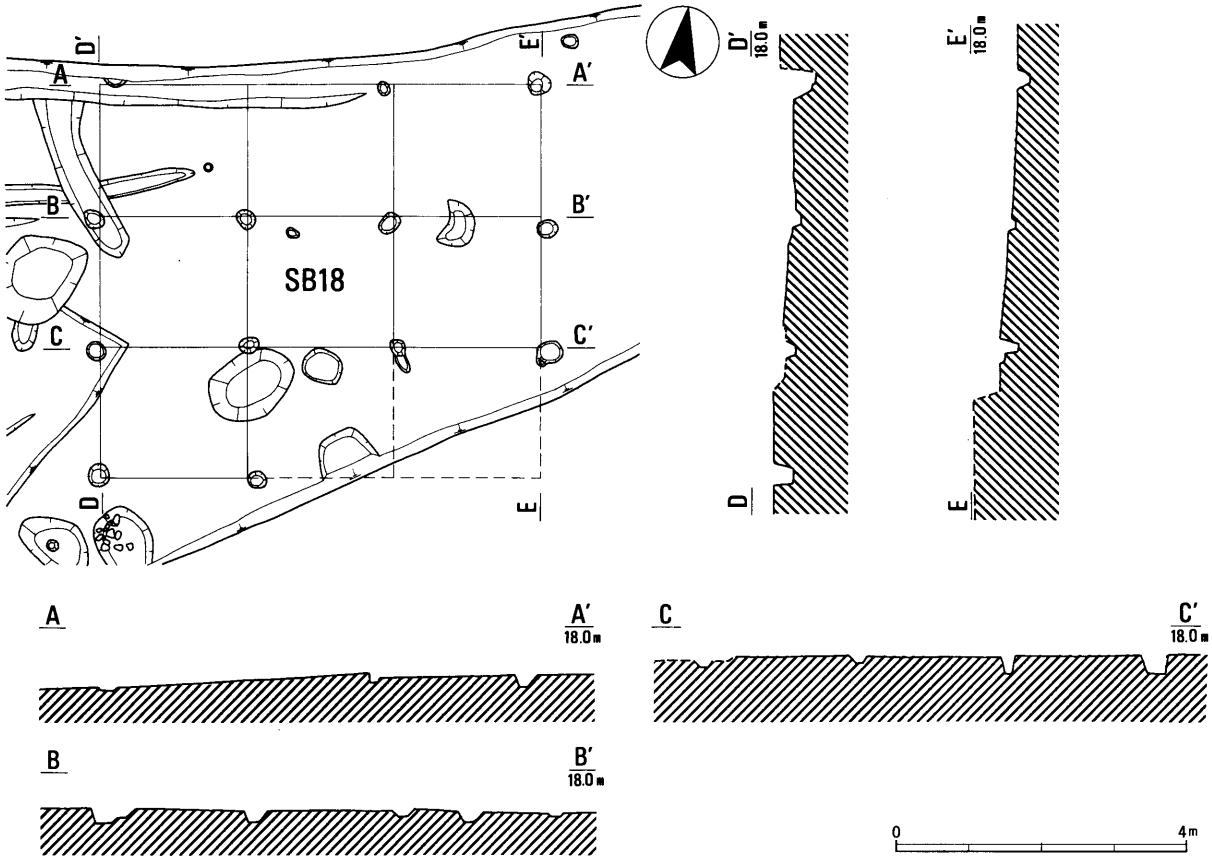
焼　土　　貼り床

1．黒色土　10YR2/1（小円礫が混じる）〔耕作土〕
2．黒褐色土　10YR3/2（堅くしまり少量の遺物含む）〔旧耕作土〕
3．にぶい黄褐色土　10YR4/3〔遺物包含層〕
4．黒褐色土　10YR2/2
5．黒色土　10YR2/1（黄褐色土が混じる）
6．黒色土　2.5Y2/1
7．黒褐色土　2.5Y3/1
8．黒褐色土　10YR3/1（明黄褐色土の粒が少量混じる）
9．黒色土　5Y1.7/1（黄褐色土が混じる）
10．黒色土　5Y2/1
11．黒色土　7.5YR1.7/1
12．灰黄褐色土　10YR4/2（明黄褐色土の粒が多く混じる）〔旧耕作土〕
13．黒色土　10YR1.7/1
14．黒褐色土　10YR2/2（黄褐色土が混じる）
15．灰褐色土　10YR4/2
16．黒褐色土　10YR3/2（褐色土が粒状に混じる）
17．黒色土　10YR1.7/1（黄褐色土が混じる）
18．黒褐色土　5YR3/1（褐色土が混じる）
19．黒色土　10YR2/1（褐色土が混じる）
K…撹乱

第24図　ＳＨ33・35・42・46実測図（１：50）



第25図　ＳＨ24実測図（１：40）



第26図　ＳＢ18実測図（１：100）

遺構名	規模（m）（東西×南北）	南北軸方向	周溝（cm）		陸橋部位置	時　　期	備　　考
			最大幅	最深部			
ＳＸ７	7.6×7.2	N28°W	100	24	北隅・南中央	不明	
ＳＸ44	6.8×不明	N13°W	110	19	不明	不明	
ＳＸ57	7.4×7.2	N16°W	114	44	南中央	弥生時代末～古墳時代初め	
ＳＸ62	11.3×11.8	N36°W	270	60	南中央	弥生時代末～古墳時代初め	
ＳＸ74	6.0×5.9	N55°W	90	13	南中央	弥生時代末～古墳時代初め	
ＳＸ80	7.5×6.8	N32°W	140	33	なし	弥生時代末～古墳時代初め	
ＳＸ86	7.3×9.6	N38°W	119	30	北隅・南隅 西隅・東隅	弥生時代前期	
ＳＸ89	10×10（推定）	N36°W	210	40	南中央	弥生時代末～古墳時代初め	墳丘が残る。墳丘の高さ約１m。旧称コドノ古墳。
ＳＸ90	6.0×不明	N32°W	100	30	西中央？	弥生時代中期	

第１表　方形周溝墓一覧表

遺構名	規模（m）（東西×南北）	平均深さ（cm）	南北軸方向	焼土の位置	主柱穴掘形			主柱間		時　期	備　　考
					形状	径(cm)	深さ(cm)	東西(m)	南北(m)		
ＳＨ10	一辺約４（推定）	40	N32°W（推定）	－	－	－	－	－	－	７～８世紀	北方のみ検出
ＳＨ24	2.5×3.5	15	N０°E	－	－	－	－	－	－	12世紀前半	床面に土師器鍋・山茶椀等が散乱
ＳＨ33	2.5～3.5（推定）	15	N０°E	－	－	－	－	－	－	13世紀	南方はＳＨ35と重複する 中央部に貼り床遺存
ＳＨ35	5.3×不明	20	N０°E	－	－	－	－	－	－	古墳時代か	北・東・西辺に壁周溝あり
ＳＨ40	4.2×3.8	10	N38°W	中央やや西寄り	円　形	25～37	5～20	1.7	1.8	弥生時代後期	壁周溝は全周する 南辺中央に貯蔵穴
ＳＨ42	一辺約３（推定）	80	N33°W（推定）	－	－	－	－	－	－	古墳時代初め	北方のみ検出
ＳＨ46	3.3×不明	40	N33°W（推定）	－	－	－	－	－	－	古墳時代	北方のみ検出
ＳＨ56	5.5以上×5.0以上	15	N31°W	－	－	－	－	－	－	弥生時代後期	北方と西方に壁周溝あり
ＳＨ61	4.3×4.3	10	N５°E	中央やや南東寄り	隅丸長円形	17以上	12	2.8	2.3	弥生時代後期	壁周溝は全周する
ＳＨ69	一辺約４（推定）	20	N20°W	－	－	－	－	－	－	弥生時代後期	北方のみ残存
ＳＨ72	不明×5.5	20	N31°W	－	円　形	30～40	50～70	2.2	2.3	弥生時代後期	北方・南方・西方に壁周溝あり。一部の主柱穴に根石あり
ＳＨ92（円形）	6.6	－	－	－	円　形 楕円形	25～75	６～33	145～220		弥生時代前期	住居内に据え置かれた弥生前期の大型の甕あり

第２表　竪穴住居一覧表

A．竪穴住居

ＳＨ24

調査区中央部よりやや東寄りに位置する。東西約2.5m、南北約3.5mの長方形の竪穴で、深さは約0.15m程である。南北軸方向はＮ0°Ｅ。壁周溝・主柱穴は確認できなかった。南部の床面で土師器鍋や山茶椀が散乱した状態で確認された。遺物には凹み石も含まれており、規模から考えても住居ではなく、工房のようなものであった可能性も考えられる。12世紀前半のものである。

出土遺物　67～69は土師器の甕の口縁部から胴部にかけてで、いずれも胴部の外面には指オサエ、内面には工具ナデが見られる。70～73は渥美産の山茶椀で藤澤編年[3]（以下略し、型式のみを記述）の第４型式に相当するものと思われる。74は直径約15cm、厚さ5.2cm程の凹石である。両面共に使用された跡が残る。全面に多くのススが付着し、熱によるものか２つに割れていた。

ＳＨ33

調査区中央部よりやや東寄りに位置する。南部はＳＨ35と重複し、西部はＳＤ37・38や撹乱によって削平されているため規模は明らかでない。いずれにせよ、あまり大きくはない方形の竪穴であったと思われる。深さ約0.15m。壁周溝・主柱穴は確認出来なかった。南北軸方向はＳＨ24・ＳＨ35と同様と思われる。床面の一部で貼り床が遺存しており、その付近からは山茶椀や子供の人頭大の河原石数個が出土した。13世紀の建物と考えられる。

出土遺物　75・76は渥美産の山茶椀で第６型式に相当すると思われる。

B．掘立柱建物

ＳＢ18

調査区東部に位置する。調査区外に伸びる可能性もあるが、桁行３間（約5.4m）以上、梁行３間（約6.0m）の総柱建物である。柱間桁行約1.7～2.0m、梁行約2.0m。柱穴の規模は径約0.15～0.35m、深さは約0.05～0.26m。南北軸方向はＮ10°Ｗ。出土遺物は少ないが、13世紀前後の建物と考える。

C．土坑

ＳＫ20・27

出土遺物　77･78はいずれも土師器の皿でいずれも13世紀前後のものと思われる。

D．溝

ＳＤ22

調査区中央やや東を、南から北の段丘端に向かって幅を広げながら流れる溝である。幅は約1.8～3.7m。深さは約0.5～1.5m。検出した部分の内、南から2/3程は、河原石が厚さ約0.2～0.4m程堆積していた。その性格は不明である。石に混じり、様々な時代の遺物が出土している。

出土遺物　87は青磁椀の底部。88は第５型式の山茶椀である。

ＳＤ47

出土遺物　79は土師器の鍋である。口縁端部の上端にヨコナデが施され、折り返し部分の形状が断面三角形状になる。伊藤編年[4]の第２段階に相当するものと思われる。80～82は渥美産の山茶椀で80・81は第５型式、82は第６型式か。83は陶器の鉢の底部で、土師器鍋・山茶椀と同時期のものと思われる。

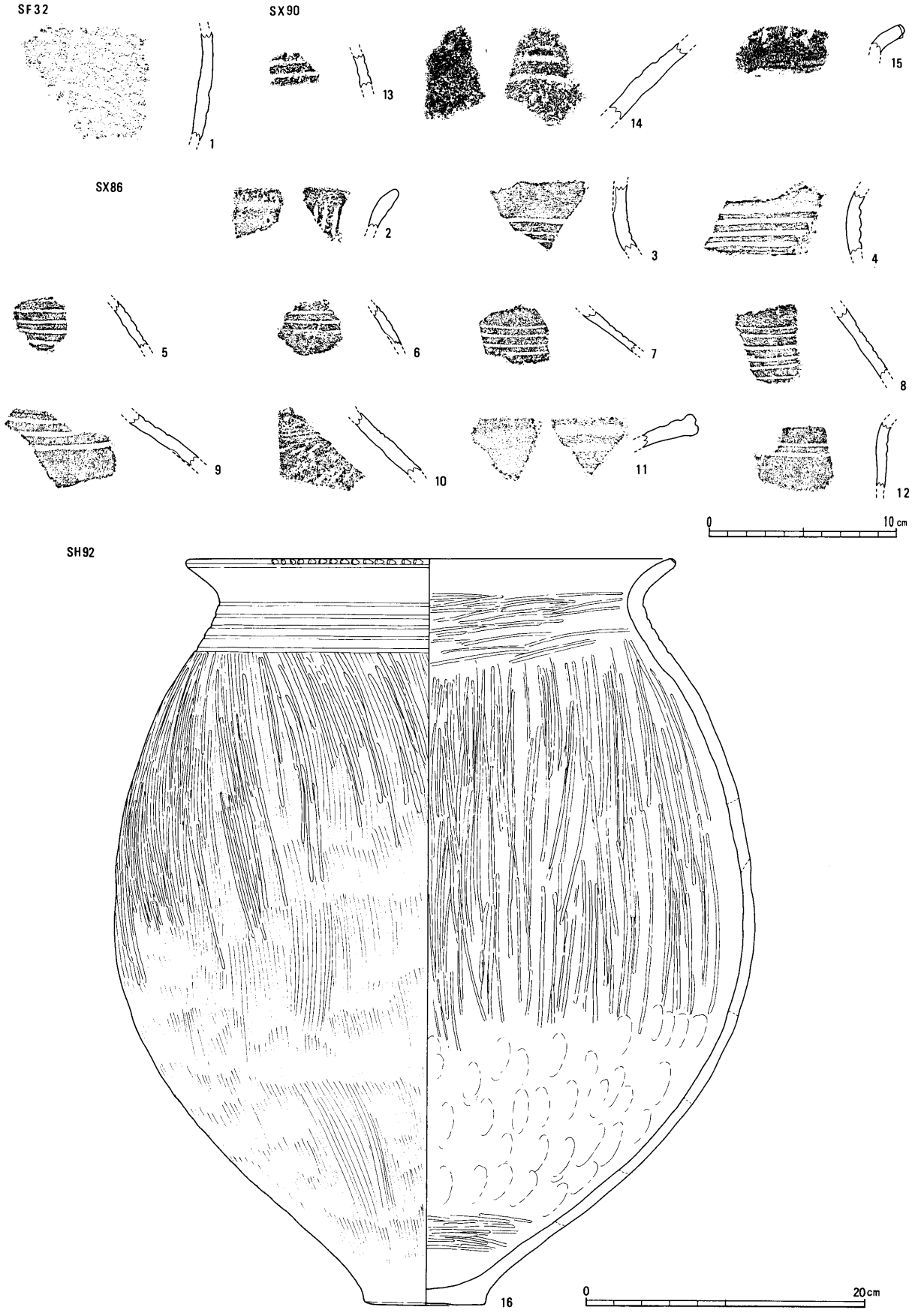
ＳＤ１・４・37・78・83

出土遺物　84は渥美産の第６型式の山茶椀。体部外面に「真」か「奥」と思われる文字の下半部が、底部外面に判読不明の花押が墨書されている。ＳＤ１出土。85・86はＳＤ４出土の渥美産の第６型式と思われる山茶椀。89は同じく第５型式と思われる山茶椀でＳＤ37出土。90は第６型式の山皿でＳＤ78出土。91・92はＳＤ83の出土遺物。91は第６型式と思われる渥美産の山茶椀。92は13世紀前半の常滑産片口鉢の底部か。

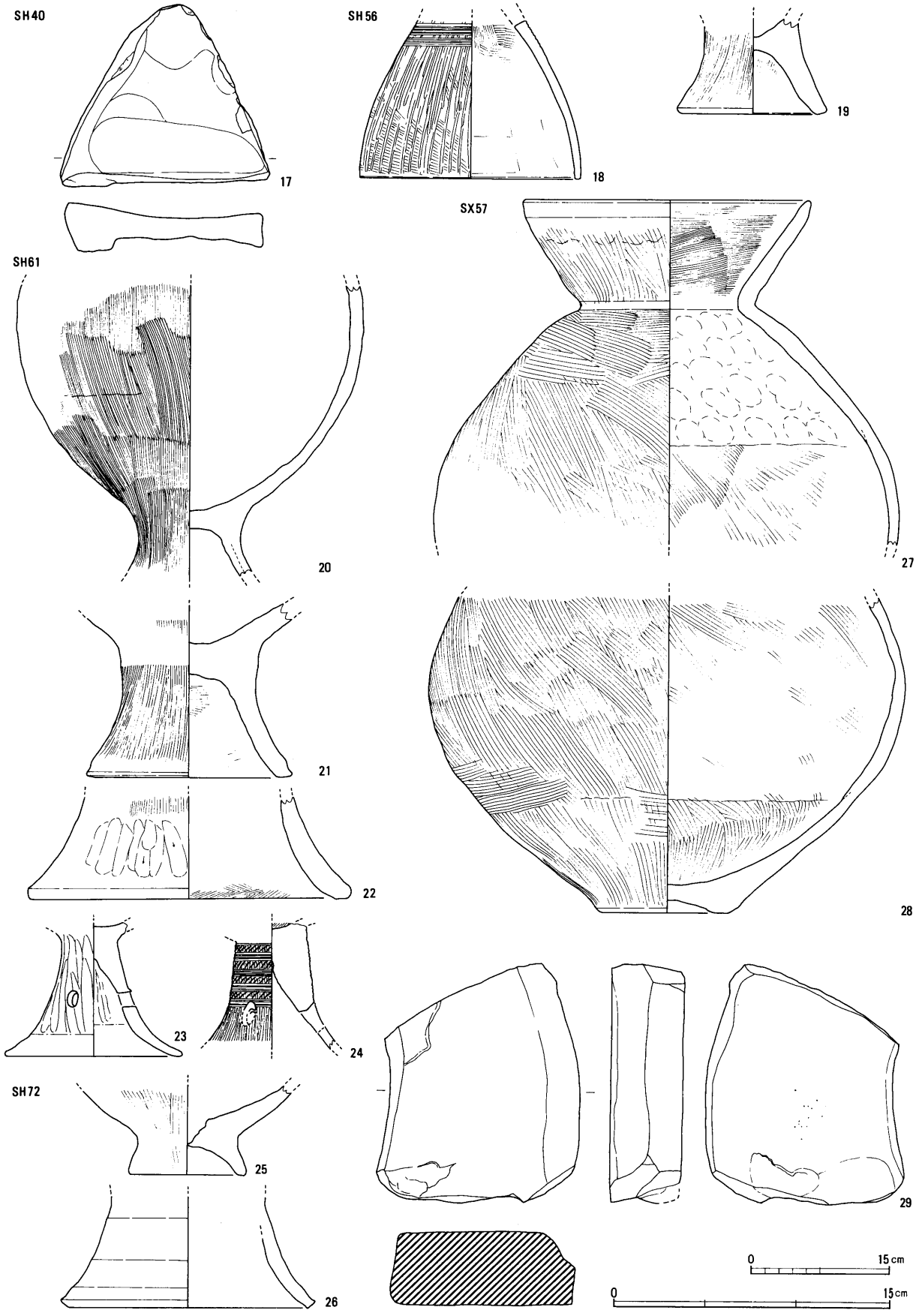
（５）包含層・その他遺構等出土遺物

93～106は早期の押型文である。93が深鉢の尖底部、103が口縁部である以外はいずれも体部片である。文様は、106が神宮寺式と思われる格子文である以外はいずれもネガ楕円文である。107は中期から後期の土器の脚台部と思われる。108は波状口縁を持つ中期末の土器で、突帯による窓枠状区画の中をヘラで刻んだものと思われる。109と110は浮線網状文土器である。いずれも器形は不明であるが、大洞Ａ式相当の浅鉢状の土器と思われる。

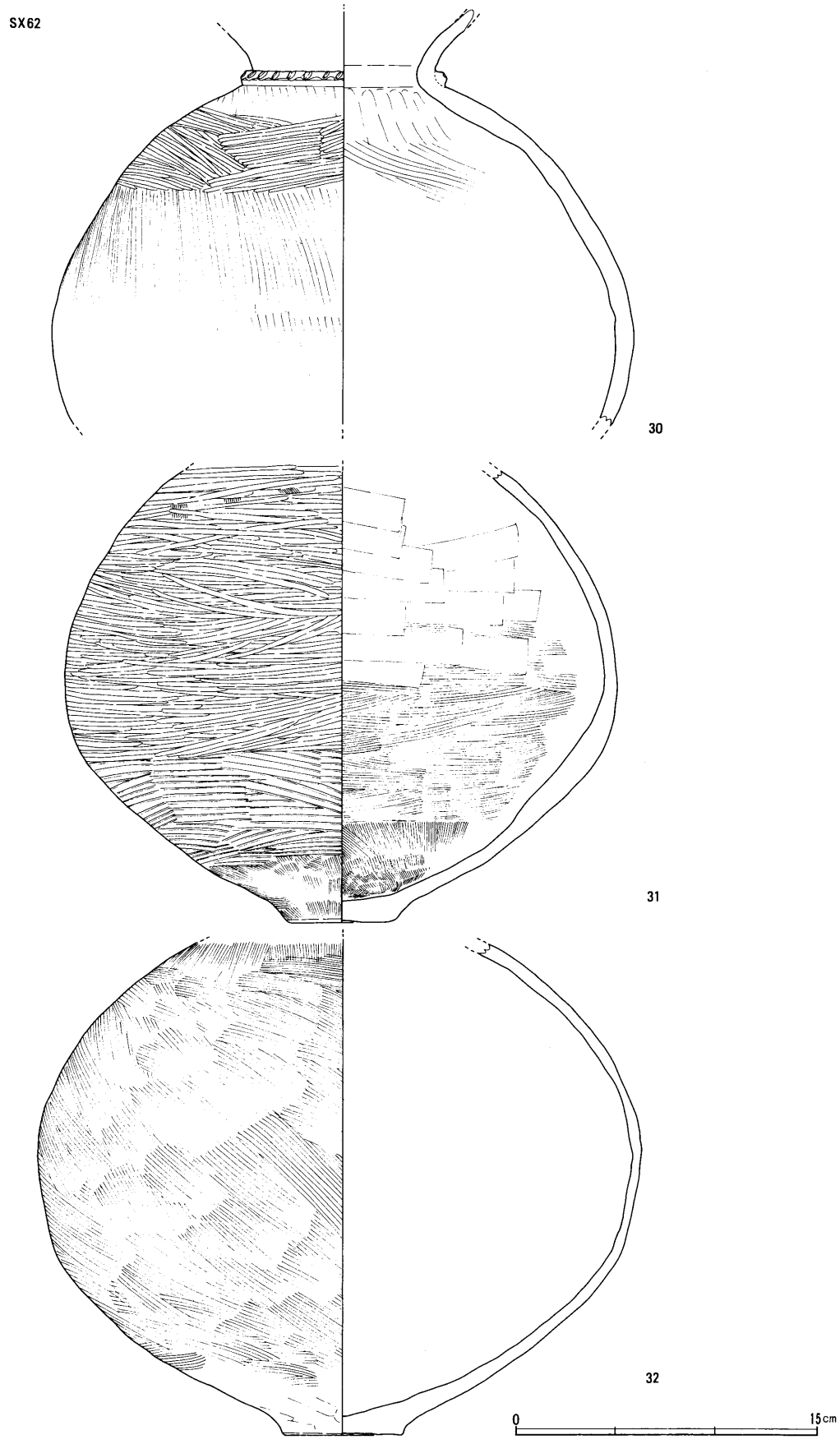
111～130は晩期の突帯文土器である。111は五貫森式か。突帯状に横に長いＤ字状の刻目を有す。112～117は素文の突帯を持つ土器の口縁部。118～120は体



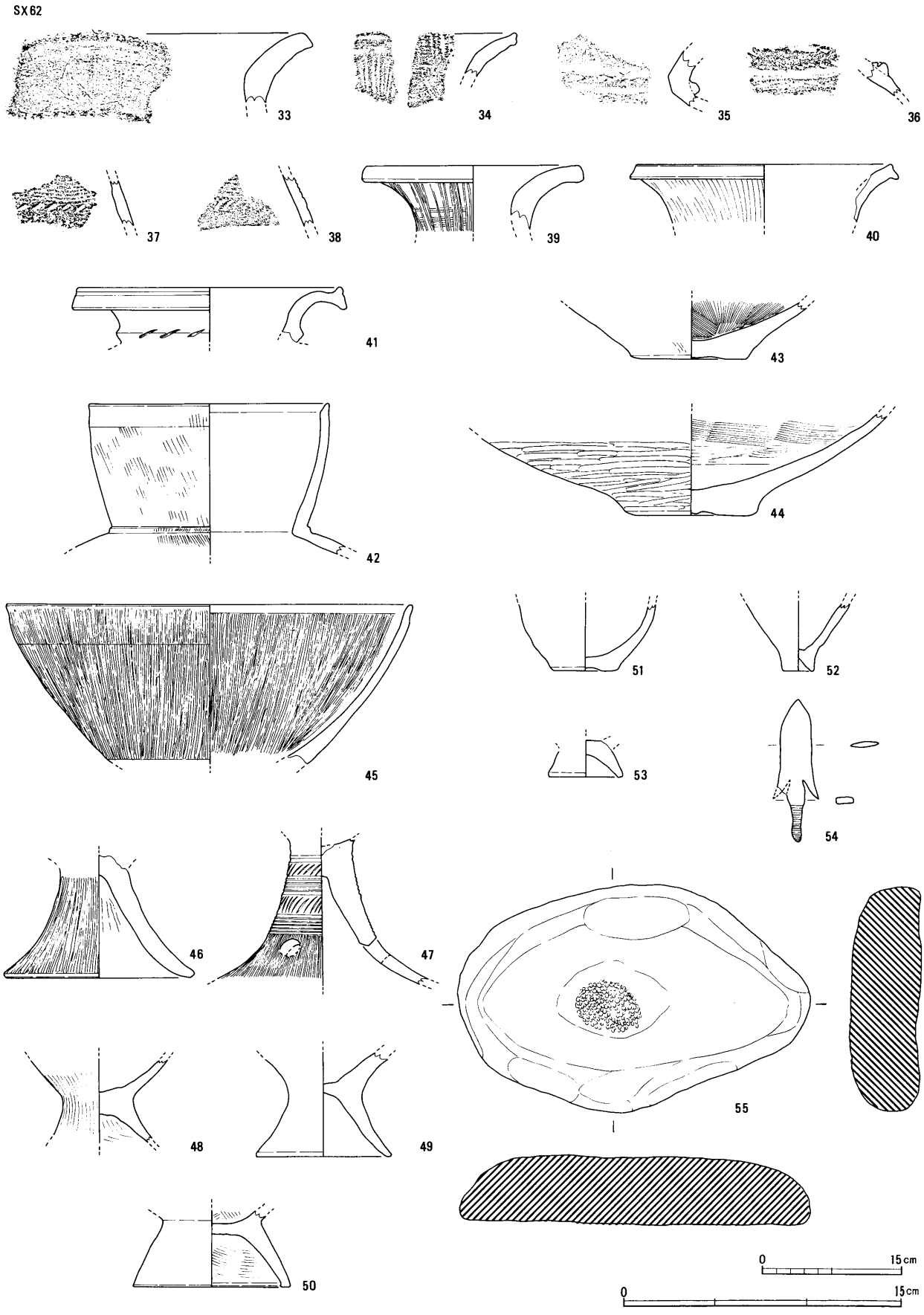
第27図　ＳＦ32、ＳＸ86・90、ＳＨ92出土遺物実測図（16＝１：４、他は１：３）



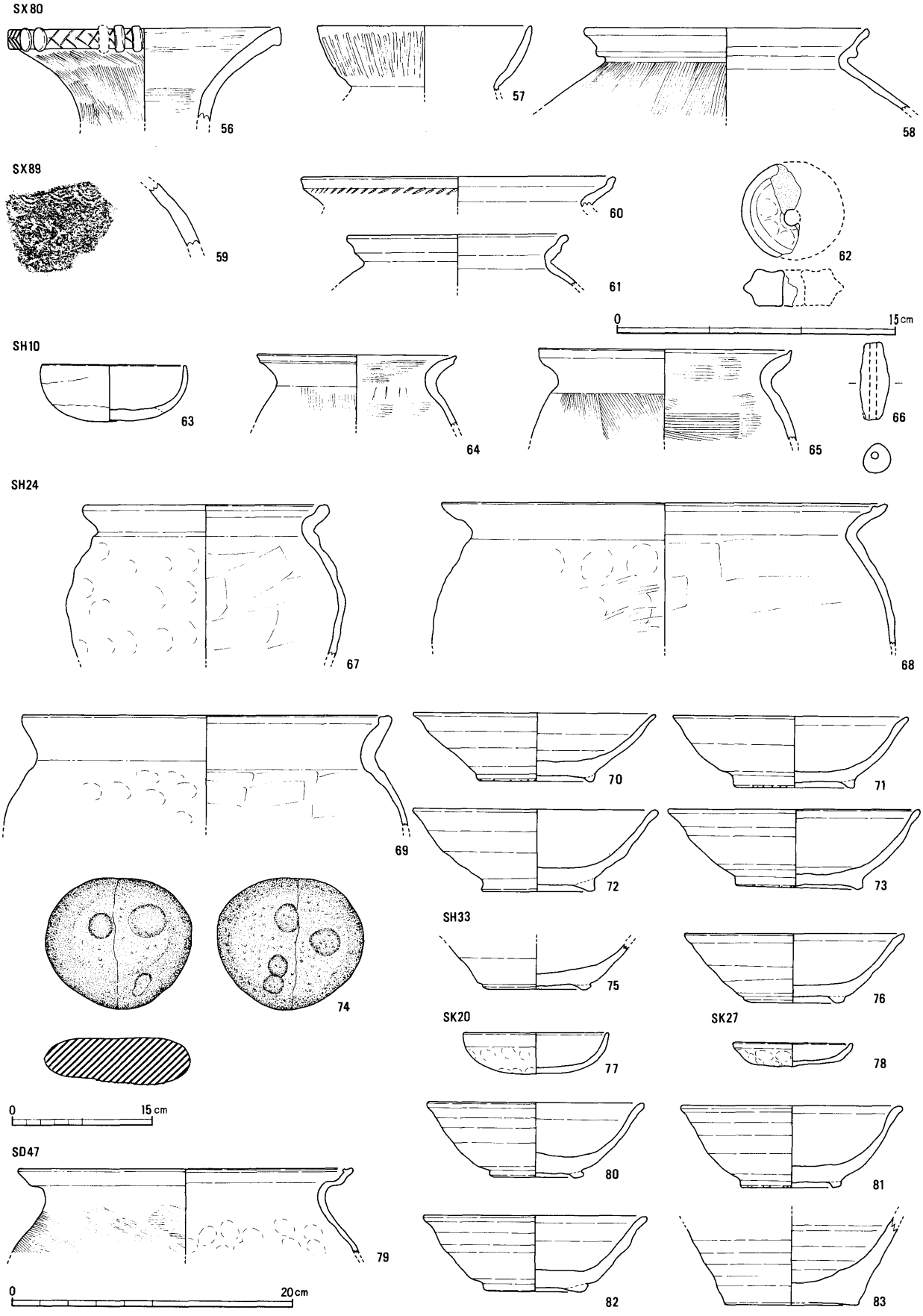
第28図　ＳＨ40・56・61・72、ＳＸ57出土遺物実測図（17・29＝１：６、他は１：３）



第29図　ＳＸ62出土遺物実測図（１）（１：３）



第30図　ＳＸ62出土遺物実測図（２）（55＝１：６、他は１：３）



第31図　ＳＸ80・89、ＳＨ10・24・33、ＳＫ20、ＳＤ47出土遺物実測図（56～62＝１：３、74＝1：６、他は１：４）

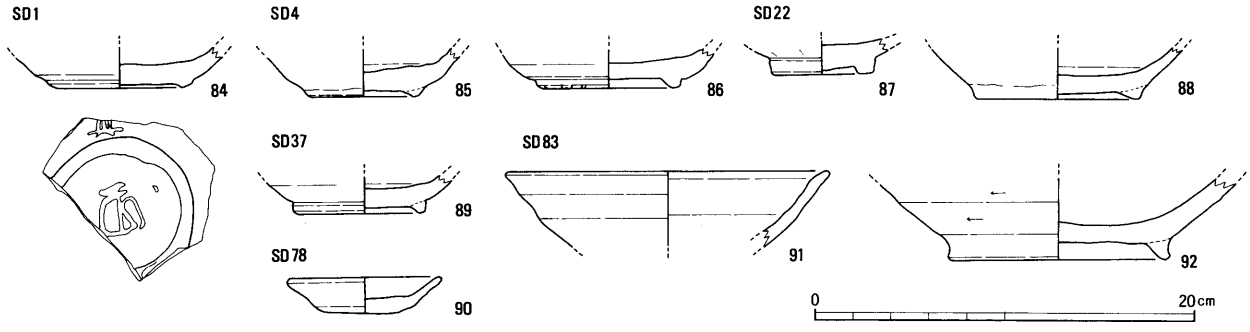
部に２条の素文突帯を持つものである。121～130は貝殻によるＯ字状の押圧（押し引き）突帯を有する口縁部・肩部片である。馬見塚式相当の突帯文土器と思われる。同じく突帯文土器の131～135は体部片とした。136～137は第１次調査及びコドノＡ遺跡でも出土した不明土製品である。縄文時代晩期から弥生時代の遺物と考える。

138～158は弥生時代前期の土器である。138・139は壺の口縁部で、138の内面には条痕と思われる沈線が横方向に巡る。139の内面では３条の凹線が巡り、端部には刻みが見られる。140～150は壺の肩部で、140には２条のヘラ描き沈線の下に１条の凹線がなされ、141は突帯の上に刻目をもつ。142～150は、いずれもヘラ描き沈線が巡るが、中でも144と148は削り出し突帯を有す。151～154は甕の口縁部及びその付近と思われる。151・153には、深くて途切れる沈線が見られる。152は口縁部が大きく外反し、端部外面には刻目が、その下には深い沈線を有す。154の外反はゆるやかで、端部外面に刻目を持つ。155は壺の底部、156～158は甕の底部と考える。

159～172は弥生時代中期の土器である。159～162は壺の口縁部で、159は端部を横ナデ後、内面に沈線、外面の端部下には波状文を施す。160は口縁端部を横ナデ後、外面に刻目を入れている。161は端部上面に櫛歯の刺突列、内面に瘤状の突起をもつ。162は端部を拡張し、円形浮文・扇形文、端部内面には扇形文で装飾している。163～165は壺の体部で、163は波状文、164は櫛描き横線文と波状文、165は格子文が施される。166～168は高杯で、166は脚部、167・168は杯部とした。166は簾状文を有し、167・168は波状文の下に櫛描き横線文をもつ。169～172は甕の口縁部とした。169は端部の上面に櫛歯の刺突を持ち、内面には櫛描き横線がなされる。170は大きく外反し、端部上面に刻目がある。171は端部も含め、ハケメを施した後、端部外面に刻目を施す。172にはハケメはない。

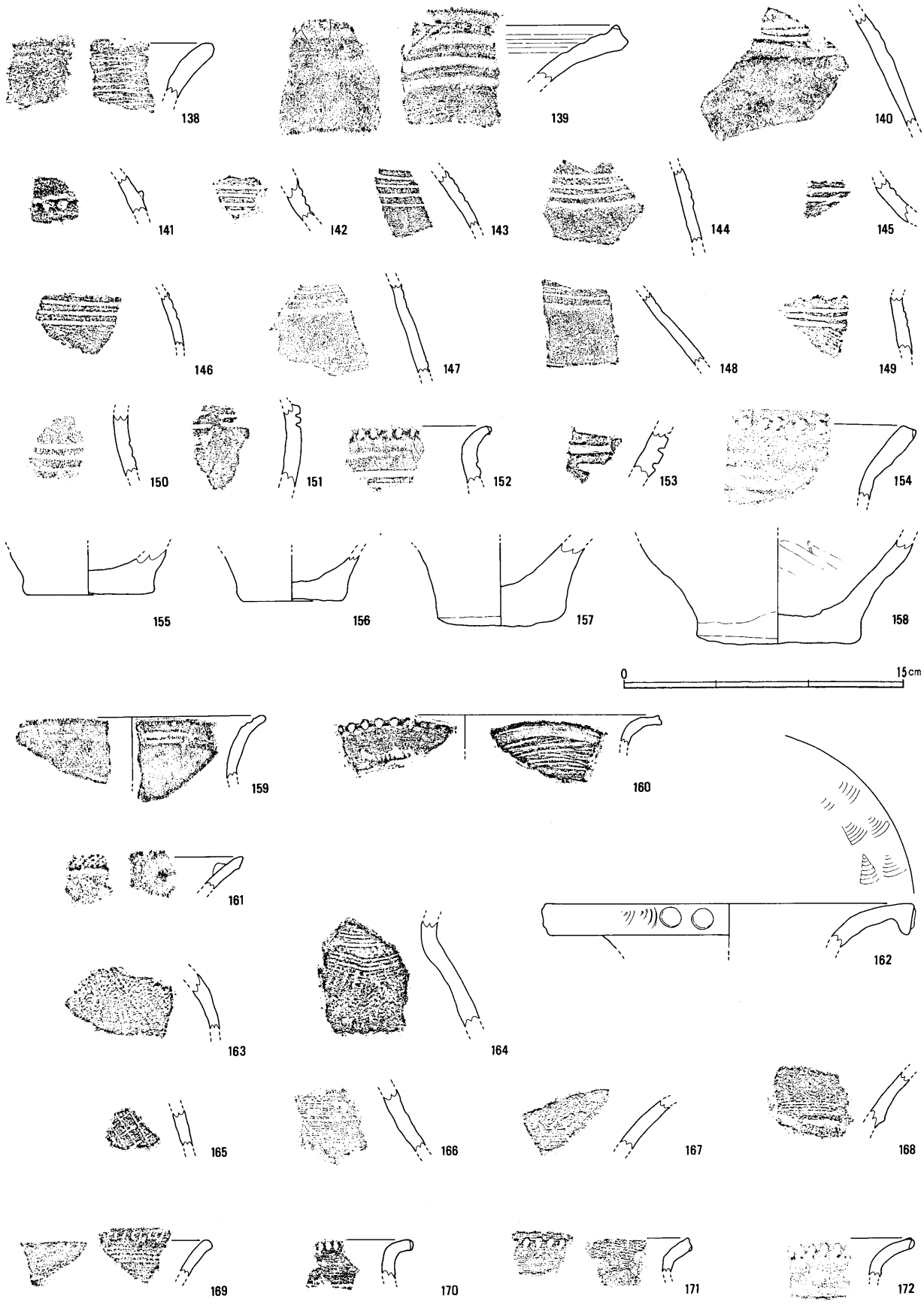
173～193は弥生時代後期～古墳時代初頭の土器である。173～175は広口壺の口縁部で、173は端部に刺突列がなされ、174は拡張した端部上面と内面に櫛歯羽状刺突列をもつ。175は端部上端及び内面に竹管文がなされる。特に上端のものは波状に施されている。178と共に阿形遺跡[5]によく似た例をもつ。176～178は壺の頸部から肩部である。176は沈線の間を櫛歯刺突列と櫛歯を波状に押し引きした文様が施されている。178は頸部に貼り付け突帯をし、その上から櫛歯刺突を行い、肩部にかけて櫛描き横線文と更に櫛歯刺突列が入る。179・180は壺の底部である。181～184は高杯である。181・182は脚部で、181は櫛描き横線文と３方の透かし孔をもち、182は櫛歯刺突列と櫛描き横線、４方の透かし孔がある。183・184は高杯の杯部で、183は段の上部に波状文を持つ。185～191は甕で、185は受け口状の口縁部、他は脚部である。185は、口縁部下方に刺突を施した突帯を巡らせる。186はミニチュア、187は鉢の脚かもしれない。192は手焙り形土器。鉢部の貼り付け突帯に刻目が入っている。193は土製の紡錘車で台形状の断面形態をもつ。正確な時期は不明。

194～213は、古墳時代以降の遺物である。194は須恵器の杯身で、田辺編年[6]のＴＫ43型式に相当するものと思われる。195～201は７～８世紀頃の甕の口縁部、202は13世紀前後の鍋であろうか。203はロクロ土師器の椀、204～210は山茶椀である。山茶椀はい

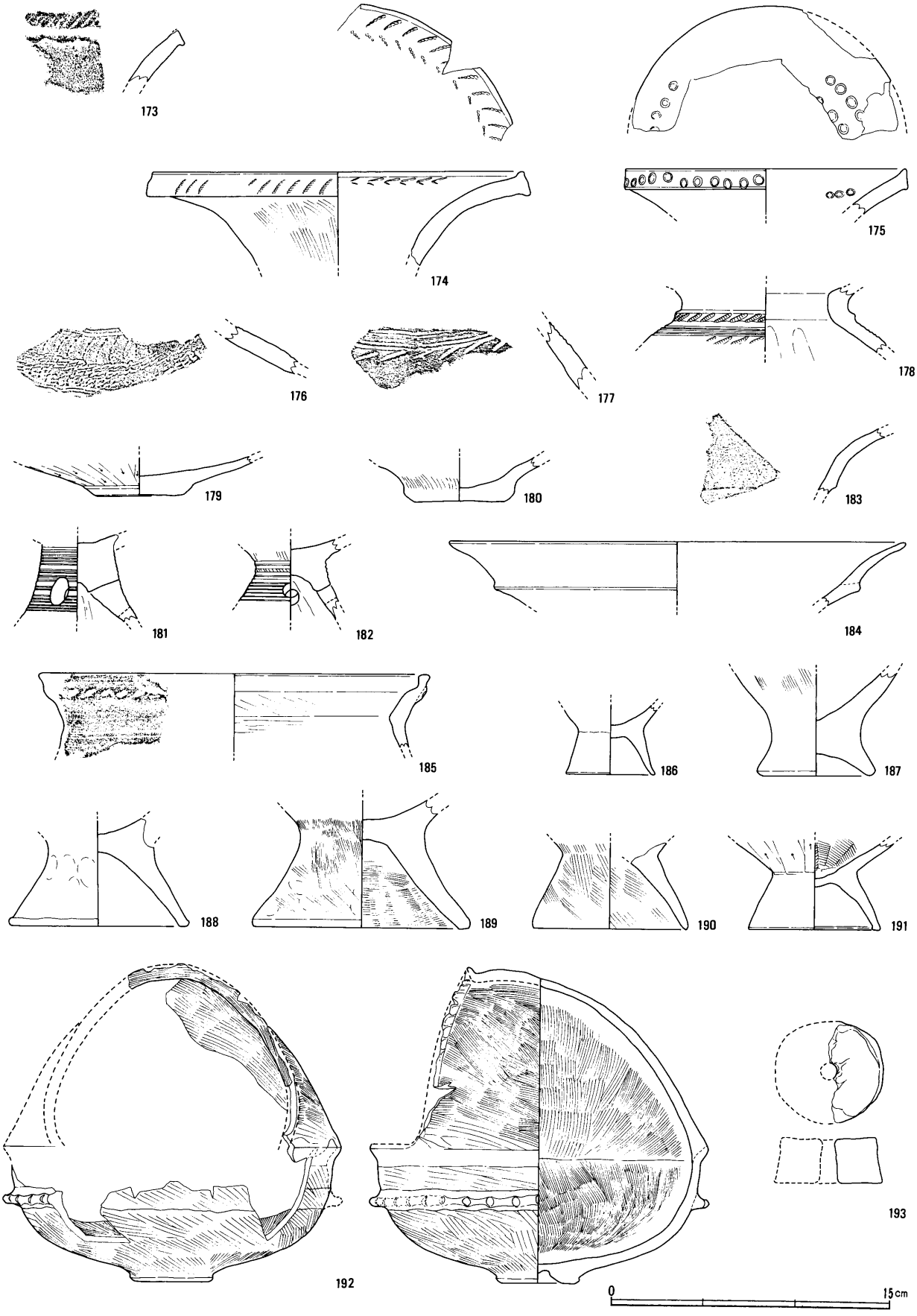


第32図　ＳＤ１・４・22・37・78・83出土遺物実測図（１：４）

第33図　遺構混入・包含層等出土遺物実測図（1）（93＝1：4、他は1：3）



第34図　遺構混入・包含層等出土遺物実測図（2）（1：3）



第35図　遺構混入・包含層等出土遺物実測図（3）（1：3）

ずれも渥美の産で、204～206は第５型式、207～210は第６型式と思われる。211は青磁椀の底部である。212・213は鍋の把手のような土製品で、何らかに付いていたものが剥がれ落ちたものと思われる。かなり摩耗している。　（西出　孝）

３．石　器

（１）はじめに

①　石器群の概要

コドノＢ遺跡（第２次）出土の石器は総数454点、総重量6,771ｇである。そのうち図化した石器は91点である。

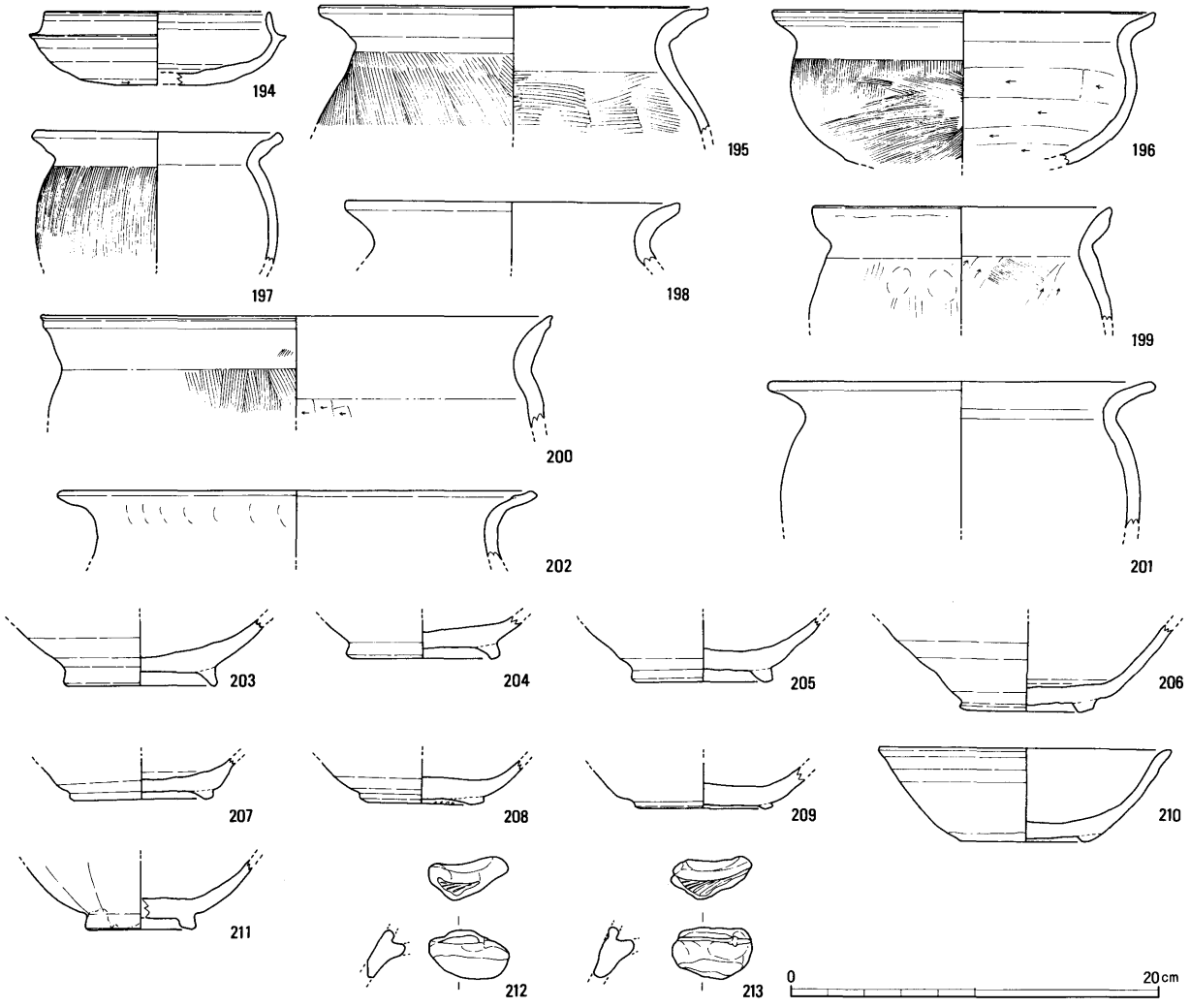
図化した遺物は主に二次加工のある石器類で、それらは属性表を作成した。図化しなかった遺物は剥片・破片類である。

器種は石鏃・尖頭器・スクレイパー（削器）・掻器・石庖丁・楔形石器・石核・二次加工のある剥片・使用痕のある剥片・剥片・破片・打製石斧・礫器・敲石である。このなかでは特に尖頭器とその製作に関連のある遺物に特徴がある。

石器石材は、石材はチャート332点（2,732ｇ）、サヌカイト90点（353ｇ）、凝灰岩・頁岩・粘板岩・砂岩・片岩・花崗岩・石英などが計32点（3,686ｇ）である。器種と石材の関係では、剥片石器類は、チャートとサヌカイトがほとんどであり、打製石斧や石庖丁及び礫器などが砂岩・花崗岩などの石材に選択されている。また剥片石器の石材については、チャート（在地系）とサヌカイト（非在地系）という特徴もある。

②　観察と記述の方法

最初に器種分類を行い、二次加工のある石器類を選択し、そののちに各々の石器の素材・形態・加工



第36図　遺構混入・包含層等出土遺物実測図（４）（１：４）

技術について観察・記述を行った。この観察項目の中で、特に加工技術については次の項目で観察した。

・打撃の種類：直接打撃、間接打撃、押圧剥離の3種類。

・剥離面の種類：剥離角で表現した。剥離角が140度を越えるものを平坦剥離、剥離角が80度から100度前後を急角度剥離、その他を通常の剥離とした。形態については、それぞれの項目で記述した。

そしてこれらの属性の違いが文化の違いを現すと考えられるので、以下個々の石器を器種ごとに素材・形態・加工技術について見ていった。

（2）器種別の観察

① **石鏃**（214～223）

214　石材はチャート。形態は凹基無茎石鏃。加工技術は幅の狭い緻密な押圧剥離で器面に沿うように剥離される。

215　石材は石英。形態は凹基無茎石鏃。加工技術は幅広の押圧剥離である。

216・217　石材はサヌカイト。形態は凹基無茎石鏃。加工技術は幅広の押圧剥離である。

218　石材はサヌカイト。形態は中型の凹基無茎石鏃。加工技術は幅広の押圧剥離である。

219　石材はサヌカイト。形態は有茎石鏃。加工技術は幅広の押圧剥離である。

220　石材はサヌカイト。形態は有茎石鏃。加工技術は幅広の押圧剥離である。

221　石材はチャート。加工技術は幅広の押圧剥離である。

222　石材はチャート。石鏃未製品。加工の剥離面は打点の潰れが見られず、ややバルブが発達する剥離面である。また剥離面相互が規則正しく剥離されている。従って間接打撃による加工と推定される。二次加工は僅かである。

223　石材はチャート。石鏃未製品。加工技術は幅広の押圧剥離である。

② **尖頭器**（224～240）

224　石材はサヌカイト。形態は中型の有茎尖頭器。加工の技術は幅広の押圧剥離もしくは間接打撃の可能性のある剥離面である。

225　石材はチャート。形態は中型の有茎尖頭器。加工は打点が小さくバルブの発達する剥離面である。規則的な剥離面の配置なので間接打撃の可能性がある。

226　石材はチャート。形態は柳刃形。横長剥片を素材に比較的大きく平らな剥離で成形し、周辺を丁寧な押圧剥離で整形している。

227　石材はチャート。大形木葉形尖頭器。基部は折損。成形加工は大きく平らに広がる剥離面で、その打点は小さく一部に砕けが見られることから、尖った硬いハンマーの可能性がある。また、バルブが発達せず、規則正しい剥離の配置のため、押圧剥離もしくは間接打撃の可能性が高い。226と同じ加工技術の石器である。

228　石材はチャート。大形木葉形尖頭器。加工技術・形態ともに227と同じ製作技法の石器。

229　石材はチャート。大形木葉形尖頭器の未製品。基部は失敗剥離で欠損している。大きな成形加工は打点が広がりバルブの発達する剥離面。硬質ハンマーの直接打撃の可能性が高い。

230・231　石材はチャート。尖頭器未製品。大きな成形加工は稜線の比較的平らなバルブの発達する加工で、硬質ハンマーの直接打撃の可能性がある。小さな整形加工。

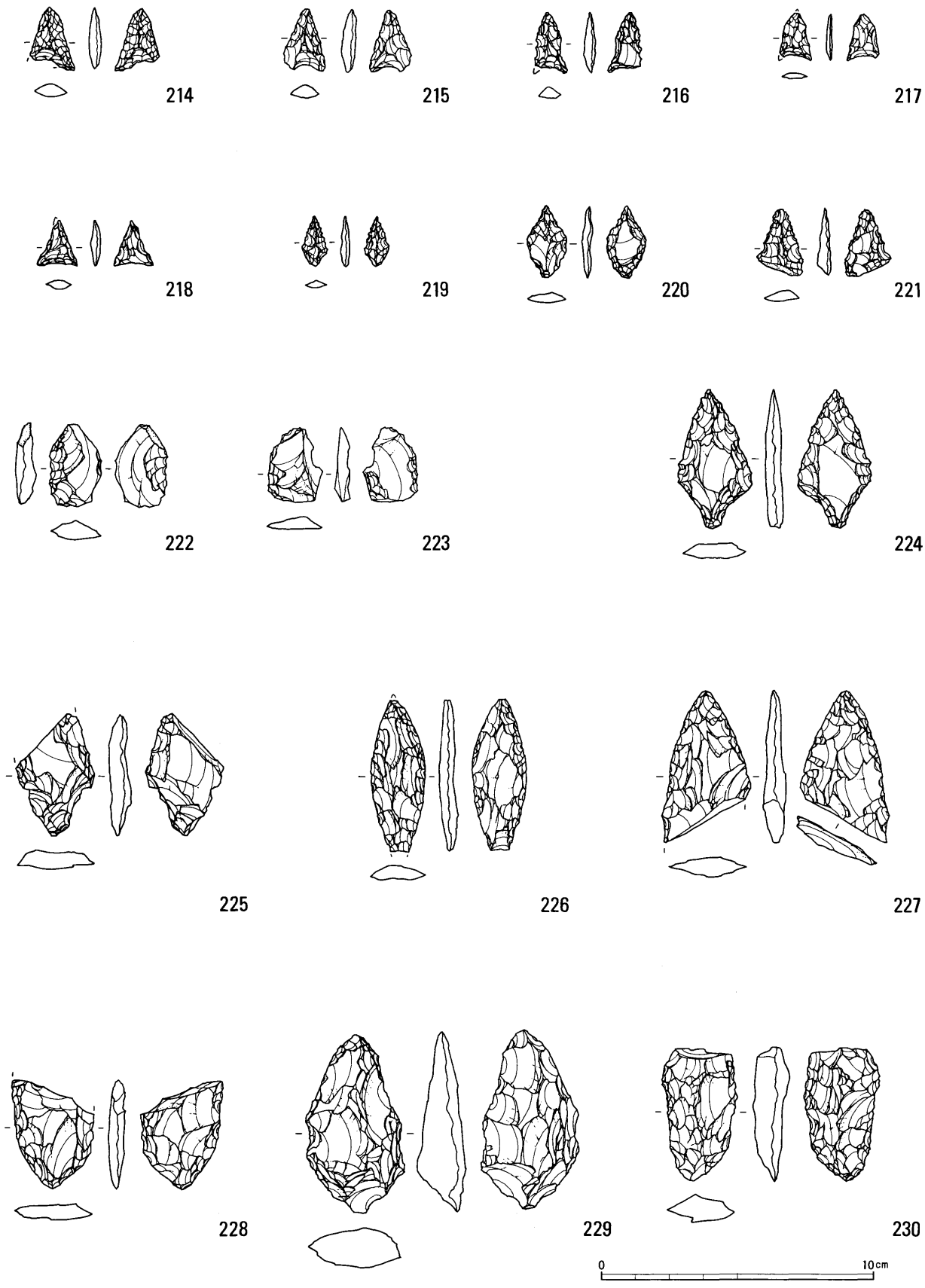
232・233　石材はチャート。両方の背面の素材面はタマネギ状の剥離で自然剥離か事故剥離の大きな面の可能性がある。裏面図の素材面は素材剥片の主要剥離面。側辺の加工は硬質ハンマーの直接打撃。

234～236・240　石材はチャート。大形木葉形尖頭器未製品。加工は打点の小さなバルブの発達する硬質ハンマーの直接打撃の平坦剥離。

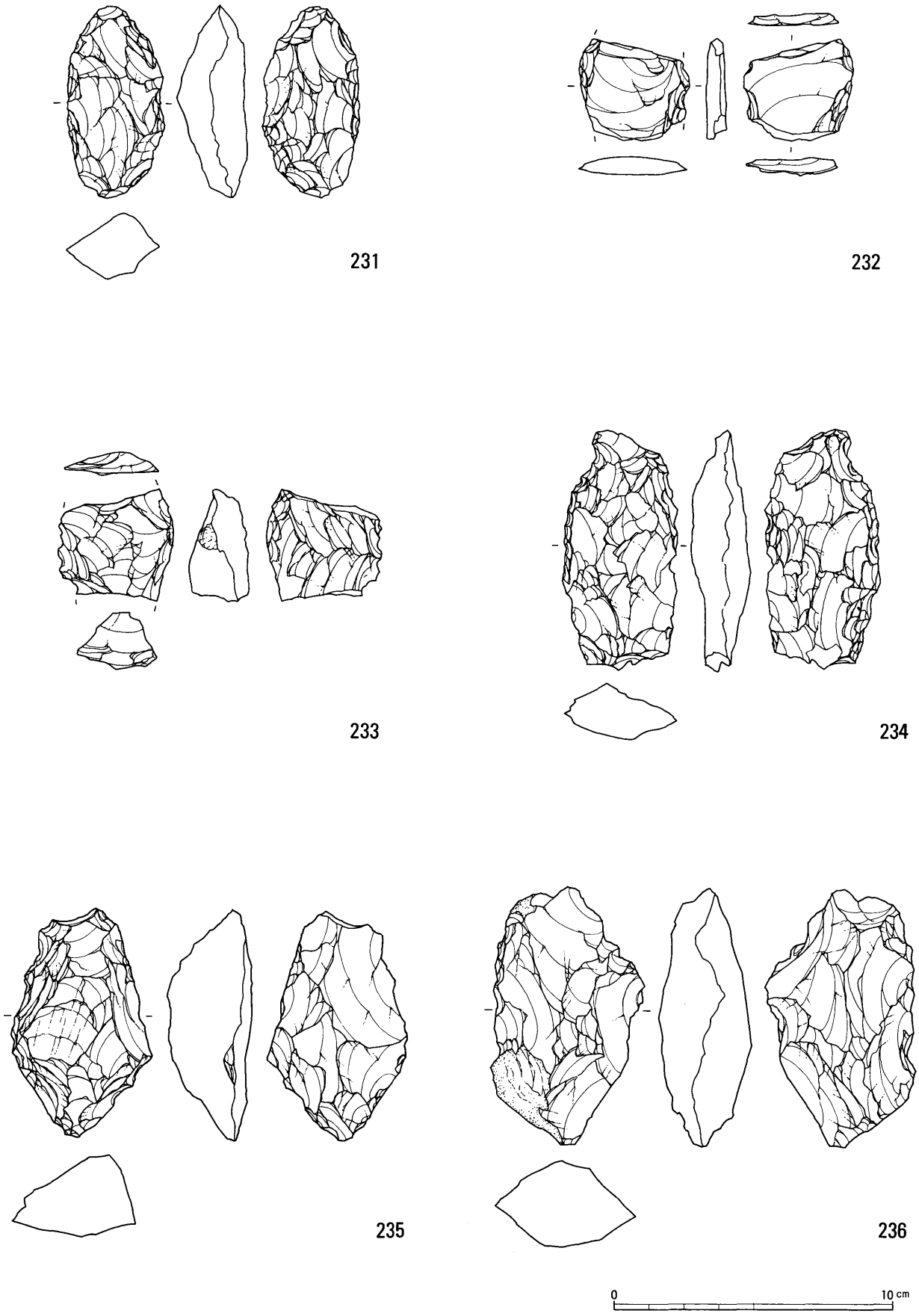
237　石材は片岩。加工技術は硬質ハンマーの直接打撃。

238　石材はチャート。中形柳刃形尖頭器の未製品。尖頭器の形態にするために硬質ハンマーの直接打撃で成形加工をしている。素材の面を大きく残す。

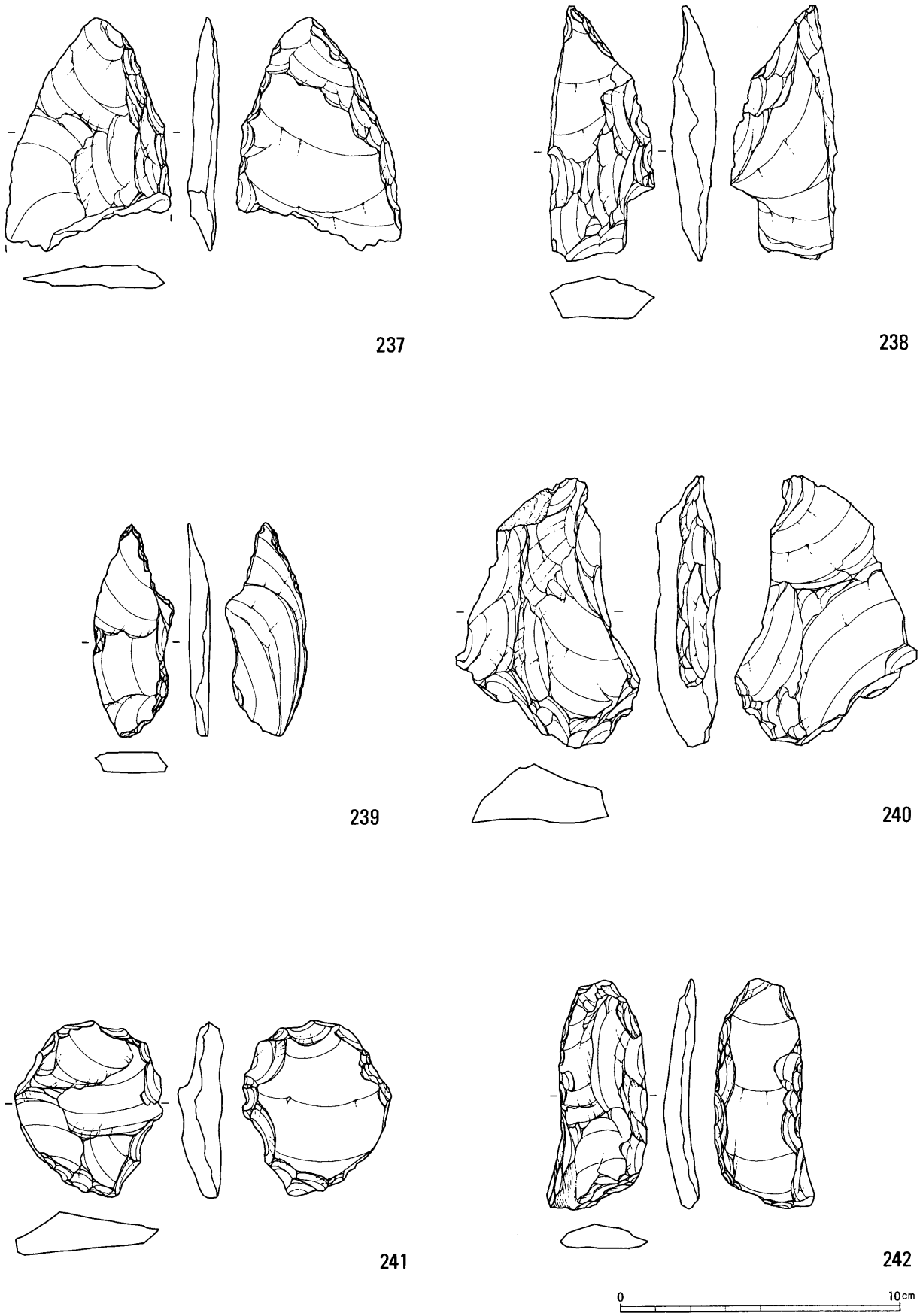
239　中形柳刃形尖頭器の未製品。石材はサヌカイト。形態は木葉形で薄く平らである。右側辺の加工は直接打撃による通常の剥離で打面を除去している。尖頭部は幅広だが微細な押圧剥離である。素材の面を大きく残す。238と同じ石器。



第37図　出土石器実測図（1）（1：2）



第38図　出土石器実測図（2）（1：2）



第39図　出土石器実測図（3）（1：2）

③ **スクレイパー類**（241～251）

241　スクレイパーとした。石材は頁岩。背面・腹面ともに円周状に刃部の加工が見られる。

242　石材が片岩で、加工は直接打撃の平らな剥離である。

243　石材は粘板岩。石庖丁の未製品か。右側辺には擦痕？のある面が残されているがその性格は不明である。

244～248　掻器の断片とした。石材はチャートで、刃部の加工は器面に沿うような押圧剥離による。

249・250　掻器で石材はチャート。それぞれ下辺に刃部が加工されるが、その加工は直接打撃の通常の剥離である。

251　削器で石材はサヌカイト。右側辺の刃部加工は器面に沿うような押圧剥離による。

④ **錐器**（252・253）

252　石材はサヌカイト。右側辺に幅広の押圧剥離、または間接打撃によると思われる加工が連続的に施される。

253　石材はサヌカイト。素材を活かして刃部だけを押圧剥離によって作り出している。この押圧剥離は器面に沿って薄く剥離される。

⑤ **楔形石器**（254～266）

石材は254～259がサヌカイトで260～266がチャートである。

⑥ **R・剥片**（267～277）

275　集石炉出土の二次加工剥片である。裏面に加工がある。

R・剥片の中で277のみ石材がサヌカイト。他はすべてチャート。いずれの主要剥離面もバルブはあまり発達せず、平らに剥離されている。

⑦ **剥片**（278～282）

278～280の石材はチャート。打面は小打面。バルブは発達せず、腹面が湾曲している。以上のことから尖頭器の製作剥片と考えられる。

281・282の石材はチャート。打面は平坦打面。バルブがあまり発達しない平らな剥片である。

⑧ **石核**（283～286）

283　石材はチャートで、自然面を打面とする石核。最終作業面での剥片剥離はあまり行われていないが、残された剥離面を見ると、バルブの発達しない平らな剥片が剥離されている。

284　石材はチャートで分割面を打面とする石核。バルブの発達しない平らな剥片が剥離されている。

285　石材はサヌカイト。

286　石材は頁岩で、バルブの発達しない平らな剥片が剥離されている。

⑨ **礫器？**（287～294）

289・290の背面に剥離面が見られる以外、他の石器の背面は全て自然面である。287・290は腹面全体に丁寧に加工が施されるが、その他の石器は刃部のみ丁寧に加工される。石材は287は頁岩、他はすべて砂岩。

⑩ **打製石斧**（295～298）

295　石材は砂岩。削器？

296　石材は片岩。刃部に使用によると思われる摩耗が見られる。

297　石材は片岩。上・下部を古く欠損するが、上部の欠損面に再加工が見られるので再利用された物かも知れない。

298　石材は片岩。打製石斧の断片。

⑪ **敲石類**（299～304）

299　石材は花崗岩。下端に敲打痕が見られる。

300　石材は片岩。上・下端に垂直打撃によると思われる剥離痕が見られる。

301　石材は凝灰岩。左右両側辺と下端に敲打痕が見られるが、左右両側辺の敲打痕は丁寧に薄く剥離されているので、整形の為のものと思われる。

302　石材は砂岩か。下端に若干敲打痕が見られる。

303　石材は砂岩。右側辺と下端に僅かに敲打痕と思われるものが見られるが、顕著ではない。

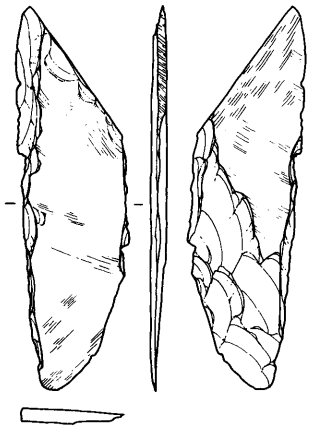
304　石材は凝灰岩。石棒状の棒状礫。

（3）まとめ

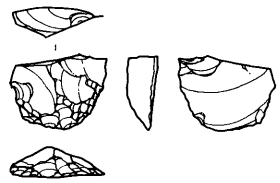
本遺跡の石器群は多様な器種組成を示すが、特に型式学的分析として結果のでる器種は石鏃と尖頭器である。そこで以下に石鏃と尖頭器の製作技法について型式学的な考察を述べてまとめにかえることとする。

① **石鏃と尖頭器の区分**

石鏃と尖頭器はその大きさと形態によって区分される。石鏃は小形で概ね3㎝以内であり、尖頭器は



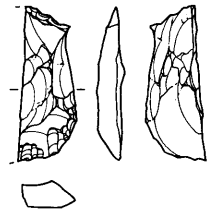
243



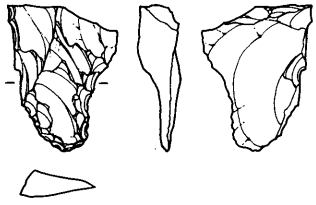
244

245

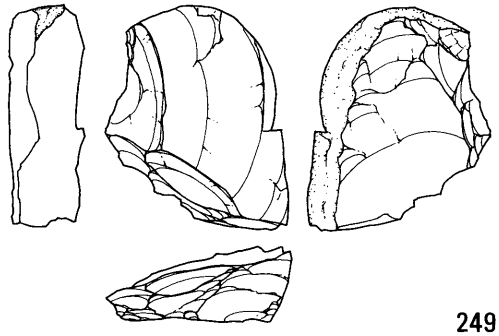
246



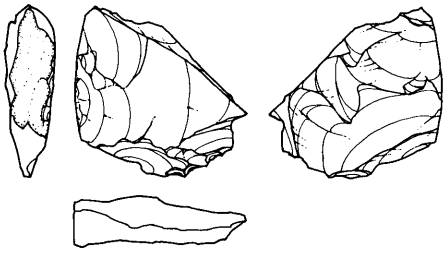
247



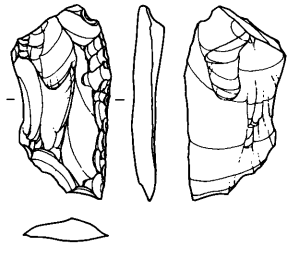
248



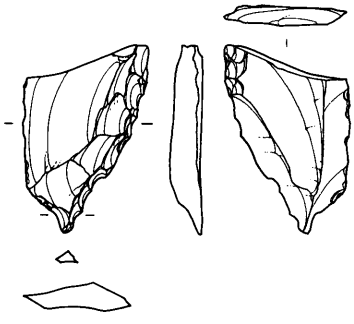
249



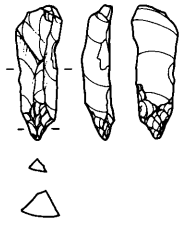
250



251



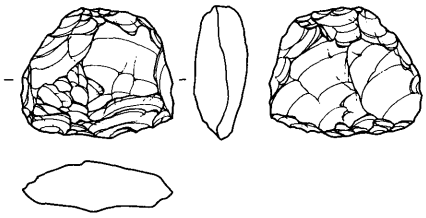
252



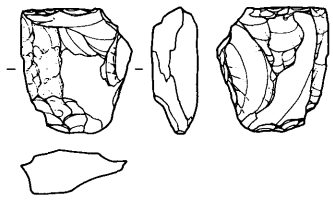
253

0 10cm

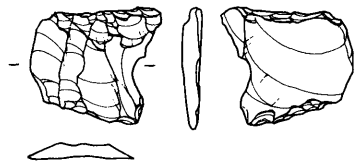
第40図　出土石器実測図（4）（1：2）



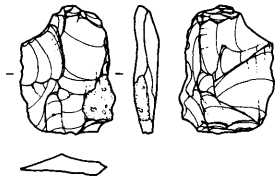
254



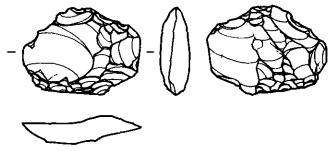
255



256

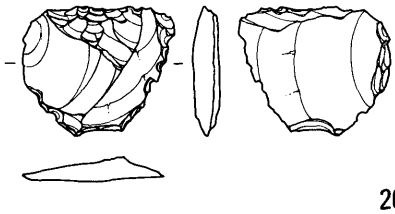


257

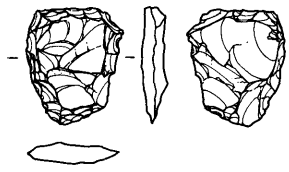


258

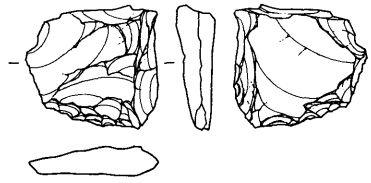
259



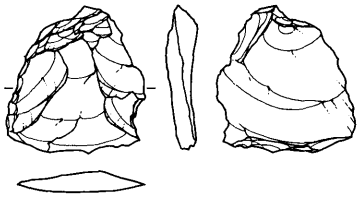
260



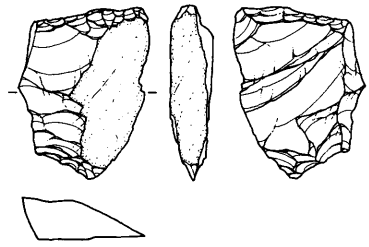
261



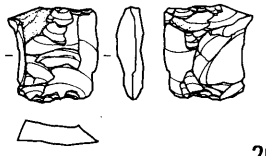
262



263



264

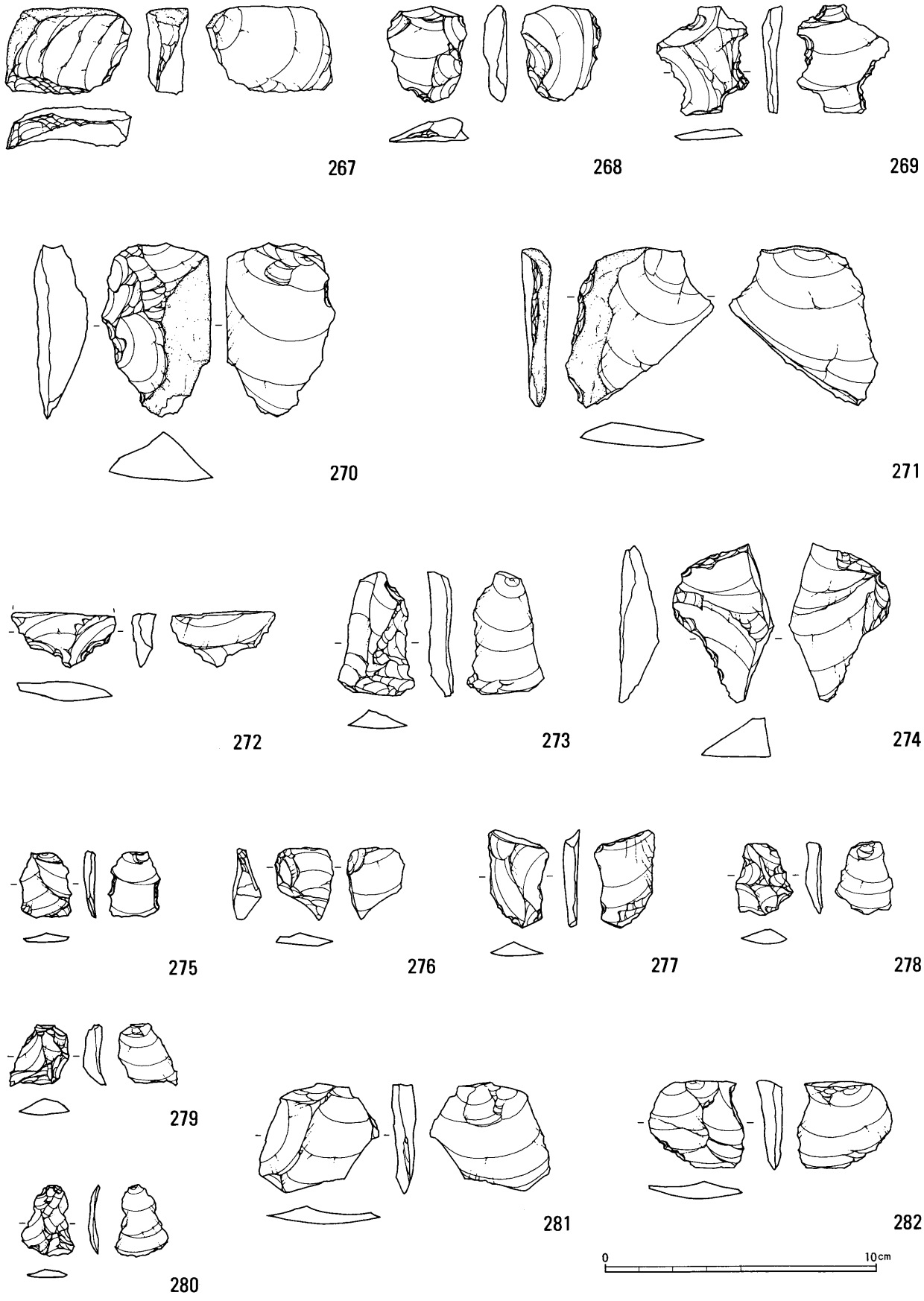


265

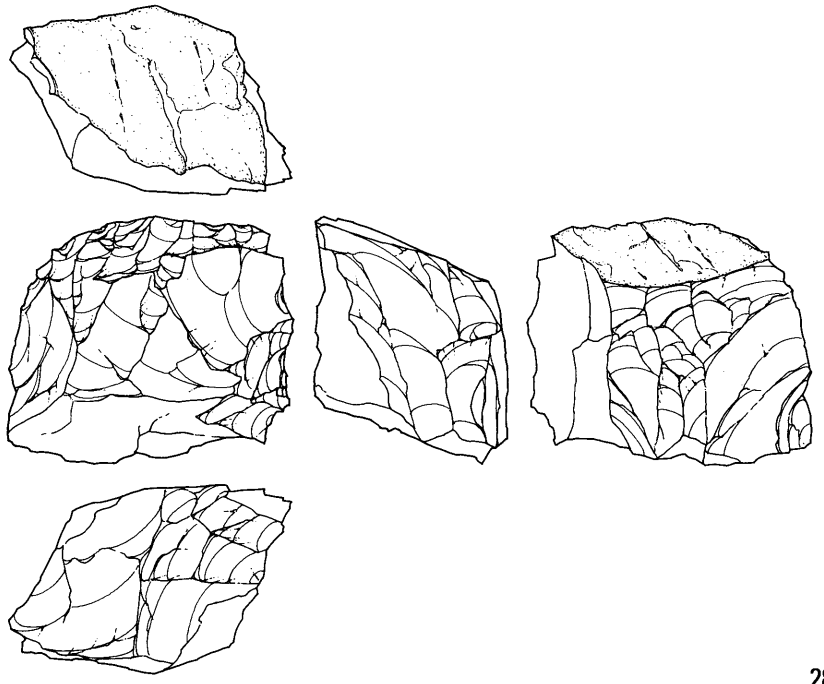
266

0 10 cm

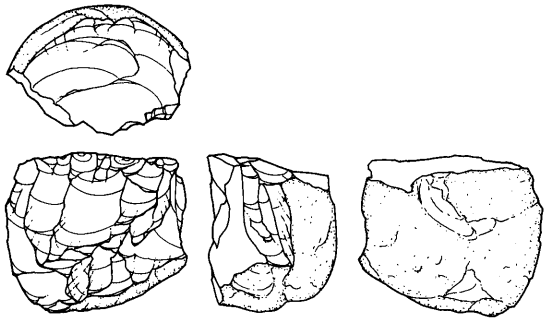
第41図　出土石器実測図（５）（１：２）



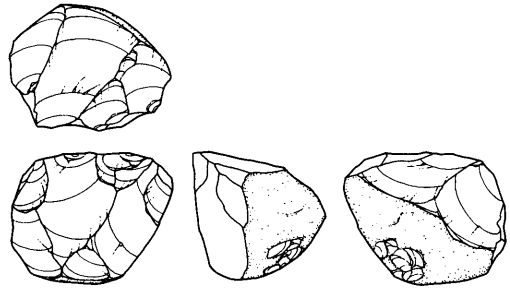
第42図　出土石器実測図（6）（1：2）



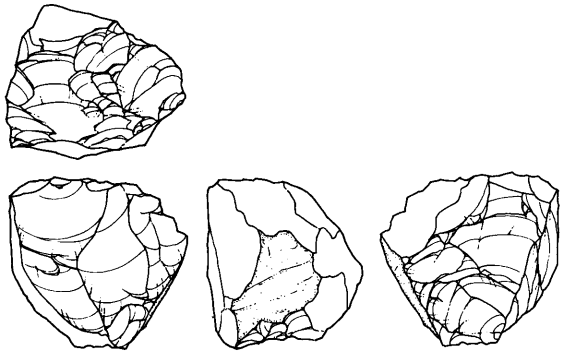
283



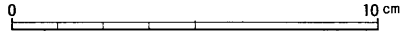
284



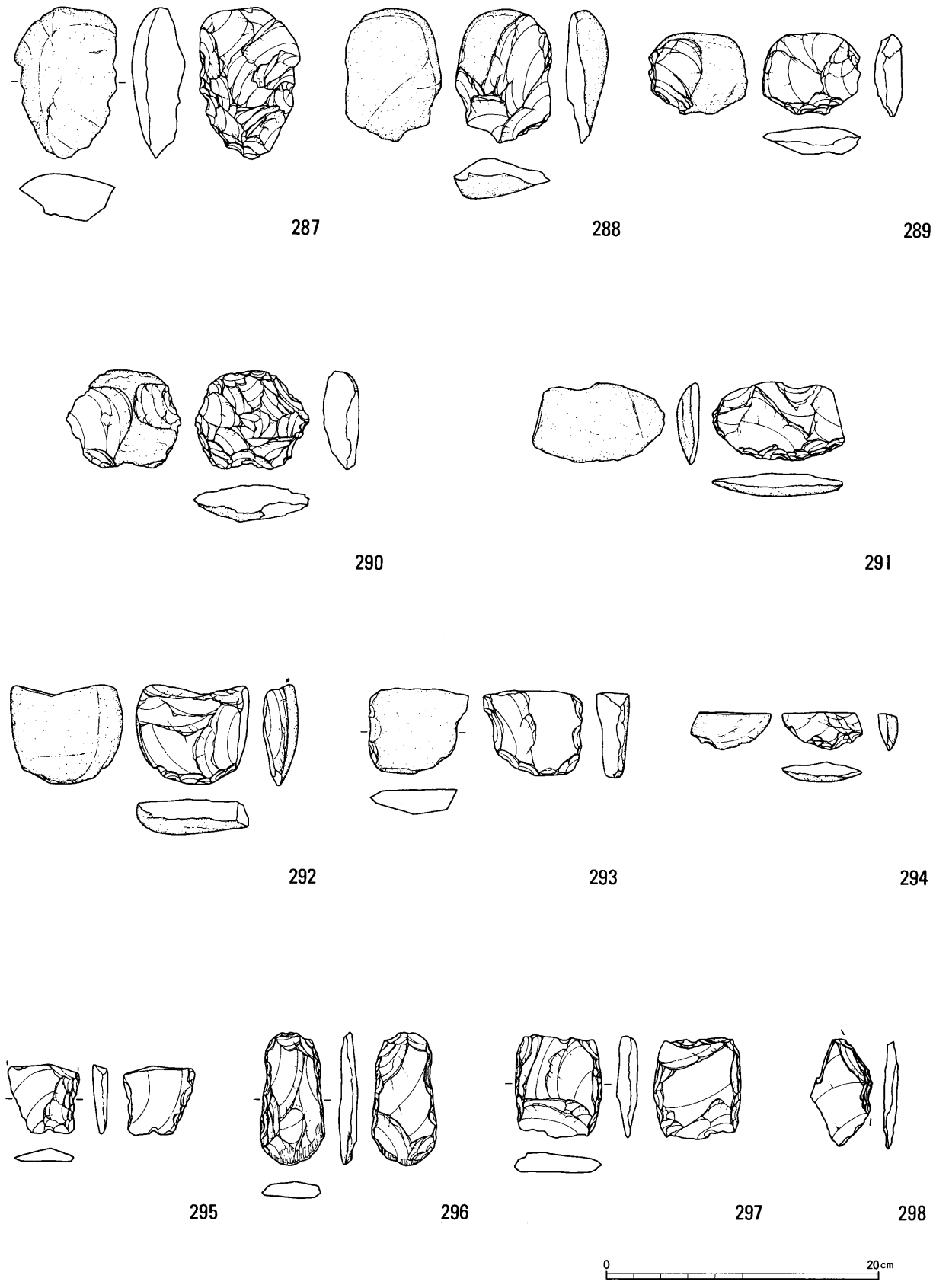
285



286



第43図　出土石器実測図（7）（1：2）



第44図　出土石器実測図（8）（1：4）

それを越える大きさである。

② 石鏃の形態

石鏃の形態は凹基無茎石鏃と有茎石鏃の２種類がある。凹基無茎石鏃は抉りが発達せず、218のように抉りがほとんどなく、加工で緩やかな辺を作り出す平基石鏃に近い形態もある。有茎石鏃の形態は基部が太く、かえしが発達しないのが特徴である。

③ 石鏃の加工技術

石鏃の二次加工の技術は大きく２種類の押圧剥離がある。打点が比較的広がり、縁辺がつぶれずに細長い押圧剥離が214の石鏃に見られる剥離技術である。一方、214以外の石鏃は打点が小さく、縁辺がややつぶれ、バルブもやや発達して大きく器体の奥にまで貝殻状に広がる剥離面である。214の押圧剥離は縄文の石器に見られるごく普通の加工で、軟質ハンマーを利用した一般的な押圧剥離である。214以外の多数の石鏃をつくる剥離技術は縄文の石器の押圧剥離とは異なり、先端の尖る硬い工具を利用して、比較的大きな力を加えて剥離を行っている。またこの剥離の工具は打点の小ささ（尖り具合）とその硬さから、工具が金属製の可能性もあながち否定できない。

④ 石鏃の石材選択性

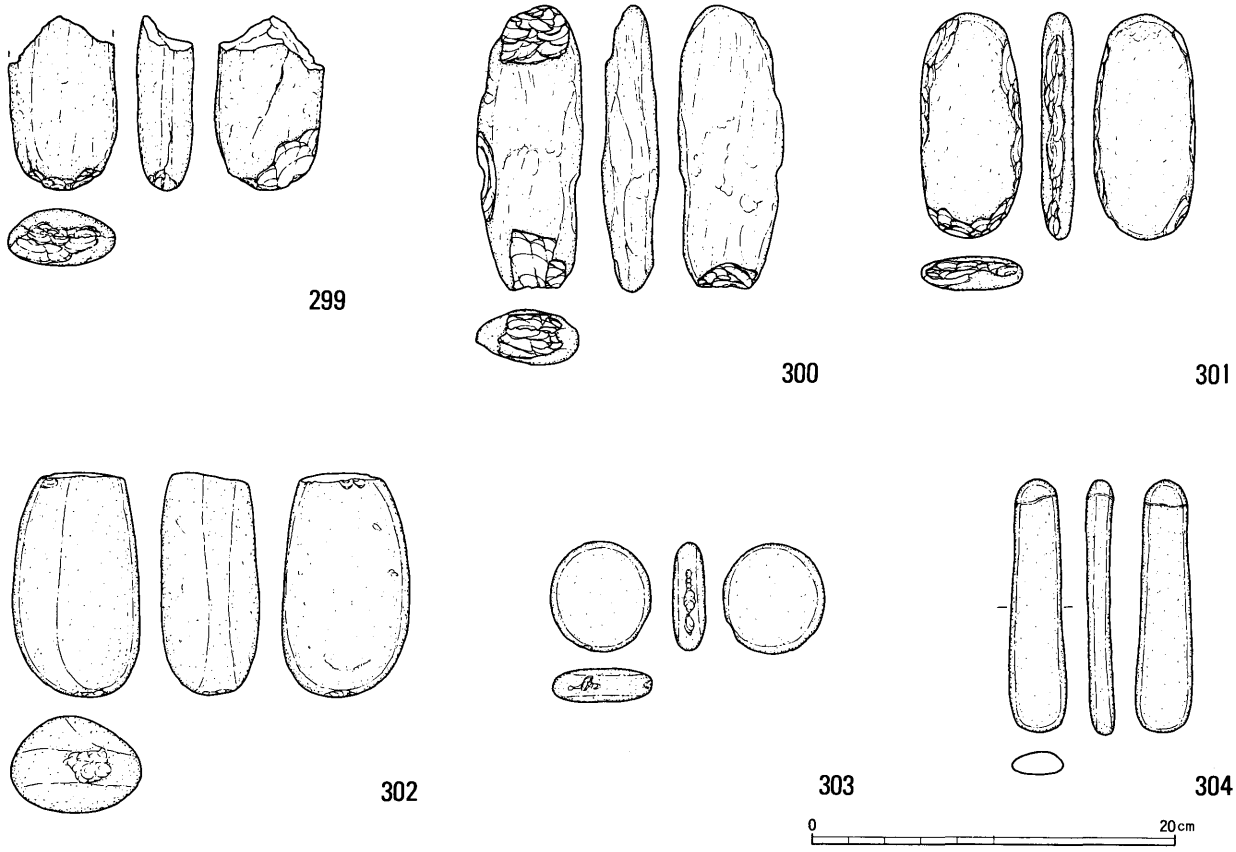
石鏃は在地のチャートと非在地のサヌカイトという２種類の石材が選択されている。チャートは主に凹基無茎石鏃に、サヌカイトは凹基無茎石鏃と有茎石鏃の両方に用いられている。

⑤ 尖頭器の形態

尖頭器の形態はやや小さめの有茎尖頭器と中形・大形の柳葉形尖頭器の２種類がある。

⑥ 尖頭器の加工技術

有茎尖頭器の剥離技術は石鏃に用いられる打点の小さな幅広の薄い剥離である。しかし、石鏃よりも剥離面が大きく器体の奥にまで剥離面が広がる。この剥離を腕の力だけの押圧剥離で実現しようとすると、相当な力技が必要になる。石鏃に用いられる剥離具と同じ剥離具を用いて、さらに力を補助する器具が必要であるか、もしくは間接打撃の可能性もあ



第45図　出土石器実測図（９）（１：４）

るだろう。

柳葉形の尖頭器には大形と中形がある。大形のものはチャートの礫ブロックなどの分厚く大きな素材から製作された可能性が高く、その加工の初期工程を残す資料が234～236・240の資料である。いずれも強い力で硬質ハンマーの直接打撃で成形加工をはじめている資料である。

一方中形の尖頭器（226）の製作は横長剥片を素材にしており、その製作の初期工程は238・239である。バルブの発達する横長剥片を素材にして、押圧剥離に近い平坦な剥離を施しながら、最初に尖頭部を作り始めている。

形態と大きさにより素材が違うので、初期工程からの剥離技術はそれぞれ異なるが、最終整形の加工はいずれの尖頭器も同じ加工である。

⑦　尖頭器の石材

尖頭器の石材にもサヌカイトとチャートが用いられている。尖頭器はチャートが圧倒的に多く、尖頭器の製作剥片も残されている。一方サヌカイトは素材剥片のまま遺跡に持ち込まれたか、もしくは製品で搬入されている可能性もある。

⑧　石鏃と尖頭器の型式学的考察

最初に区分しなければならないのは、214の石鏃とそれ以外の石鏃・尖頭器である。214の石鏃は縄文文化の石器であろう。残念なことにこの石鏃の帰属する縄文文化の編年的位置が、現段階では明らかにできない。この遺跡には押型文土器文化の集石炉が存在するが、そこに特定できる石鏃の型式学的分析はなされていないのが現状である。本遺跡の石鏃は尖頭部が五角形になり、脚部が軽く外弯する特徴を持つ。この形態の石鏃は大川式の押型文土器に伴う場合もあることが知られている。

次に214の石鏃を除外した石鏃・尖頭器類は、最終の整形加工が同じ加工をもつので、おそらく同一文化の石器群であろう。二次加工技術、特に最終加工の技術は加工具（ハンマー）とその使い方が顕著に現れるので、これらに特徴的な剥離面が観察されれば、剥離具とその使い方の作法が同じということになり、結論として同じ文化の石器となるであろう。しかし、ここで問題となるのは、同じ文化に属しながらも、明らかに数種類の異なる形態を作り分けている理由である。石鏃は凹基無茎石鏃と有茎石鏃。そして尖頭器もやはり柳葉・木葉形と有茎尖頭器の２種類がある。

ところで型式学的には、有茎石鏃と凹基無茎石鏃は同じ種類の石器として型式学的変化を認めることはできない。つまり、有茎石鏃と凹基無茎石鏃は同一の文化的出自をもつ石器ではない。

尖頭器については、かえしの有無が有茎尖頭器と柳葉・木葉形尖頭器を分ける属性なので、型式学的変化、もしくは型式学的連続性を両者に認めることが可能である。

また石材の選択性から言えば、サヌカイトは在地の石材ではなく、本遺跡の土器から見るとサヌカイトは弥生土器にくっついてきている石材である。

さて、以上のような事実から、本遺跡の石器についてある作業仮説が立てられる。

それは在地の石材を用いた縄文文化の形態を残す石器とサヌカイトを用いた弥生文化の形態の石器が共存しているという作業仮説である。縄文文化的な要素は形態と大きさと石材に残されるが、凹基無茎石鏃がその例であろう。一方弥生文化的な石器はサヌカイトを用いる有茎石鏃と224の有茎尖頭器である。

ところで、作業仮説として文化的出自を区別される上の２種類の石器の他に、もう１種類の石器が存在する。それは在地の石材を用いながらも弥生文化の石器形態を実現しようとする石器である。この石器が本遺跡の中で量的にもっとも多いことに注目するべきであろう。

結論は、本遺跡のほとんどの石器に用いられる剥離技術、特に二次加工技術は弥生文化的な要素の技術である。一方石器形態と石材の選択からは縄文文化的な要素の石器がある程度の比率で残っている。また量的に最も多い石器は弥生文化的な剥離技術・形態を持ちながら在地の石材を多用する石器なのである。本遺跡の土器分析との総合が望まれる。

この分析は石鏃・尖頭器のみであったが、今後はその他の器種や剥片剥離技法に至るまで行う必要はあろう。今回の分析は今後のための道標である。

（株式会社アルカ　角張淳一）

4．結　語

今回のコドノＢ遺跡（第２次）調査では、大きく分けて縄文時代早期、縄文時代晩期～古墳時代初め、そして中世の３時代の遺構・遺物が確認された。中でも縄文時代早期の焼土坑（集石炉）と、弥生時代前期の平地式住居、第１次調査の２基に引き続き検出された９基の多種多様な方形周溝墓などが注目される。以下に特筆すべきこれらの遺構について、主に櫛田川（祓川）流域の他遺跡の調査結果と比較検討し、若干の考察を行いたい。

（１）焼土坑（集石炉）

今回の調査では焼土坑（集石炉）と思われる遺構を３基検出した。火熱を受けた礫と押型文土器が出土した集石炉ＳＦ32、同じく火熱を受けた礫が底部から見つかった焼土坑ＳＦ88、そしてＳＦ88と隣接し、遺物は全く出土しなかったが底面の一部が赤く焼土化していた焼土坑ＳＦ91である。うち、ＳＦ32とＳＦ88については埋土に炭化物が混じっており、その一部を放射性炭素年代測定法にかけたところ、ＳＦ32は8,830±120、ＳＦ88は9,630±100と言う測定結果を得た。また、炭化材はいずれも薪炭材として優良な材質を有するブナ科のコナラ属コナラ亜属コナラ節であった。（パリノ・サーヴェイ株式会社による分析結果）ＳＦ32とＳＦ88についての時期差が800年程あることについては、層位的に違いはなく、分析の誤差を考慮しても焼土坑ＳＦ88・91の方が、いくばくかＳＦ32よりも古いのであろう。当遺跡から約５㎞程西南西の櫛田川左岸に位置し、縄文時代早期前半の多数の竪穴住居や煙道付炉穴が確認された鴻ノ木遺跡[7]（５）に、近い時期のものと言えよう。

検出面から礫が表出していたＳＦ32は同じく鴻ノ木遺跡で７基とされた集石炉と同様のものであると思われる。このＳＦ32は集石炉として使われる前にも炉として利用されていたことを前述した。ＳＦ32の西約２ｍ程の所には、点々と径約0.3～0.4ｍ程の橙色に焼けた土が３ヶ所で見つかっている。他にもほぼ同時期に複数の炉がかつて存在しており、これらの焼土はその炉の痕跡である可能性が考えられる。

（２）円形の平地式住居

「円形住居の床面中央に楕円形土壙を有し、その両端に二主柱穴を持ち、ほかに主柱穴が認められない」という特徴を持つ大韓民国が源である松菊里型住居は、これまでに県内で四日市市生桑町の大谷遺跡Ｃ地区[8]で１棟、多気郡明和町の金剛坂遺跡（６）（第４次）調査[9]での１棟が知られる。いずれも弥生時代前期の住居とされる。今回の調査で検出したＳＨ92の時期は弥生時代前期のものと思われ、床面中央部に二つの主柱穴を持つが、中央土坑は無い（中央に細長い土坑状の遺構は存在するが非常に浅く、攪乱の可能性もある）。周囲には２重に柱穴が巡り、掘り込み及び壁周溝は確認できなかった。いわゆる「発展期松菊里型住居」に類似のものであると思われるが、松菊里型住居と呼ぶには決め手に欠くものである。

円形に柱穴が巡る住居跡としては、員弁郡大安町に位置する宮山遺跡[10]で縄文時代晩期頃と思われる住居跡が19棟確認されている。住居中央の土壙及びその両端の主柱穴は見られず、簡易な構造の平地式住居の可能性が高いと報告されている。また、前述した大谷遺跡でもＢ地区で杭列が伴う壁周溝が２重に巡る弥生時代前期の住居跡が見つかっている。この住居は中央に円形の土壙を有している。これらの住居の差異がどこからくるものなのか、今後の類例の調査を期待したい。

（３）方形周溝墓

今回の調査で検出した方形周溝墓は全部で９基である。いずれも埋葬主体は確認できなかったが、時期・規模・方向・陸橋の位置と数等、多様である。

まず、時期であるが弥生時代前期のものが１基（ＳＸ86）、中期のものが１基（ＳＸ90）、残りは弥生時代末～古墳時代初めのもの（ＳＸ７・44・57・62・74・80・89）と分類した。コドノＢ遺跡第１次調査でも前期のＳＸ37、中期のＳＸ38（コドノＢ遺跡第３次調査の結果、中期のものであることが判明）があり、コドノＢ遺跡の方形周溝墓は第１次調査区と第２次調査区間の谷の両側で造られ始めたと考えてよいと思われる。

規模と方向を含めて以下にもう少し詳細に弥生時代末～古墳時代初めの７基の時期を推論してみる。今回の調査では、東西に細長い調査区に沿うように整然と方形周溝墓群が検出された。また、ＳＸ57と

ＳＸ62だけはそれぞれ周溝の屈曲部で朱の付いた石皿が見つかっており、両者の緊密な関係を示すものかも知れない。配置上では大型のＳＸ62に、ＳＸ57とＳＸ74が東西に寄り添っているようにも見える。同時期の方形周溝墓で周溝から朱付着の石製品が出土した例としては他に位田遺跡[11]のＳＸ６が知られる。特に擦石の出土位置は、ＳＸ62の石皿とほぼ同様であり、南東に陸橋をもつ点も同じである。

周溝の開口方向については、前述の位田遺跡の報告書に詳しい。この中で県下の「中央陸橋型」の方形周溝墓の開口方向は、南東方向と西方向に集中するということが触れられており、これは墳丘の主軸に何らかの規制が働いていた可能性が高いと指摘されている。これは今回のコドノＢ遺跡でも当てはまり、「中央陸橋型」のＳＸ７・62・74・89などはほぼ南東、これらとは南北軸方向の傾きが少し異なるＳＸ44・57も南方向に開口方向を持つ。付近の遺跡の方形周溝墓では昭和46年の土砂採取に伴う事前調査である金剛坂遺跡（第１次）調査[12]の７基のうち、一番新しいとされるＳＸ26は南東に開口。昭和60・61年に調査の寺垣内遺跡[13]（７）ではほとんどが弥生後期とされる25基のうち、周溝の中央に陸橋をもつタイプのＳＸ５・11・12・19などは南東方向に開口する。近年調査された例では、明和町北野遺跡[14]（第２次）調査の２基、松阪市瀬干遺跡[15][16]（８）の３基、明和町城堀遺跡[17]・金剛坂遺跡（第５次）調査[18]のそれぞれ１基がやはり南東部分に開口部分をもつ。ちなみに多くの方形周溝墓が検出された例として昭和57年～昭和60年にかけて調査が行われた松阪市草山遺跡[19]（９）が挙げられるが、弥生時代後期から古墳時代にわたっての方形周溝墓28基の陸橋位置に法則性は認められないように思える。このことから少なくとも祓川流域に限れば、「中央陸橋型」の方形周溝墓については現在のところ、南東方向に開口するものが大半であると言える。　　（西出　孝）

〔註〕

① 中間研志「松菊里型住居－我国稲作農耕受容期における竪穴住居の研究－」（『東アジアの考古と歴史　中　岡崎敬先生退官記念論集』岡崎敬先生退官記念事業会、1987年）。

② 山田　猛『山城遺跡・北瀬古遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、1994年）。

③ 藤澤良祐「山茶椀研究の現状と課題」（『研究紀要』３、三重県埋蔵文化財センター、1994年）。

④ 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Mie history』１、三重歴史文化研究会、1990年）。

⑤ 福田哲也「阿形遺跡」『ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか』（三重県埋蔵文化財センター、1992年）。

⑥ 田辺昭三『陶邑古窯址群』（平安学園考古学クラブ、1966年）。

⑦ 田村陽一・森川常厚他『鴻ノ木遺跡』（一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ　三重県埋蔵文化財センター、1998年）。

⑧ 小玉道明『大谷遺跡発掘調査報告Ⅱ－Ｃ地区の遺構－』（四日市市教育委員会、1976年）。

⑨ 萩原義彦、川崎志乃『金剛坂遺跡（第４次）・辰ノ口古墳群（第２次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1999年）。

⑩ 竹内英昭ほか『一般国道475号東海環状自動車道宮山遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1999年）。

⑪ 米山浩之ほか『一般国道23号中勢道路建設事業に伴う位田遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1999年）。

⑫ 山澤義貴・谷本鋭次『金剛坂遺跡発掘調査報告』（明和町教育委員会、1971年）。

⑬ 『三重県埋蔵文化財年報』16・17（三重県教育委員会、1985・1986年）。

⑭ 『三重県埋蔵文化財センター年報４』（三重県埋蔵文化財センター、1993年）。

⑮ 宇河雅之ほか『瀬干遺跡・綾垣内遺跡・大蓮寺遺跡・柳辻遺跡・北ノ垣内遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）。

⑯ 原田恵理子他『瀬干遺跡（第２次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2000年）。

⑰ 『平成11年度三重県埋蔵文化財センター年報』（三重県埋蔵文化財センター、2000年）。

⑱ 奥野　実『金剛坂遺跡（第５次）・辰ノ口古墳群（第３次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2001年）。

⑲ 『草山遺跡発掘調査月報』Ｎｏ．１～10（松阪市教育委員会1982～1985年）。

図版番号	登録番号	器種	出土位置		計測値（cm）		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
			地区	遺構	口径	器高						
1	004-05	縄文土器 押型文	D19	SF32			外：ネガ楕円文	粗	並	外：明黄褐色 内：にぶい黄橙色	小片	
2	009-06	弥生土器 壺口縁部	D35	SX86			外：口唇部に刻目、口縁部ヨコナデ 内：ナデ	粗	良	橙色	小片	
3	010-05	弥生土器 壺頸部	E33	SX86			外：ヘラ描き沈線、ミガキ 内：ミガキ	粗	良	にぶい黄橙色	小片	
4	004-04	弥生土器 壺体部	D35	SX86			外：ヘラ描き沈線 内：ナデ	やや粗	並	橙色	小片	
5	009-01	弥生土器 壺肩部	B34	SX86			外：ヘラ描き沈線 内：ナデ	やや粗	良	にぶい黄橙色	小片	
6	010-06	弥生土器 壺肩部	E33	SX86			外：ヘラ描き沈線 内：ナデ	粗	並	橙色	小片	
7	009-02	弥生土器 壺肩部	B34	SX86			外：ヘラ描き沈線 内：ナデ	やや粗	良	にぶい黄橙色	小片	
8	010-04	弥生土器 壺肩部	E33	SX86			外：ヘラ描き沈線 内：ナデ	粗	良	にぶい橙色	小片	
9	009-03	弥生土器 壺肩部	C33	SX86			外：ヘラ描き沈線 内：ナデ	やや粗	良	橙色	小片	外面にスス付着
10	009-04	弥生土器 壺肩部	C35	SX86			外：ヘラ描き沈線 内：風化のため調整不明	粗	並	にぶい黄橙色	小片	
11	004-03	弥生土器 壺口縁部	E34	SX86			外：ヘラ描き沈線 内：ナデ	粗	並	外：橙色 内：浅黄橙色	小片	
12	010-03	弥生土器 甕体部	E33	SX86			外：半裁竹管、ナデ 内：ハケメ	粗	良	橙色	小片	
13	014-02	弥生土器 壺肩部	A35	SX90			外：半裁竹管 内：摩滅のため調整不明	粗	並	橙色	小片	
14	014-03	弥生土器 壺口縁部	Z35	SX90			外：ヘラ描き沈線、ナデ 内：ナデ	粗	良	明黄褐色	小片	
15	014-01	弥生土器 甕口縁部	A35	SX90			外：口唇部に刻目、ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密	良	橙色	小片	
16	008-01	弥生土器 甕	A27	SH92	34.8	53.9	外：口縁部ヨコナデ，沈線，口唇部に刻目、ハケ後ヘラミガキ、ハケメ	やや粗	並	外：橙色 内：にぶい橙色	底部完存	外面にスス付着
17	048-01	石皿	D19	SH40							完存	
18	028-07	弥生土器 高杯脚部	D23	SH56	脚径 12.0		外：櫛描き横線文、ハケ後ミガキ、ナデ 内：ハケメ、工具ナデ	やや密	並	にぶい黄橙色	1／3	
19	028-03	弥生土器 台付甕脚部	D22	SH56	脚径 7.5		外：ハケメ、ナデ 内：ナデ、ハケメ	やや密	並	にぶい黄橙色	1／2	
20	025-02	弥生土器 台付甕	C23	SH61			外：ケズリ後ハケメ 内：ハケ後ナデ	粗	良	にぶい黄橙色	1／5	内面に炭化物付着
21	025-01	弥生土器 台付甕脚部	C22	SH61	脚径 10.0		外：ハケメ、ヨコナデ、ハケ後ヨコナデ 内：ナデ、ハケメ	粗	良	にぶい黄橙色	2／3	
22	025-05	弥生土器 台付甕脚部	C23	SH61	脚径 16.2		外：ハケメ、ケズリ、ヨコナデ 内：ナデ、ハケメ	粗	良	にぶい黄橙色	1／5	
23	026-01	弥生土器 高杯脚部	C23	SH61	脚径 9.4		外：ケズリ後ミガキ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、シボリ痕	やや密	良	橙色	1／4	
24	026-02	弥生土器 台付壺脚部	C23	SH61			外：櫛描き横線文、櫛歯刺突列、ミガキ 内：ハケメ	やや粗	良	橙色	1／2	
25	025-03	弥生土器 鉢底部	A29	SH72	底径 5.3		外：ハケメ、ハケ後ヨコナデ 内：ナデ	粗	良	にぶい黄橙色	1／2	
26	025-04	弥生土器 台付甕脚部	A29	SH72	底径 13.2		外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗	良	にぶい黄橙色	1／6	
27	002-01	土師器 広口壺	C24	SX57	15.4		外：口縁部ヨコナデ、ハケメ 内：ハケメ、ナデ、ナデ・オサエ	粗	並	外：橙色，灰黄褐色 内：にぶい褐色，灰黄褐色	1／4	28と同一個体
28	003-01	土師器 広口壺	C24	SX57	底径 8.0		外：ハケメ 内：ハケメ、ナデ	粗	並	外：橙色，灰黄褐色 内：褐灰色，灰黄褐色	底部完存	27と同一個体
29	047-01	石皿	C22	SX57							ほぼ完存	表面に朱付着
30	007-01	土師器 広口壺	C24	SX62			外：ヨコナデ、刺突文、ハケメ、ミガキ 内：ヨコナデ、オサエ・シボリ、ハケメ	やや粗	良	にぶい黄橙色	1／3	擬口縁
31	006-01	土師器 広口壺	A25	SX62	底径 4.6		外：ミガキ、ハケメ　内：工具ナデ、ハケメ 底部：ナデ	やや密	良	浅黄橙色	1／2	胴部から底部完存 No.1、No.2

第3表　出土遺物観察表（1）

図版番号	登録番号	器種	出土位置		計測値（cm）		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
			地区	遺構	口径	器高						
32	001-01	土師器 広口壺	D26	SX62	底径 30.6		外：ハケメ、ナデ　内：ナデ 底部：ヘラケズリ	やや粗	並	外：にぶい黄橙色 内：黒褐色	底部完存	No. 3
33	018-04	土師器 広口壺	B25	SX62			外：ミガキ 内：ミガキ	やや粗	並	浅黄橙色	小片	
34	016-06	土師器 広口壺	B25	SX62			外：ナデ、ハケメ 内：刺突文、ナデ	やや粗	並	橙色	小片	
35	016-04	土師器 広口壺	B28	SX62			外：ナデ、刻目 内：ナデ	やや密	並	にぶい黄橙色	小片	
36	016-05	土師器 広口壺	D28	SX62			外：刺突文、ナデ 内：ナデ	やや粗	並	浅黄橙色	小片	
37	015-08	土師器 壺肩部	D28	SX62			外：横線文、刺突文、ナデ 内：ナデ	やや粗	並	灰黄褐色	小片	
38	016-01	土師器 壺肩部	B25	SX62			外：櫛描き横線文、刺突文、ナデ 内：ナデ	やや密	並	橙色	小片	
39	015-01	土師器 広口壺	B25	SX62	11.6		外：口縁部ナデ、ミガキ 内：ナデ	やや密	並	浅黄橙色	1／5	
40	015-02	土師器 広口壺	C24	SX62	14.0		外：口縁部ナデ、ミガキ 内：ナデ	やや密	並	にぶい橙色	1／4	
41	019-02	土師器 広口壺	C25	SX62	14.2		外：口縁部ヨコナデ、突帯文 内：ヨコナデ	やや密	並	外：にぶい橙色 内：浅黄橙色	1／8	
42	021-02	土師器 壺口縁部	D26	SX62	12.8		外：口縁部ヨコナデ、ハケメ 内：ナデ	やや粗	並	外：浅黄橙色 内：灰色	1／3	No. 1
43	019-05	土師器 広口壺	A26	SX62	底径 6.2		外：ナデ（ハケメ少し残る）内：ハケメ 底部：ナデ	やや粗	並	外：浅黄橙色 内：にぶい黄橙色	底部完存	
44	021-01	土師器 広口壺	C28	SX62	底径 6.2		外：ミガキ　内：ハケメ 底部：ナデ	やや粗	並	外：浅黄橙色 内：にぶい橙色	底部完存	
45	020-03	土師器 高杯口縁部	C25	SX62	21.8		外：口縁部ヨコナデ、ミガキ 内：ミガキ	やや粗	並	にぶい橙色	1／3	
46	020-02	土師器 高杯脚部	A28	SX62	脚径 9.6		外：ミガキ、ナデ 内：ナデ、シボリ痕	やや粗	並	浅黄橙色	1／4	
47	015-06	土師器 高杯脚部	D25	SX62			外：キザミ、櫛描き横線文、ミガキ 内：ナデ	やや密	並	にぶい黄橙色	1／6	
48	019-04	土師器 台付甕脚部	A26	SX62			外：ハケメ 内：ナデ	やや粗	並	外：黄橙色 内：橙色	1／3	
49	020-04	土師器 台付甕脚部	D26	SX62	脚径 7.2		外：工具ナデ、ヨコナデ 内：ナデ	やや粗	並	外：浅黄橙色 内：橙色	1／4	No. 4
50	015-04	土師器 台付甕脚部	B28	SX62	脚径 8.5		外：ナデ 内：ハケメ	やや粗	並	にぶい橙色	1／2	
51	019-03	土師器 鉢	A25	SX62	底径 3.5		外：ナデ 内：ナデ	粗	並	外：黄橙色 内：橙色	底部完存	ミニチュア
52	018-07	土師器 鉢	B25	SX62	底径 1.7		外：オサエ、ナデ 内：オサエ	やや密	並	浅黄橙色	1／4	ミニチュア
53	015-05	土師器 甕	C25	SX62	底径 4.0		外：ナデ 内：ナデ	やや密	並	浅黄橙色	1／4	ミニチュア
54	019-06	鉄鏃	A28	SX62							ほぼ完存	重量7.27ｇ
55	046-01	石皿	D28	SX62							完存	表面に赤色顔料付着・使用痕あり
56	012-01	土師器 広口壺	A33	SX80	14.8		外：口唇部に羽状文、浮文、ハケメ 内：ナデ	やや粗	並	浅黄橙色	1／3	
57	011-02	土師器 短頸壺	Z32	SX80	11.6		外：ヘラミガキ 内：ヘラミガキ、ナデ	やや粗	並	橙色	3／4	
58	011-03	土師器 甕口縁部	B33	SX80	15.2		外：口縁部ヨコナデ、ハケメ 内：口縁部ヨコナデ、ハケメ	やや粗	並	淡黄色	1／14	B類
59	013-06	土師器 壺肩～体部	Z35	SX89			外：摩滅が激しく調整不明 内：ナデ、青海波文	やや密	良	橙色	小片	
60	013-01	土師器 甕口縁部	Z33	SX89	16.8		外：口縁部ヨコナデ、刺突文 内：ヨコナデ	やや粗	良	にぶい橙色	1／12	
61	013-04	土師器 甕口縁部	Z34	SX89	11.8		外：口縁部ヨコナデ	やや粗	良	明黄褐色	1／8	
62	013-05	紡錘車	Z35	SX89	5.7	1.8		やや密	並	にぶい黄橙色	1／2	残量30.3ｇ

第４表　出土遺物観察表（２）

図版番号	登録番号	器種	出土位置		計測値（cm）		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
			地区	遺構	口径	器高						
63	028-04	土師器 椀	E16	SH10	10.0	4.1	外：ナデ 内：ナデ	やや粗	並	浅黄橙色	1／8	
64	028-06	土師器 甕	E16	SH10	14.2		外：口縁部ヨコナデ、ハケメ 内：ハケメ、工具痕	やや粗	並	にぶい橙色	1／4	
65	028-05	土師器 甕	E16	SH10	18.0		外：口縁部ヨコナデ、ハケメ 内：ハケメ	やや粗	並	にぶい黄橙色	1／4	
66	029-09	土錘	E16	SH10	1.6	4.2		やや密	並	灰白色	完存	穴径0.4cm 重量8.4g
67	022-03	土師器 甕	D17	SH24	17.6		外：口縁部ヨコナデ、オサエ 内：工具ナデ	やや密	並	淡黄色	1／4	外面にスス付着
68	022-01	土師器 甕	D17	SH24	32.0		外：口縁部ヨコナデ、オサエ 内：工具ナデ	やや密	並	外：灰褐色 内：明褐灰色	小片	外面にスス付着
69	022-02	土師器 甕	D17	SH24	26.0		外：口縁部ヨコナデ、オサエ 内：工具ナデ	やや密	並	灰黄褐色	1／4	外面にスス付着 No.7
70	004-01	山茶椀	D17	SH24	17.3	4.9	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部：回転糸切り後、高台はりつけ	やや粗	並	にぶい黄橙色	完存	内面に自然釉あり、底部に籾殻痕あり、No.5、第4型式
71	023-02	山茶椀	D17	SH24	16.8	5.2	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部：回転糸切り後、高台はりつけ	やや密	良	灰白色	完存	自然釉あり、底部に籾殻痕あり、No.10、第4型式
72	023-01	山茶椀	D17	SH24	17.5	6.0	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部：回転糸切り後、高台はりつけ	やや密	良	淡黄色	1／2	底部に籾殻痕あり、No.8、第4型式
73	004-02	山茶椀	D17	SH24	18.0	5.7	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部：回転糸切り後、高台はりつけ	やや粗	並	にぶい黄橙色	完存	自然釉あり、底部に籾殻痕あり、No.7、第4型式
74	024-01	凹石	D17	SH24							完存	全面にスス付着 重量1.55kg、No.13
75	028-02	山茶椀	D18	SH33	底径 6.7		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部回転糸切り後、高台はりつけ	やや密	並	にぶい黄橙色	底部完存	第6型式
76	028-01	山茶椀	D18	SH33	15.7	5.0	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部回転糸切り後、高台はりつけ	やや密	並	にぶい黄橙色	1／3	第6型式
77	035-07	土師器 皿	E14	SK20	10.2	2.95	外：口縁部ヨコナデ、オサエ 内：ナデ	やや粗	並	にぶい橙色	1／4	
78	035-06	土師器 皿	B19	SK27	8.4	1.7	外：口縁部ヨコナデ、オサエ 内：ナデ	やや粗	並	浅黄橙色	ほぼ完存	
79	036-02	土師器 鍋	A21	SD47	23.8		外：口縁部ヨコナデ、ナデ、ハケメ 内：ナデ、オサエ	やや粗	並	浅黄橙色	2／3	口縁部にスス付着 第2段階
80	035-02	山茶椀	A21	SD47	15.2	5.4	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部：回転糸切り後、高台はりつけ	やや粗	良	灰白色	1／6	第5型式
81	035-01	山茶椀	A20	SD47	15.6	5.85	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部：回転糸切り後、高台はりつけ	やや粗	良	浅黄色	1／4	自然釉あり、底部に籾殻痕あり、第5型式
82	035-03	山茶椀	A20	SD47	15.8	5.5	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部：回転糸切り後、高台はりつけ	やや粗	良	にぶい黄橙色	1／6	第6型式
83	035-05	陶器 鉢	B20	SD47	底径 9.6		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部：回転糸切り痕	やや密	良	にぶい橙色	1／5	
84	033-07	山茶椀 墨書土器	D2	SD1	底径 6.4		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部：ケズリ出し高台、ヘラケズリ	やや粗	良	外：灰白色 内：灰黄色	1／2	底部に2ヶ所墨書あり、第6型式
85	033-06	山茶椀	A20	SD4	底径 5.4		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部：回転糸切り後、高台はりつけ	やや密	良	にぶい黄橙色	8／9	底部に籾殻痕あり、第6型式
86	033-04	山茶椀	A20	SD4	底径 6.7		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部：回転糸切り後、高台はりつけ	やや密	良	外：淡黄色 内：浅黄色	3／4	底部に籾殻痕あり、第6型式
87	034-04	青磁 椀	E15	SD22	底径 5.0		外：ケズリ出し高台後、施釉 内：ロクロナデ後、施釉	密	良	にぶい橙色	1／5	内面に蓮弁文あり
88	033-01	山茶椀	C14	SD22	底径 8.2		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部：回転糸切り後、高台はりつけ	やや密	良	浅黄色	1／3	第5型式
89	033-02	山茶椀	D18	SD37	底径 6.4		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部：回転糸切り後、高台はりつけ	やや密	良	外：淡黄色 内：にぶい黄橙色	3／4	第5型式
90	032-03	山皿	D31	SD78	7.8	1.9	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部：回転糸切り痕	密	良	にぶい黄色	完存	第6型式
91	032-02	山茶椀	D33	SD83	16.7		外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰黄色	1／6	第6型式
92	031-01	陶器 片口鉢	B31	SD83	底径 11.2		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部：回転糸切り痕後、高台はりつけ	やや粗	良	にぶい黄色	1／2	常滑産

第5表　出土遺物観察表（3）

図版番号	登録番号	器種	出土位置		計測値（cm）		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
			地区	遺構	口径	器高						
93	012-04	縄文土器 押型文深鉢尖底部	A24	SX57			外：ネガ楕円文、深い縦施文	やや粗	並	にぶい黄橙色	小片	
94	012-03	縄文土器 押型文	D29	SX74			外：ネガ楕円文、縦施文 内：ナデ	やや粗	並	外：にぶい黄橙色 内：橙色	小片	
95	027-02	縄文土器 押型文	C19	SH40			外：ネガ楕円文、縦施文	粗	良	外：灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	小片	擬口縁
96	036-04	縄文土器 押型文	B23	SK60			外：ネガ楕円文、縦施文	粗	並	灰褐色	小片	
97	036-03	縄文土器 押型文	A20	SD47			外：ネガ楕円文、縦施文	粗	並	にぶい赤褐色	小片	
98	031-03	縄文土器 押型文	D31	SD78			外：ネガ楕円文、横施文 内：ナデ	粗	良	橙色	小片	
99	038-05	縄文土器 押型文	B22	Pit			外：ネガ楕円文、縦施文	粗	並	外：明赤褐色 内：黒褐色	小片	
100	039-07	縄文土器 押型文	E20	Pit3			外：ネガ楕円文 内：ナデ	やや粗	並	外：灰褐色 内：浅黄橙色	小片	擬口縁
101	042-04	縄文土器 押型文	A26	包含層			外：ネガ楕円文、横施文 内：ナデ	やや粗	並	にぶい橙色	小片	
102	042-05	縄文土器 押型文	E24	包含層			外：ネガ楕円文 内：ナデ	やや粗	並	外：にぶい橙色 内：褐灰色	小片	
103	042-06	縄文土器 押型文	D17	包含層			外：ネガ楕円文、縦施文	やや粗	並	外：黄褐色 内：にぶい橙色	小片	
104	045-04	縄文土器 押型文	B28	包含層			外：ネガ楕円文重なる、縦施文 内：工具ナデ	やや粗	並	外：にぶい黄橙色 内：にぶい橙色	小片	
105	044-08	縄文土器 押型文	B22	包含層			外：ネガ楕円文 内：ナデ	やや粗	並	にぶい黄橙色	小片	
106	039-06	縄文土器 押型文	C20	Pit1			外：格子文	やや粗	並	外：浅黄橙色 内：暗灰黄色	小片	神宮寺式
107	013-03	縄文土器 脚台部	Z33	SX89	底径 14.0		外：ハケメ、ヨコナデ 内：ヨコナデ、ナデ	粗	良	にぶい黄橙色	1／12	
108	040-09	縄文土器 深鉢口縁部	A26	包含層			外：突帯による窓枠状区画をヘラキザミ	粗	良	橙色	小片	
109	010-01	縄文土器 浅鉢口縁部	E16	SX7			外：横方向ミガキ、浮線網状文 内：横方向ミガキ	やや粗	良	灰黄褐色	小片	大洞A式
110	020-05	縄文土器 浅鉢体部	B28	SX62			外：浮線網状文	やや粗	並	にぶい黄橙色	小片	大洞A式
111	031-06	縄文土器 深鉢体部	A29	SD75			外：突帯上に刻目 内：ナデ	粗	良	橙色	小片	五貫森式
112	015-07	縄文土器 深鉢口縁部	A26	SX62			外：口縁部下に素文突帯 内：ナデ	やや粗	並	浅黄橙色	1／9	
113	042-01	縄文土器 深鉢口縁部	C21	包含層			外：口縁部下に素文突帯	やや粗	並	浅黄橙色	小片	
114	017-01	縄文土器 深鉢口縁部	B25	SX62			外：口縁部下に素文突帯 内：ナデ	やや粗	並	にぶい黄橙色	小片	
115	027-01	縄文土器 深鉢口縁部	E18	SH42			外：口縁部下に素文突帯 内：ナデ	粗	良	浅黄橙色	小片	
116	015-09	縄文土器 深鉢口縁部	D26	SX62			外：口縁部下に素文突帯 内：ナデ	やや粗	並	にぶい黄橙色	小片	
117	045-01	縄文土器 深鉢口縁部	Z35	表土			外：口縁部下に素文突帯 内：ナデ	粗	並	浅黄橙色	小片	
118	016-02	縄文土器 深鉢体部	C28	SX62			外：素文突帯 内：ナデ	やや粗	並	浅黄橙色	小片	
119	026-04	縄文土器 深鉢体部	C23	SH61			外：素文突帯 内：ナデ	粗	良	浅黄橙色	小片	
120	042-03	縄文土器 深鉢体部	Z36	包含層			外：口縁部下に素文突帯 内：ナデ	やや粗	並	にぶい黄橙色	小片	
121	017-02	縄文土器 深鉢口縁部	D28	SX62			外：口縁部下にO字状押圧突帯 内：ナデ	粗	並	外：浅黄橙色 内：にぶい橙色	小片	馬見塚式
122	038-04	縄文土器 深鉢口縁部	B29	Pit3			外：口縁部下にO字状押圧突帯	粗	並	外：黄褐色 内：にぶい黄色	小片	馬見塚式
123	042-02	縄文土器 深鉢口縁部	Z36	包含層			外：口縁部下にO字状押圧突帯	粗	並	外：灰褐色 内：にぶい橙色	小片	馬見塚式

第6表　出土遺物観察表（4）

図版番号	登録番号	器種	出土位置		計測値（cm）		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
			地区	遺構	口径	器高						
124	044-05	縄文土器 深鉢口縁部		試掘			外：口縁部下にO字状押圧突帯 内：ナデ	やや粗	並	にぶい橙色	小片	馬見塚式
125	009-05	縄文土器 深鉢体部	D19	SX7			外：O字状押圧突帯 内：ナデ	粗	良	にぶい黄橙色	小片	外面にスス付着 馬見塚式
126	016-03	縄文土器 深鉢体部	D25	SX62			外：O字状押圧突帯 内：ナデ	やや粗	並	にぶい黄橙色	小片	馬見塚式
127	029-07	縄文土器 深鉢肩部	D23	SH56			外：O字状押圧突帯	やや粗	並	浅黄橙色	小片	馬見塚式
128	026-03	縄文土器 深鉢体部	B25	SH69			外：O字状押圧突帯、二枚貝による条痕調整 内：ナデ	粗	良	にぶい黄橙色	小片	馬見塚式
129	034-02	縄文土器 深鉢体部	E19	SD38			外：O字状押圧突帯	やや粗	並	外：浅黄橙色 内：にぶい黄橙色	小片	馬見塚式
130	045-02	縄文土器 深鉢体部	B21	撹乱			外：O字状押圧突帯 内：ナデ	やや粗	並	浅黄橙色	小片	馬見塚式
131	018-05	縄文土器 深鉢体部	D25	SX62			外：二枚貝による条痕調整 内：ナデ	粗	並	外：橙色 内：にぶい黄褐色	小片	
132	031-04	縄文土器 深鉢体部	D31	SD78			外：二枚貝による条痕調整 内：ナデ	粗	良	明褐色	小片	
133	031-05	縄文土器 深鉢体部	D31	SD78			外：二枚貝による条痕調整 内：ナデ	やや粗	良	にぶい黄橙色	小片	
134	038-06	縄文土器 深鉢体部	D32	Pit1			外：二枚貝による条痕調整	粗	並	外：明褐灰色 内：浅黄橙色	小片	
135	042-07	縄文土器 深鉢体部	E22	包含層			外：二枚貝による条痕調整 内：ナデ	やや粗	並	にぶい黄橙色	小片	
136	016-10	不明土製品	A27	SX62				やや粗	並	灰白色	小片	
137	016-09	不明土製品	D27	SX62				やや粗	並	浅黄橙色	小片	
138	029-06	弥生土器 壺口縁部	E16	SH10			外：ナデ 内：条痕	やや粗	並	にぶい黄褐色	小片	
139	044-01	弥生土器 壺口縁部	A36	表土			外：ナデ 内：刻目、横線文、ハケメ	やや粗	並	橙色	小片	
140	011-05	弥生土器 壺肩部	A22	SX57			外：ヘラ描き沈線 内：ナデ	やや粗	並	外：橙色 内：にぶい橙色	小片	
141	013-07	弥生土器 壺肩部	Z35	SX90			外：ナデ、突帯上に刻目 内：摩滅のため調整不明	粗	良	橙色	小片	
142	023-04	弥生土器 壺肩部	D17	SH24			外：ヘラ描き沈線 内：ナデ	やや密	並	にぶい橙色	小片	
143	029-08	弥生土器 壺肩部	E23	SH56			外：ヘラ描き沈線、ナデ 内：ナデ	やや密	並	にぶい黄橙色	小片	
144	029-02	弥生土器 壺肩部	D22	SH56			外：ナデ、ヘラ描き沈線 内：ナデ	やや粗	並	にぶい黄橙色	小片	
145	026-06	弥生土器 壺肩部	C19	SH40			外：ヘラ描き沈線 内：ナデ	粗	良	にぶい橙色	小片	
146	026-05	弥生土器 壺体部	A29	SH72			外：ヘラ描き沈線、ハケメ 内：ナデ	粗	良	にぶい黄橙色	小片	
147	044-02	弥生土器 壺肩部	Z34	包含層			外：ヘラ描き沈線、ナデ 内：ナデ	やや粗	並	外：灰黄褐色 内：にぶい黄橙色	小片	
148	040-08	弥生土器 壺肩部	Z34	包含層			外：ヘラ描き沈線、ナデ 内：ナデ	やや粗	良	浅黄橙色	小片	
149	044-03	弥生土器 壺体部	C21	包含層			外：ヘラ描き沈線、ハケメ 内：ナデ	やや粗	並	にぶい橙色	小片	
150	044-04	弥生土器 壺肩部	Z35	表土			外：ヘラ描き沈線、ナデ 内：ナデ	粗	並	外：にぶい橙色 内：橙色	小片	
151	029-04	弥生土器 甕体部	D22	Pit4			外：ナデ、ヘラ描き沈線 内：ナデ	やや粗	並	橙色	小片	
152	036-05	弥生土器 甕口縁部	C21	SD47			外：口唇部に刻目、ヨコナデ、沈線 内：ヨコナデ、ナデ	粗	並	外：褐灰色 内：にぶい黄橙色	小片	
153	031-02	弥生土器 甕口縁部	C31	SD78			外：ヘラ描き沈線、ナデ 内：ナデ	粗	良	外：にぶい黄橙色 内：橙色	小片	
154	044-07	弥生土器 甕口縁部	D35	包含層			外：口唇部に刻目、ナデ 内：工具ナデ	やや粗	並	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄橙色	小片	

第7表　出土遺物観察表（5）

図版番号	登録番号	器種	出土位置		計測値（cm）		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
			地区	遺構	口径	器高						
155	011-04	弥生土器 壺底部	A33	SX80	底径 7.0		外：ナデ	粗	並	外：橙色 内：にぶい黄橙色	底部完存	
156	015-03	弥生土器 甕底部	D25	SX62	底径 5.4		外：工具ナデ 内：ナデ	やや粗	並	にぶい黄橙色	2／3	
157	039-03	弥生土器 甕底部	A21	Pit1	底径 7.0		外：工具ナデ、ナデ 内：ナデ	粗	並	外：橙色 内：にぶい橙色	底部完存	
158	039-02	弥生土器 甕底部	E35	Pit1	底径 8.8		外：工具ナデ、ナデ 内：ナデ	粗	並	外：にぶい褐色 内：にぶい橙色	底部完存	
159	010-02	弥生土器 壺口縁部	E16	SX7			外：口縁部ヨコナデ、波状文 内：タテ方向にミガキ	やや粗	良	橙色	小片	第3様式後半
160	017-06	弥生土器 壺口縁部	D27	SX62			外：口縁部ヨコナデ、刻目 内：ハケメ	密	並	淡黄色	小片	
161	045-03	弥生土器 壺口縁部	Z34	表土			外：口唇部に櫛歯刺突、ナデ 内：ナデ	やや粗	並	にぶい黄橙色	小片	内面に瘤状の突起
162	018-01	弥生土器 広口壺口縁	A26	SX62	19.0		外：口唇部に円形浮文・扇形文、ナデ 内：ナデ	やや粗	並	黄橙色	1／4	
163	017-04	弥生土器 壺肩部	A26	SX62			外：波状文、ハケメ 内：ナデ	やや密	並	外：橙色 内：にぶい黄橙色	小片	
164	017-05	弥生土器 壺肩部	A26	SX62			外：縦ハケ後、櫛描き横線文・波状文 内：ナデ	やや粗	並	外：橙色 内：にぶい黄橙色	小片	
165	017-07	弥生土器 壺体部	B28	SX62			外：格子文 内：ナデ	やや粗	並	外：にぶい黄橙色 内：浅黄橙色	小片	
166	018-03	弥生土器 高杯脚部	D27	SX62			外：簾状文 内：ナデ	やや粗	並	浅黄橙色	小片	
167	018-06	弥生土器 高杯杯部	A27	SX62			外：波状文、横線文 内：ナデ	密	並	橙色	小片	
168	017-03	弥生土器 高杯杯部	A26	SX62			外：波状文、横線文、ナデ 内：ナデ	やや粗	並	浅黄橙色	小片	
169	016-08	弥生土器 甕口縁部	D25	SX62			外：口唇部に櫛歯刺突 内：櫛描き横線	やや粗	並	にぶい黄橙色	小片	
170	013-02	弥生土器 甕口縁部	Z34	SX89			外：口唇部に刻目、ハケメ、沈線 内：ヨコナデ	粗	良	橙色	小片	
171	016-07	弥生土器 甕口縁部	D25	SX62			外：口縁部ハケメ、刻目 内：ハケメ、ナデ	やや粗	並	浅黄橙色	小片	
172	045-05	弥生土器 甕口縁部	A32	表土			外：口唇部に刻目、ナデ 内：ナデ	やや粗	並	外：淡黄色 内：にぶい黄橙色	小片	
173	029-03	土師器 壺口縁部	D22	SH56			外：口唇部に刺突文、ナデ 内：ナデ	やや粗	並	にぶい橙色	小片	
174	041-03	弥生土器 広口壺	C19	包含層	19.5		外：口唇部に刺突文、口縁部ヨコナデ、ナデ 内：ヨコナデ	やや密	並	外：にぶい褐色 内：にぶい橙色	1／6	
175	020-01	土師器 壺口縁部	C25	SX62	15.2		外：口唇部に竹管文、ナデ 内：ナデ、竹管文	やや粗	並	浅黄橙色	1／4	
176	029-01	土師器 壺肩部	D22	SH56			外：沈線、刺突文、波状文 内：ハケメ	やや密	良	にぶい橙色	小片	
177	029-05	土師器 壺肩部	D18	SH33			外：横線文、刺突文、ミガキ 内：ナデ	やや密	並	外：黒褐色 内：浅黄橙色	小片	
178	041-01	弥生土器 広口壺	D21	包含層			外：突帯、刺突、櫛描き横線 内：ナデ	やや密	並	外：にぶい橙色 内：橙色	小片	
179	033-05	土師器 壺底部	D15	SD22	底径 4.8		外：ケズリ	やや粗	良	外：浅黄橙色 内：にぶい黄橙色	7／8	
180	030-04	弥生土器 壺底部	E19	Pit1	底径 4.9		外：ハケメ、ナデ 内：ナデ	やや粗	並	外：明赤褐色 内：灰黄褐色	小片	
181	040-07	弥生土器 高杯脚部	A32	包含層			外：櫛描き横線 内：ケズリ	やや粗	良	にぶい橙色	小片	
182	041-04	弥生土器 高杯脚部	A29	包含層			外：ミガキ、櫛描き横線文、櫛歯刺突列 内：ヨコナデ	やや密	並	浅黄橙色	小片	
183	018-02	弥生土器 有段高杯	C24	SX62			外：ヨコナデ、波状文 内：ミガキ	やや密	並	橙色	小片	
184	019-01	弥生土器 有段高杯	C25	SX62	24.6		剥離激しく調整不明	密	並	橙色	1／8	
185	044-06	土師器 甕口縁部	Z35	表土	20.5		外：口縁部ナデ、口縁部下に刺突文、ハケメ 内：ハケメ	やや粗	並	外：浅黄橙色 内：にぶい黄橙色	1／18	

第8表　出土遺物観察表（6）

図版番号	登録番号	器種	出土位置		計測値（cm）		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
			地区	遺構	口径	器高						
186	041-05	土師器 台付甕	E22	包含層	脚径 4.8		外：ヨコナデ　内：ナデ 底部：ヨコナデ	やや密	並	にぶい橙色	小片	ミニチュア
187	043-02	土師器 台付甕脚部	B23	撹乱	脚径 6.0		外：ハケメ、ナデ 内：工具ナデ	やや粗	並	外：橙色 内：にぶい黄橙色	1／5	
188	043-04	土師器 台付甕脚部		試掘	脚径 9.0		外：オサエ、ナデ 内：ナデ	やや粗	並	外：橙色 内：にぶい橙色	1／2	
189	043-01	土師器 台付甕脚部	C25	試掘	脚径 11.7		外：ハケメ、オサエ 内：ナデ	やや粗	並	外：橙色 内：にぶい橙色	1／4	
190	043-03	土師器 甕脚部		撹乱	脚径 8.4		外：ハケメ 内：ハケメ	やや粗	並	外：橙色 内：にぶい橙色	1／6	
191	041-02	弥生土器 台付甕脚部	Z31	包含層	脚径 7.2		外：ケズリ、ナデ　内：工具ナデ 底部：ヨコナデ	やや密	並	にぶい橙色	1／2	
192	030-01	弥生土器 手焙形土器	B20	SD52	18.3	17.4	外：ハケメ、ヨコナデ、刻目　内：ハケメ 底部：ナデ	やや密	良	にぶい黄橙色	1／2	
193	034-05	紡錘車	D15	SD22	6.0	2.4		ほぼ密	並	外：浅黄色 内：浅黄橙色	1／2	残量45.3g
194	034-01	須恵器 杯身	E12	SD11	12.0	4.0	外：ロクロナデ　内：ナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	やや粗	良	灰色	1／4	TK43型式
195	036-01	土師器 甕	D20	SK29	21.0		外：口縁部ヨコナデ、ハケメ 内：ハケメ	やや密	並	浅黄橙色	1／6	
196	034-03	土師器 甕	E19	SD37	20.8		外：口縁部ヨコナデ、ハケメ 内：ケズリ	やや粗	良	外：黄灰色 内：にぶい黄橙色	1／4	
197	032-01	土師器 甕	D31	SD78	13.0		外：口縁部ヨコナデ、ハケメ 内：摩滅のため調整不明	やや粗	良	にぶい黄橙色	1／6	
198	038-02	土師器 甕	D14	Pit1	18.1		外：口縁部ヨコナデ、ナデ 内：ナデ	やや粗	並	にぶい黄橙色	1／9	
199	043-05	土師器 甕口縁部	D31	撹乱	16.0		外：口縁部ヨコナデ、ハケ後ナデ 内：ハケメ	やや粗	並	外：橙色 内：にぶい橙色	1／6	
200	038-03	土師器 甕口縁部	D14	Pit2	27.4		外：口縁部ヨコナデ、ハケメ 内：ナデ	やや密	並	浅黄橙色	1／15	
201	011-01	土師器 甕	C22	SX57	24.8		外：口縁部ヨコナデ、ケズリ 内：オサエ、ナデ	やや粗	並	外：灰褐色 内：浅黄橙色	1／6	
202	038-01	土師器 鍋	D20	Pit5	25.0		外：口縁部ヨコナデ 内：オサエ、ナデ	粗	並	外：にぶい橙色 内：浅黄橙色	1／7	
203	040-05	ロクロ土師器 椀	C21	包含層	底径 7.8		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部：回転糸切り後、高台はりつけ	やや粗	良	にぶい黄橙色	1／3	
204	039-05	山茶椀	D26	Pit2	底径 7.5		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部：回転糸切り後、高台はりつけ	やや粗	並	灰黄色	底部完存	第5型式
205	040-02	山茶椀	C21	包含層	底径 6.8		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部：回転糸切り後、高台はりつけ	密	良	灰黄色	2／3	第5型式
206	040-03	山茶椀	A32	包含層	底径 5.9		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部：回転糸切り後、高台はりつけ	やや密	良	灰白色	底部完存	内面に自然釉付着 第5型式
207	040-01	山茶椀	C31	包含層	底径 6.9		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部：回転糸切り後、高台はりつけ	密	良	黄灰色	底部完存	第6型式
208	040-04	山茶椀	E36	包含層	底径 5.7		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部：回転糸切り後、高台はりつけ	密	良	灰白色	底部完存	第6型式
209	043-06	山茶椀	D33	撹乱	底径 7.5		外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部：回転糸切り後、高台はりつけ	やや粗	良	外：浅黄色 内：灰黄色	底部完存	第6型式
210	039-01	山茶椀	D32	Pit1	15.8	6.5	外：ロクロナデ　内：ロクロナデ 底部：回転糸切り後、高台はりつけ	やや密	並	灰白色	2／3	第6型式
211	040-06	青磁 椀	E15	包含層	底径 5.6		外：タテ方向ケズリ後、施釉　内：施釉 底部：ケズリ出し高台	密	良	胎土：灰黄色 釉：オリーブ黄色	1／7	
212	037-01	不明土製品	B20	SD47				やや粗	並	外：橙色 内：浅黄橙色	小片	
213	037-02	不明土製品	C21	SD47				やや粗	並	橙色	小片	

第9表　出土遺物観察表（7）

図版番号	登録番号	地区	遺構	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)
214	049-01	Ｃ３１	包含層	石鏃	チャート	23.2	16.5	4.5	1.1
215	049-02	Ｄ３１	攪乱	石鏃	石英	23.2	15.8	5.6	1.3
216	049-03	Ｅ３５	ＳＤ８５	石鏃	サヌカイト	22.5	12.3	3.8	0.8
217	049-04	Ａ２９	ＳＨ７２	石鏃	サヌカイト	17.2	11.9	2.1	0.4
218	049-05	Ａ３１	ＳＸ８０	石鏃	サヌカイト	16.5	14.4	3.8	0.6
219	049-06	Ｄ２９	包含層	石鏃	サヌカイト	18.6	9.1	57.8	0.6
220	049-07	Ａ２６	ＳＸ６２	石鏃	サヌカイト	26.8	14.8	3.5	1.1
221	049-08	Ｚ３３	表土	石鏃	チャート	25.4	17.2	4.9	1.5
222	049-09		包含層	石鏃未製品	チャート	30.3	19.0	8.1	3.7
223	049-10	Ｚ３３	ＳＸ８９	石鏃未製品	チャート	27.5	20.1	5.6	2.5
224	049-11	Ｅ２０	ＳＤ３０	尖頭器	サヌカイト	51.1	27.1	6.3	7.7
225	049-12	Ａ２８	ＳＸ６２	尖頭器	チャート	45.5	28.9	8.4	7.6
226	049-13	Ａ３０	ＳＤ７８	尖頭器	チャート	56.4	20.1	6.7	6.8
227	049-14	Ａ３０	ＳＤ７８	尖頭器	チャート	56.0	32.1	8.1	10.7
228	049-15	Ｄ３１	ＳＤ７３	尖頭器	チャート	40.5	30.3	5.6	6.7
229	049-16		SX89表採	尖頭器未製品	チャート	66.5	36.5	18.0	33.6
230	049-17	Ｚ３３	表土	尖頭器未製品	チャート	49.7	28.5	12.7	16.3
231	050-01	Ｚ３４	表土	尖頭器未製品	チャート	69.8	34.5	24.6	47.5
232	050-02	Ａ３２	包含層	尖頭器未製品	チャート	37.0	39.5	7.0	13.1
233	050-03	Ａ２８	ＳＸ６２	尖頭器未製品	チャート	41.2	41.6	22.2	40.6
234	050-04	Ｃ３１	包含層	尖頭器未製品	チャート	85.0	40.9	21.5	72.6
235	050-05	Ｂ３５	ＳＸ８６	尖頭器未製品	チャート	81.1	50.4	30.3	112.2
236	050-06	Ｚ３２	表土	尖頭器未製品	チャート	91.7	53.6	33.1	136.9
237	051-01	Ｄ３１	攪乱	尖頭器未製品	片岩	85.0	59.0	10.0	48.1
238	051-02	Ａ２８	ＳＸ６２	尖頭器未製品	チャート	92.0	38.1	16.2	47.5
239	051-03	Ｚ３１	ＳＸ８０	尖頭器未製品	サヌカイト	77.2	29.2	7.7	17.3
240	051-04	Ｚ３６	包含層	尖頭器未製品	チャート	95.9	64.5	23.2	115.3
241	051-05	Ａ２９	ＳＨ７２	スクレイパー	頁岩	63.5	53.6	16.5	35.4
242	051-06	Ｄ２０	Ｐｉｔ２	スクレイパー	片岩	82.9	35.6	12.7	33.4
243	052-01	Ａ１９	ＳＤ４	石庖丁？	粘板岩	105.0	30.5	4.5	13.8
244	052-02	Ｂ３０	包含層	掻器	チャート	20.4	26.1	68.7	4.8
245	052-03	Ｚ３２	表土	掻器	チャート	18.3	22.2	9.5	4.1
246	052-04	Ｂ３４	ＳＸ８６	掻器	チャート	22.2	19.4	11.9	3.5
247	052-05	Ｚ３３	ＳＸ８９	掻器	チャート	42.3	17.2	8.4	5.4
248	052-06	Ｂ３２	Ｐｉｔ１	掻器	チャート	40.2	29.6	11.6	9.0
249	052-07	Ｃ２８	ＳＸ６２	掻器	チャート	60.3	49.3	19.7	63.4
250	052-08	Ａ３２	表土	掻器	チャート	46.9	46.5	12.7	26.8
251	052-09	Ａ２８	ＳＸ６２	削器	サヌカイト	53.2	27.5	8.4	9.8
252	052-10	Ｚ３３	表土	石錐	サヌカイト	51.1	34.5	9.1	13.1
253	052-11	Ｅ３２	ＳＫ８４	石錐	サヌカイト	36.3	12.7	8.4	3.1
254	053-01	Ｚ３４	ＳＸ８９	ピエスエスキーユ	サヌカイト	35.0	41.0	14.0	21.6
255	053-02	Ｅ２５	包含層	ピエスエスキーユ	サヌカイト	34.9	30.6	12.7	14.4
256	053-03	Ｂ３１	包含層	ピエスエスキーユ	サヌカイト	32.8	36.3	5.9	4.9
257	053-04	Ｃ３５	包含層	ピエスエスキーユ	サヌカイト	35.6	25.7	7.4	6.1
258	053-05	Ｂ３５	ＳＸ８６	ピエスエスキーユ	サヌカイト	24.6	32.4	8.1	5.0
259	053-06	Ｚ３５	ＳＸ９０	ピエスエスキーユ	サヌカイト	17.2	15.1	5.2	1.7

第10表　出土石器類観察表（１）

図版番号	登録番号	地区	遺構	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)
260	053-07	C22	SX57	ピエスエスキーユ	チャート	36.0	41.5	7.5	9.9
261	053-08	Z33	SX89	ピエスエスキーユ	チャート	32.5	26.5	7.0	5.4
262	053-09	Z33	SX89	ピエスエスキーユ	チャート	34.2	36.3	10.5	12.6
263	053-10	Z34	SX89	ピエスエスキーユ	チャート	40.2	37.7	8.8	10.9
264	053-11	A29	SH72	ピエスエスキーユ	チャート	47.2	36.3	12.7	18.8
265	053-12	Z35	SX90	ピエスエスキーユ	チャート	26.4	24.6	6.3	5.1
266	053-13	Z33	SX89	ピエスエスキーユ	チャート	19.0	21.1	5.6	1.9
267	054-01	B28	SX62	R F	チャート	32.8	46.5	16.2	22.7
268	054-02	D31	包含層	R F	チャート	36.6	29.6	9.1	7.7
269	054-03	Z32	包含層	R F	チャート	41.2	35.6	8.4	6.1
270	054-04	A32	包含層	R F	チャート	63.8	39.8	20.1	43.6
271	054-05	C23	SD58	R F	チャート	59.9	55.3	10.9	28.7
272	054-06	B31	包含層	R F	チャート	21.1	39.5	8.8	5.8
273	054-07	Z36	包含層	R F	チャート	46.9	28.2	9.5	9.2
274	054-08	A31	包含層	R F	チャート	59.2	37.3	14.8	22.3
275	054-09	B36	SX88	R F	チャート	25.0	19.5	4.0	18.0
276	054-10	A36	包含層	R F	チャート	26.8	21.5	10.9	4.9
277	054-11	Z33	SX89	R F	サヌカイト	37.0	22.5	6.3	4.0
278	054-12	Z33	SX89	F	チャート	27.5	21.1	5.6	2.4
279	054-13	A29	SH72	F	チャート	22.9	21.8	8.1	2.4
280	054-14	B34	SX86	F	チャート	27.1	21.1	4.5	1.4
281	054-15	Z28	包含層	F	チャート	40.9	44.4	8.8	11.5
282	054-16	A20	SD47	F	チャート	33.5	35.6	9.5	8.6
283	055-01	C23	SH61	石核	チャート	68.0	77.9	55.7	273.8
284	055-02	B21	SD47	石核	チャート	44.4	50.0	36.3	94.7
285	055-03		黄褐色土	石核	サヌカイト	36.6	44.0	34.5	56.9
286	055-04	Z32	包含層	石核	頁岩	46.9	48.6	42.6	102.8
287	056-01	C30	SX74	礫器	頁岩	111.4	72.6	39.1	312.0
288	056-02	C16	包含層	礫器	砂岩	99.4	70.5	30.6	203.3
289	056-03	C28	SX62	礫器	砂岩	61.0	72.3	20.8	91.2
290	056-04	D31	SD78	礫器	砂岩	72.6	83.6	27.8	178.4
291	056-05	E33	SX86	礫器	砂岩	58.9	96.6	96.3	98.2
292	056-06	E33	SX86	礫器	砂岩	73.3	80.4	26.8	183.6
293	056-07	A26	攪乱	礫器	砂岩	63.1	72.6	24.3	115.3
294	056-08	Z33	包含層	礫器	砂岩	27.8	58.9	14.8	20.5
295	056-09	D15	SD22	削器？	砂岩	51.5	52.5	11.2	28.2
296	056-10	Z35	表土	打製石斧	片岩	98.0	47.6	14.1	74.8
297	056-11		SX86	打製石斧	片岩	75.8	63.8	16.2	99.4
298	056-12	A26	SX62	打製石斧	片岩	79.5	45.0	9.0	37.3
299	057-01	D32	風倒木	敲石	花崗岩	97.0	60.3	31.3	251.7
300	057-02	E31	攪乱	敲石	片岩	157.3	58.2	32.4	376.3
301	057-03	A36	表土	敲石	凝灰岩	125.5	56.4	18.6	196.8
302	057-04	D31	SD78	敲石	砂岩	124.1	70.9	53.9	709.8
303	057-05	A35	包含層	敲石	砂岩	61.7	55.7	74.0	83.7
304	057-06	C25	試掘坑	棒状礫	凝灰岩	140.0	32.1	15.8	100.7

※器種の欄の「F」は剥片、「RF」は二次加工のある剥片を示す。

第11表　出土石器類観察表（2）

Ⅳ.　コドノB遺跡（第3次）調査

1．基本的層序

調査区の基本的な層序は第1層が腐食土、第2層が表土、第3層が縄文時代晩期から弥生時代の遺物包含層である黒色土（Hue10YR2/1）、第4層がややくすんだ黄褐色土（Hue10YR5/6）で、第4層上面が検出面である。古墳時代末の遺構は第3層の黒色土上面から掘削されている。

2．遺構と遺物

今回の調査では第1次調査区から連続する弥生時代の方形周溝墓、古墳時代末から奈良時代初めの掘立柱建物・土坑・溝、中世の溝等が確認された。以下に主な遺構・遺物について述べて行く。

なお、この第3次調査の遺構番号は南に隣接する第1次調査区の遺構番号の続きで、ＳＢ40から始めている。

（1）弥生時代

A．方形周溝墓

ＳＸ38

調査区中央に位置する。四隅に陸橋を持つタイプの方形周溝墓と考えられる。第1次調査において南・東・西の周溝が確認されており、今回の調査で北の周溝の存在が明らかになることを期待したが、東西の周溝の続きが確認されたのみであった。溝の最大幅は約2.5m、最深部で約0.4m。断面形状は周溝の内側は垂直に近い角度、外側は緩やかな角度で掘削されている。

遺物については、前回の調査同様、壺の破片が多かった。1～8は、弥生時代前期の壺である。1～3は口縁部で、内面に刻目と凹線が施される。1・2は口縁端部に沈線を有す。4・5は口縁端部に刻目をもつ。6は口縁部外面に凹線がなされる。7は口縁部内面に貼付突帯をもつ珍しい土器である。8は削り出し突帯に沈線がなされる。9は中期の壺の頸部で4条1単位の櫛描き横線文が施される。ＳＸ38は第1次調査の報告で「前期後葉の可能性がある。」と判断したが、この9の出土で中期初め頃まで降ることになるであろう。

（2）古墳時代末期～奈良時代初期

A．掘立柱建物

ＳＢ40

調査区のほぼ中央に位置し、柱穴の一部はＳＸ38西周溝の埋土上から掘削されている。調査区外北へ伸びるために建物の規模は明らかでないが、梁行は3間（約4.0m）と思われる。柱間は桁行約1.1～1.2m、梁行約1.3m。掘形は隅丸の方形を意識して掘削したものと思われる。直径は0.5～0.7m、深さは0.35～0.55m。棟方向はN65°Wである。出土遺物は少ない。18は、内弯する口縁部を持つ近江系の甕である。

ＳＢ41

調査区中央に位置し、柱穴の一部はＳＸ38東周溝の埋土上から掘削されている。ＳＢ40同様に建物の規模は明らかでないが、梁行は3間（約4.7m）と思われる。ＳＢ40との大きな違いは、梁行に並行する溝をもつ点である。第1次調査でも時期・規模・方向が同様のＳＢ35が検出されているが、これは北西・北東・南西の3方向で溝が確認されており（南東は調査区外のために未確認）、この建物との関連が考えられる。柱間は桁行約1.7m、梁行約1.6m。掘形は隅丸の方形。直径は0.3～0.6m、深さは0.21～0.38m。棟方向はN60°Wである。溝は長さ3.6m、幅0.5m、最深部の深さ0.43m。

B．土坑

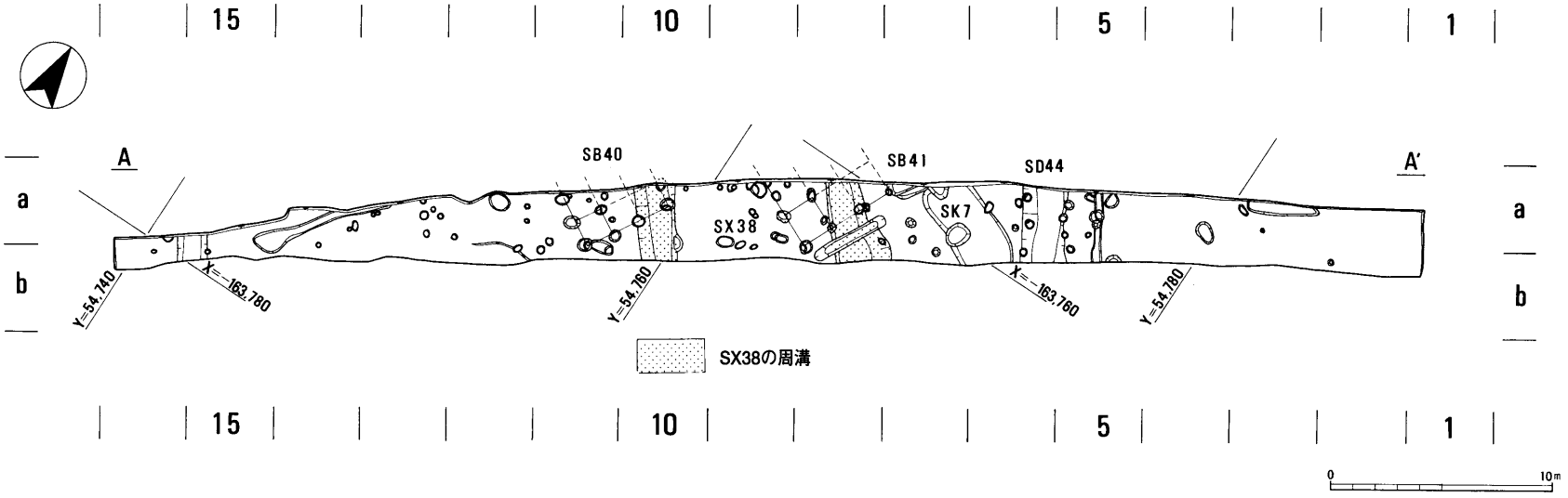
ＳＫ7

調査区中央やや西寄りに位置する、第1次調査区でも南端の一部が検出されていた土坑である。幅は約2.5m、長さは約5m程と推測される。最深部の深さは約0.55m。断面形状は船底型。16～17の7～8世紀の甕の口縁部が出土している。

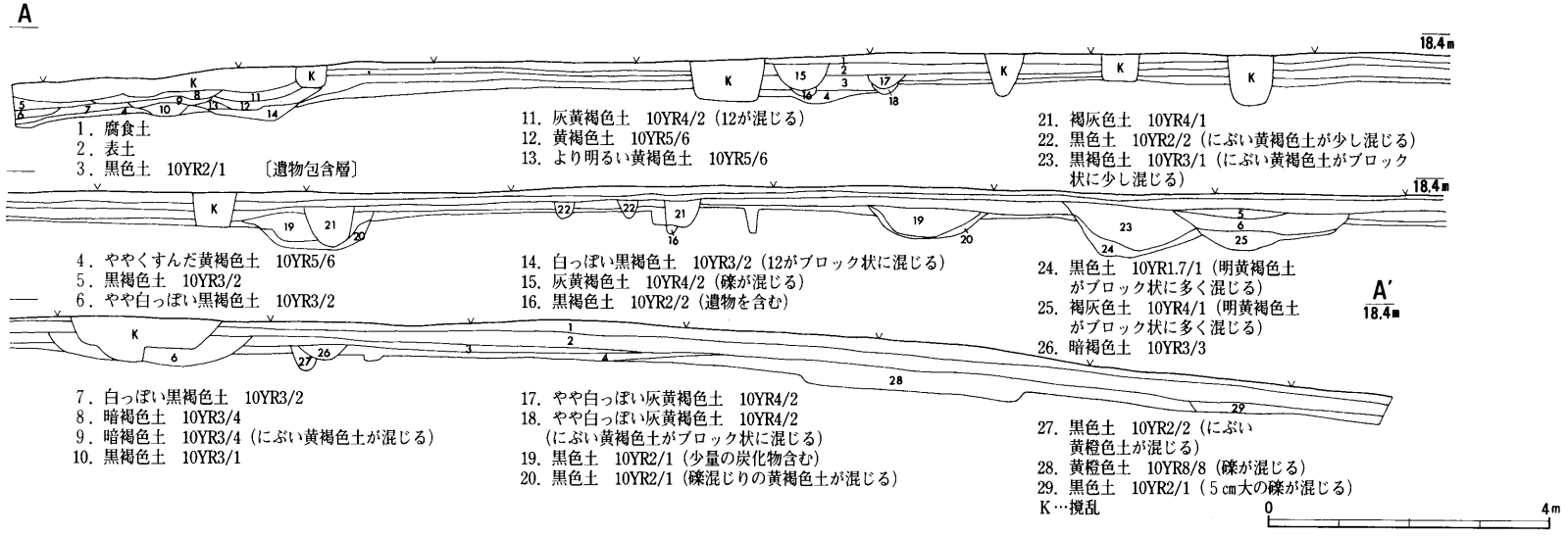
C．溝

ＳＤ44

ＳＫ7と交差するように南北に流れる溝である。第1次調査で検出中に途切れた溝の続きである可能



第46図　調査区平面図（1：300）



第47図　調査区土層断面図（1：100）

性が高い。幅は約2.9m、最深部の深さは約0.4m。断面形状は船底型。

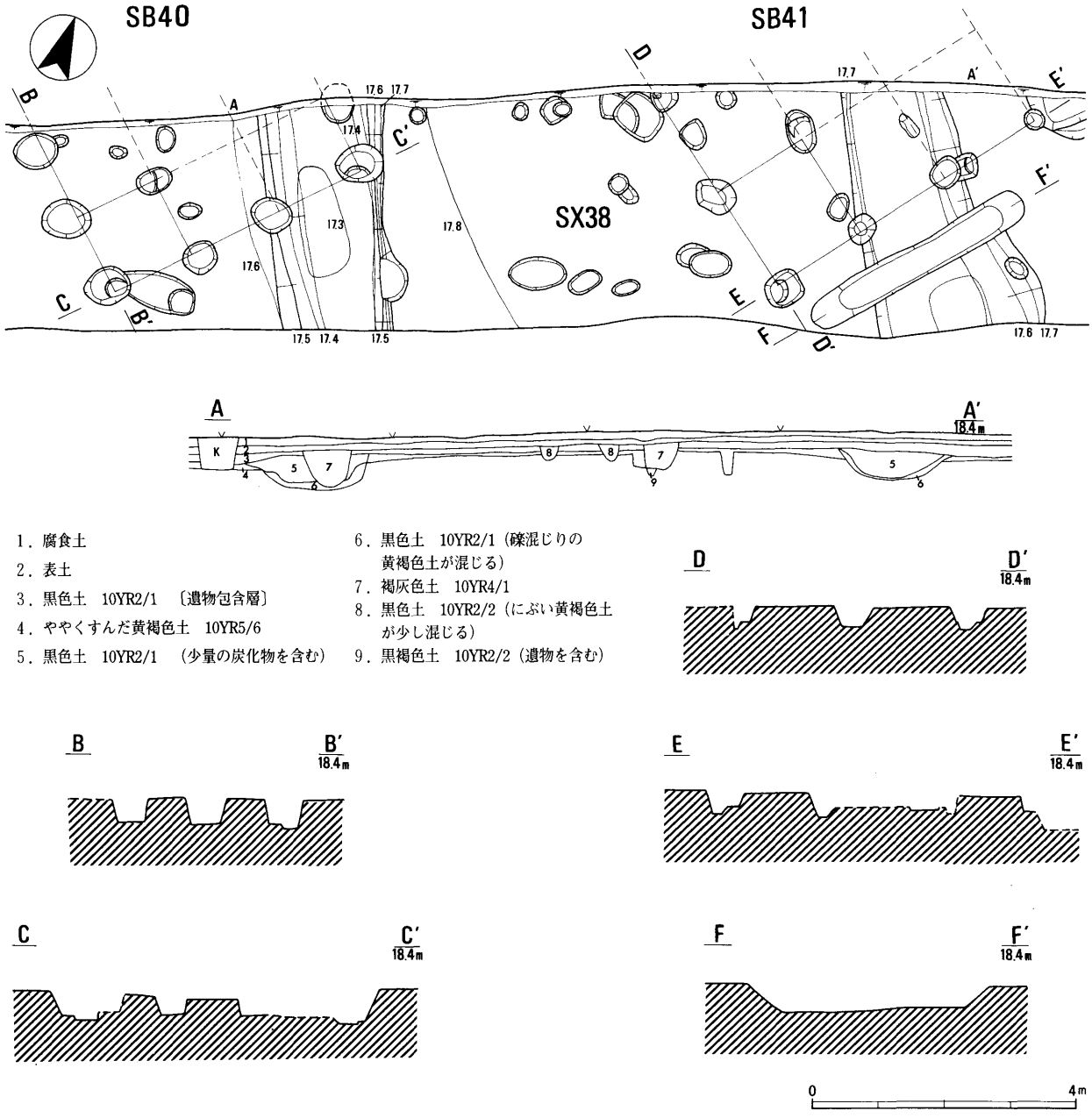
E．包含層・その他遺構等出土遺物

10～12は縄文時代晩期の突帯文土器。12のみが貝殻によるO字状の押圧突帯を持つものである。13は弥生時代前期の甕の口縁部とした。口縁端部上面に刻目を持つ。14は中期の甕の口縁部で、端部上面に刻目、外面に半裁竹管による沈線がなされる。15は包含層出土の打製石斧。緑色片岩製と思われる。19は7世紀頃の筒型甕の口縁部と思われる。約1.5cm間隔で粘土の繋ぎ目が見られる。金剛坂遺跡[1]（6）・北野遺跡[2]でも出土している。

3．結　語

今回の調査で方形周溝墓ＳＸ38の全体が明らかにならなかったのは残念であったが、現状から判断するに墳丘部での東西の長さが約7.5mに対し、南北の長さは11m以上になり、長方形のかなり大きな方形周溝墓であることが判明した。

7～8世紀の掘立柱建物は第1次調査と合わせて



第48図　ＳＸ38、ＳＢ40・41実測図（1：100）

3棟を確認し、全て方向を揃えている。さらにその内の2棟には溝が伴う。この溝と建物の関係など、建物群の性格は興味深い。

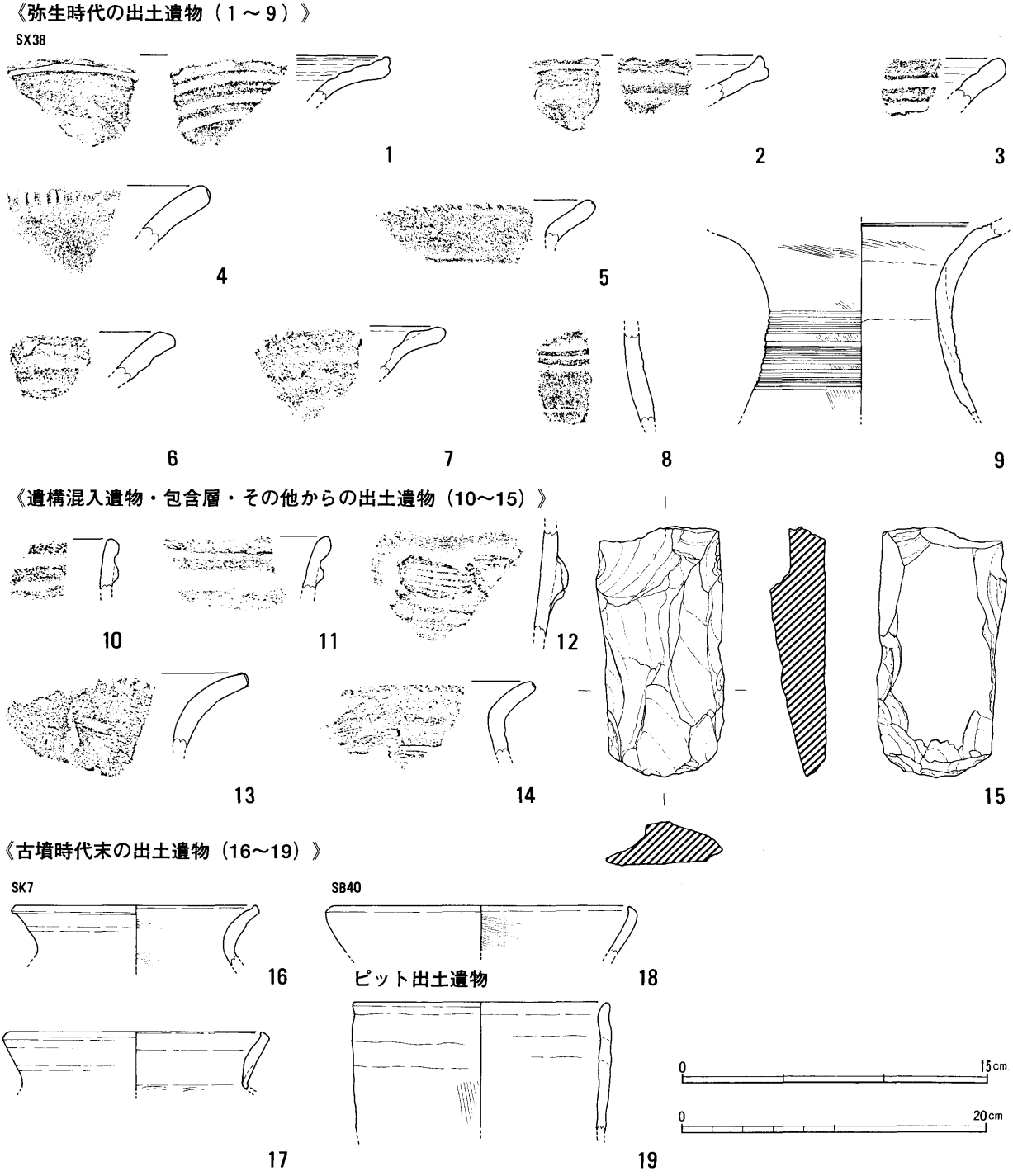
調査区中央部の方形周溝墓や掘立柱建物を検出した部分は、北の段丘崖に落ち込むまで20m程フラットな面をもつ。第2次調査の結果からもこの段丘端にまだまだ方形周溝墓及び掘立柱建物が存在しているのであろう。

（西出　孝）

〔註〕

① 山澤義貴・谷本鋭次『金剛坂遺跡発掘調査報告』（明和町教育委員会、1971年）。

② 「土師器焼成坑と古代土器の生産と流通」『研究紀要第7号』（三重県埋蔵文化財センター、1998年）。



第49図　出土遺物実測図（1～14は1：3，他は1：4）

図版番号	登録番号	器種	出土位置		計測値（cm）		調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
			地区	遺構	口径	器高						
1	002-07	弥生土器 壺口縁部	a 10	SX38				粗	並	にぶい橙色 灰褐色	小片	
2	003-04	弥生土器 壺口縁部	a 10	SX38				やや粗	並	橙色 にぶい橙色	小片	
3	003-03	弥生土器 壺口縁部	a 10	SX38			外：刺突	粗	並	にぶい橙色 灰褐色	小片	
4	002-08	弥生土器 壺口縁部	a 10	SX38				粗	並	にぶい橙色 橙色	小片	
5	003-01	弥生土器 壺口縁部	a 10	SX38			外：刺突	粗	並	橙色 にぶい橙色	小片	
6	002-03	弥生土器 壺口縁部	a 10	SX38				粗	並	橙色 にぶい橙色	小片	
7	002-02	弥生土器 壺口縁部	a 10	SX38			内：突帯、剥離	粗	並	橙色	小片	
8	001-05	弥生土器 壺肩部	a 10	SX38				粗	並	灰色 にぶい黄橙色	小片	
9	001-02	弥生土器 壺頸部	a 8	SX38			外：櫛による横線文、ハケ 内：ハケ、剥離	粗	並	にぶい橙色 にぶい赤褐色	頸部のみ残存	
10	002-06	縄文土器 深鉢口縁部	a 5	pit5			外：素文突帯	粗	並	明黄褐色 黒褐色	小片	
11	002-04	縄文土器 深鉢口縁部	a 15	SD43			外：素文突帯	粗	並	浅黄橙色	小片	
12	002-05	縄文土器 深鉢口縁部	a 14	北壁			外：口縁部下に○字状押圧突帯	粗	並	にぶい黄橙色	小片	
13	003-02	弥生土器 甕口縁部	b 16	包含層			外：刺突	粗	並	灰黄褐色	小片	
14	002-01	弥生土器 甕口縁部	a 11	包含層			外：沈線、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	やや粗	並	にぶい黄橙色 にぶい橙色	小片	
15	003-06	石斧	a 6	包含層								
16	001-01	土師器 甕口縁部	a 7	SK7	15.6		外：ヨコナデ 内：ハケ	粗	並	橙色 にぶい橙色	小片	
17	001-04	土師器 甕口縁部	a 7	SK7	16.4			粗	並	橙色 浅黄橙色	小片	
18	003-05	土師器 甕口縁部	a 10	pit3				粗	並	橙色	小片	近江甕
19	001-03	土師器 円筒甕口縁部	a 9	pit2	12.7		外：ハケ 内：ナデ	粗	並	にぶい黄橙色	小片	

第12表　出土遺物観察表

調査前風景（東から）

調査区遠景（西から）

調査区遠景（東から）

調査区全景（西から）

ＳＦ32（北から）

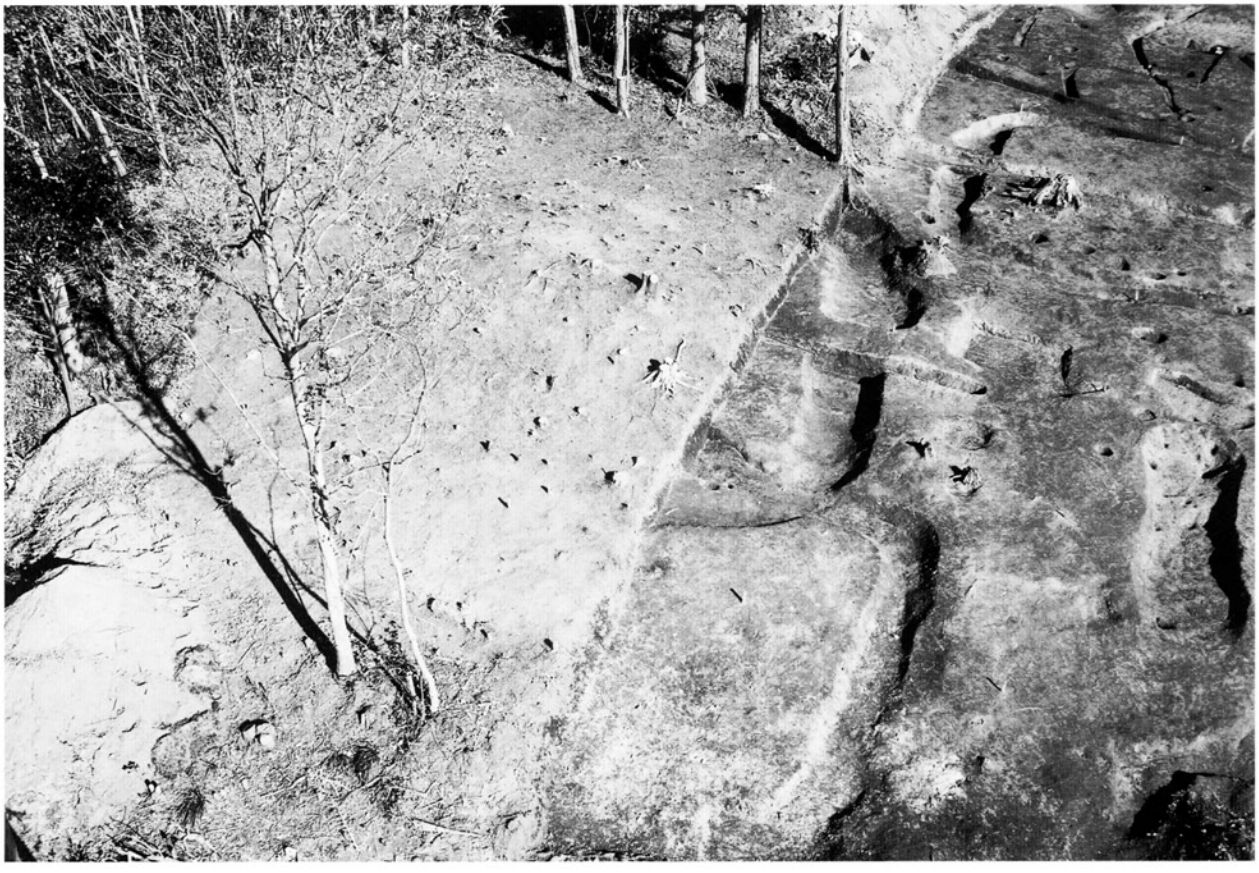
ＳＦ32（礫除去後、南から）

ＳＦ88（右）・ＳＦ91（左）（西から）

ＳＦ88（礫除去後、南から）

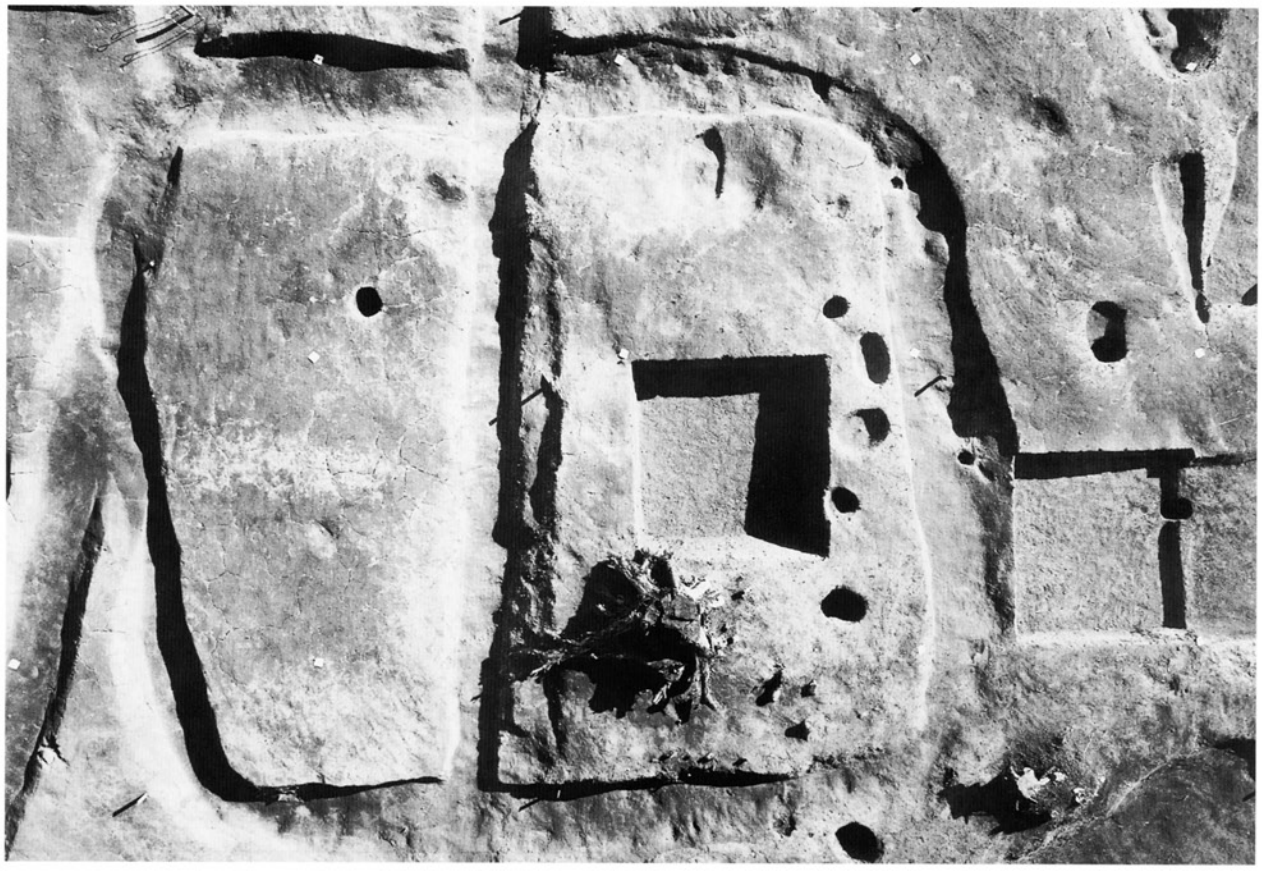
ＳＸ86（西から）

ＳＸ89（旧コドノ古墳調査前風景、南から）

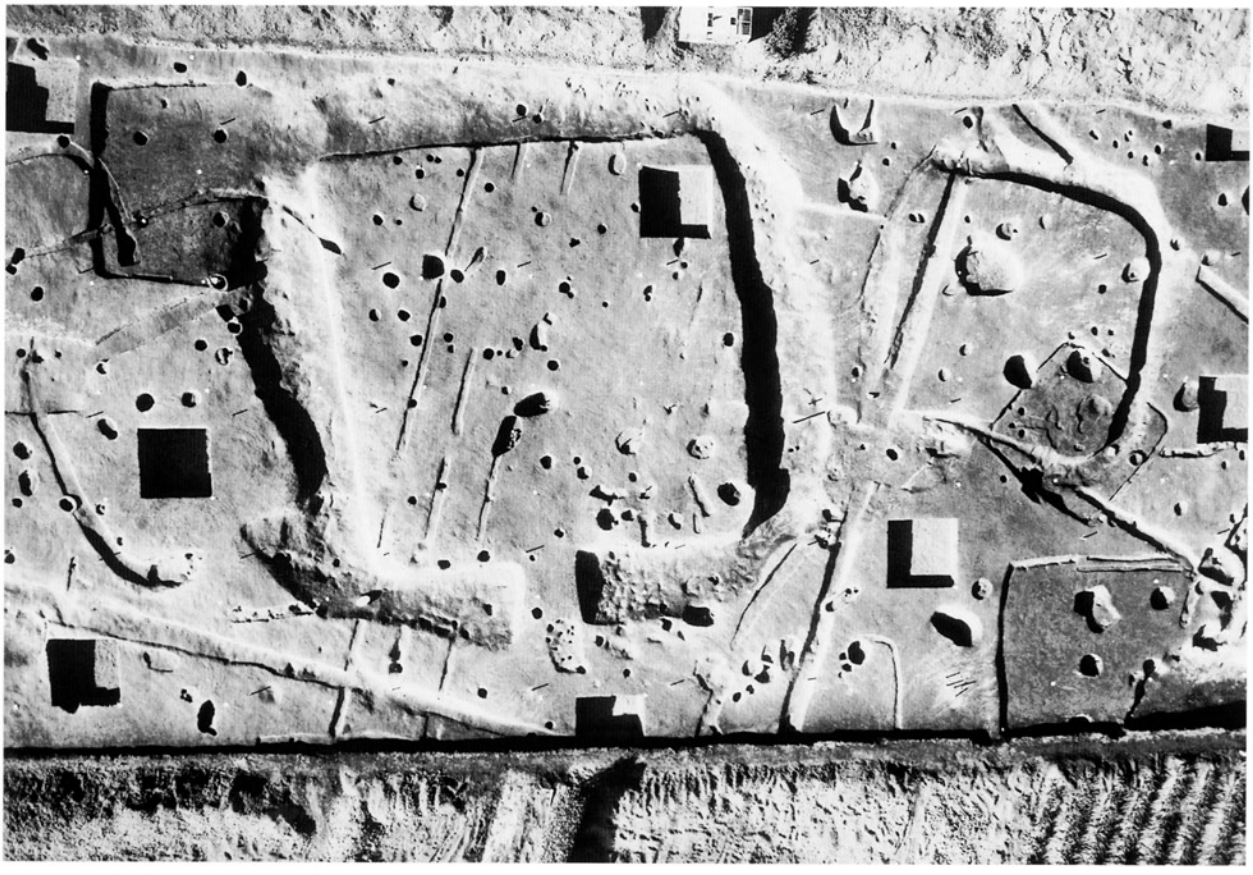


ＳＸ89（奥）・ＳＸ90（手前）（西から）

ＳＸ89断面（南から）



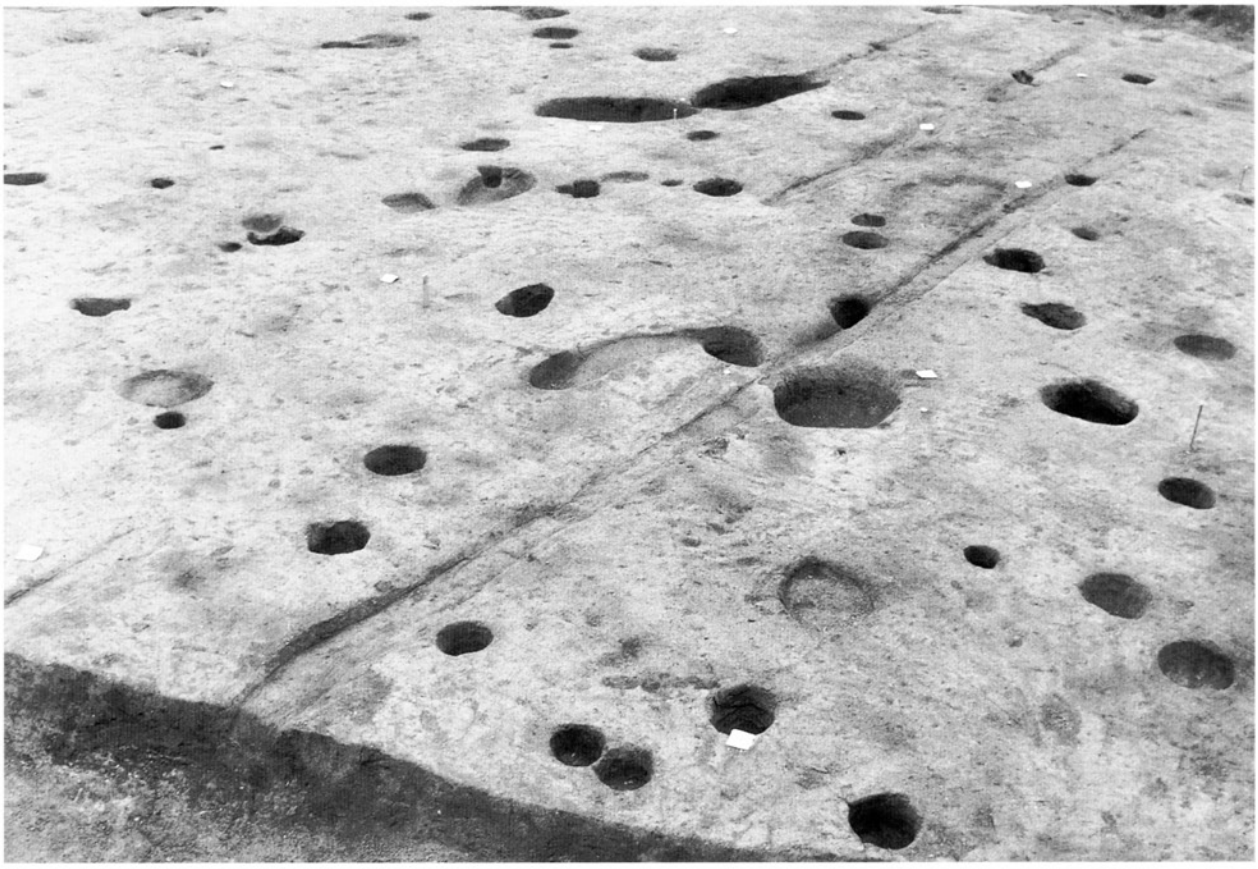
ＳＸ80（真上から）



ＳＸ57（右）・ＳＸ62（中央）・ＳＸ74（左）（真上から）

ＳＸ44（南から）

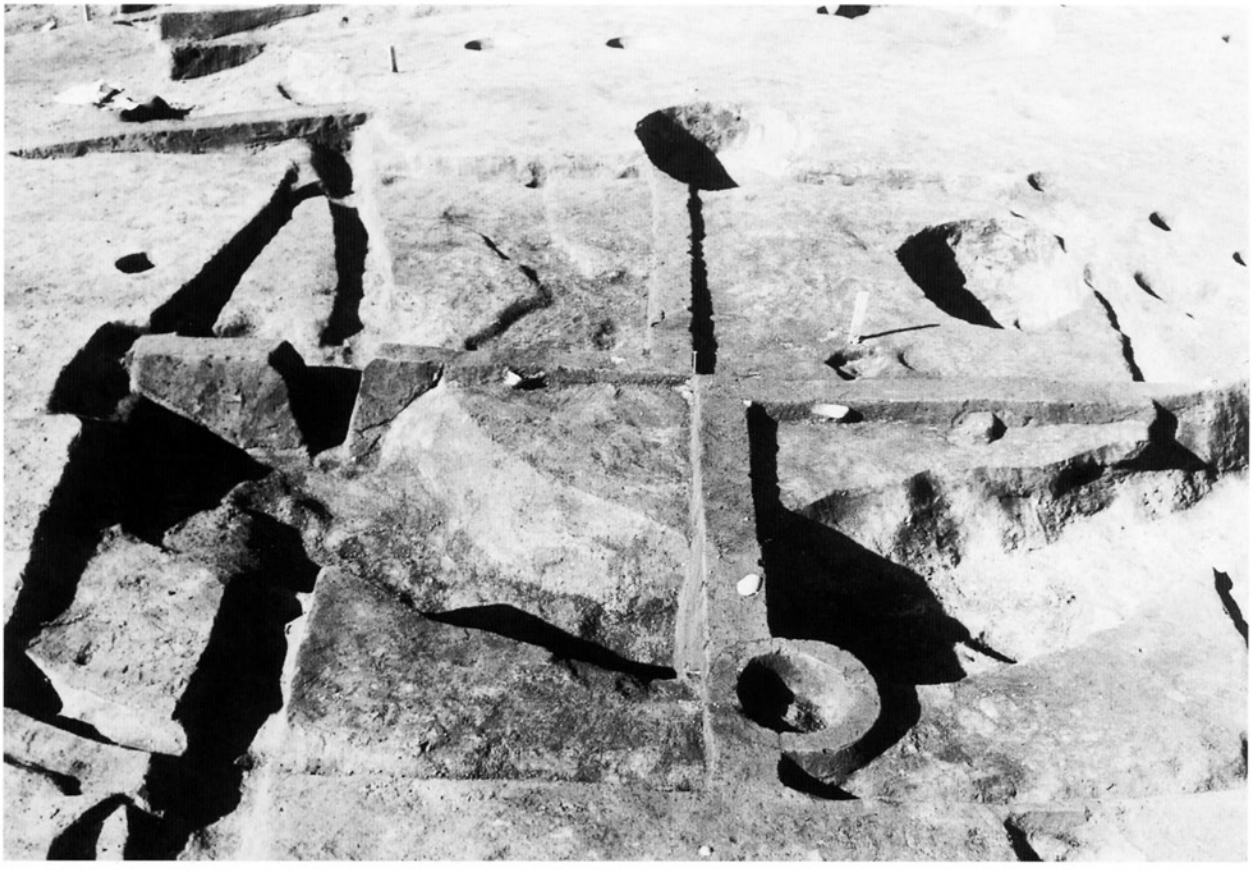
ＳＸ７（南から）



ＳＨ92（北から）

ＳＨ40（西から）

ＳＨ57（西から）



ＳＨ61（東から）

ＳＨ69（南から）

ＳＨ72（南から）

ＳＨ10（北から）

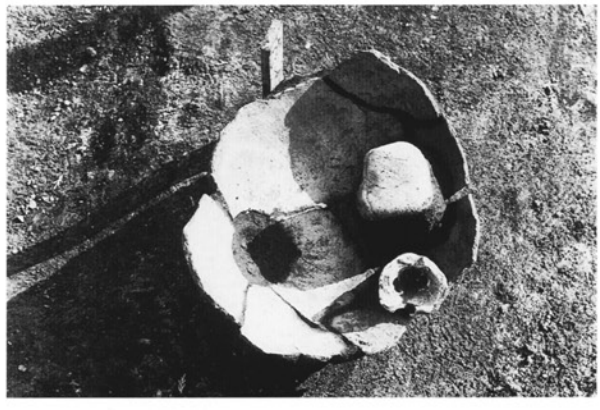
ＳＨ33・ＳＨ35・ＳＨ42・ＳＨ46（真上から）

ＳＨ24（北から）

ＳＢ18（南から）

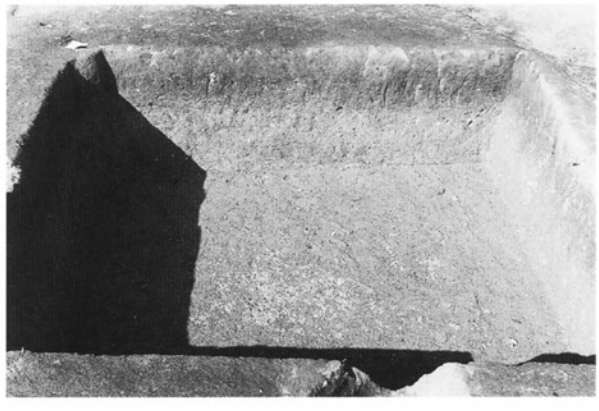
ＳＤ47・ＳＤ49・ＳＤ50・ＳＤ51・ＳＤ52（北から）

ＳＨ92出土土器（北から）

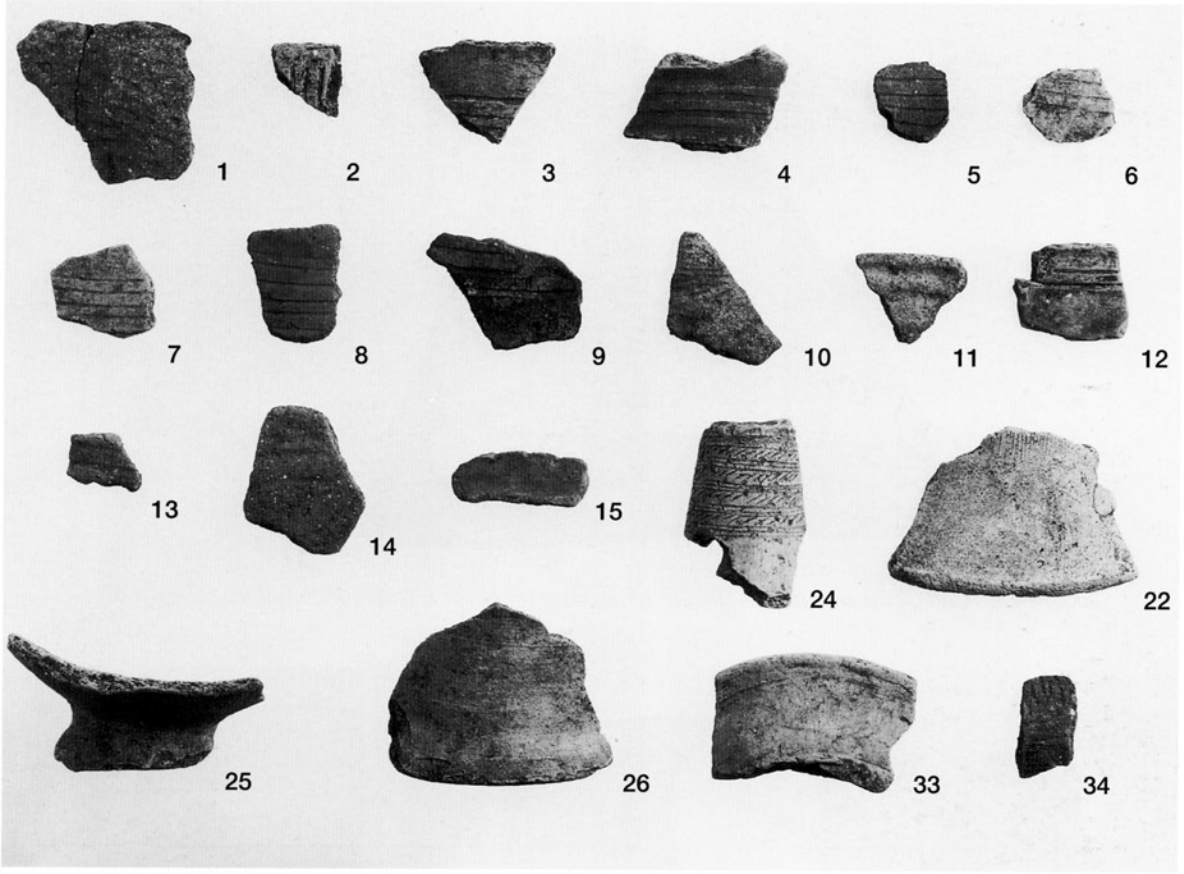


ＳＸ62出土土器（北から）

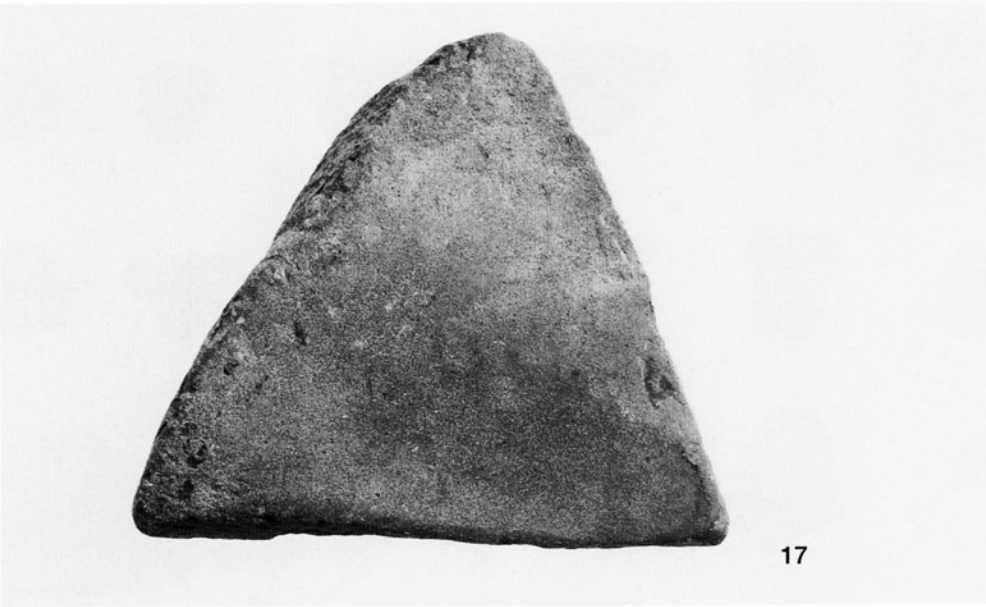
ＳＸ62土層（東から）



テストピット16（南から）



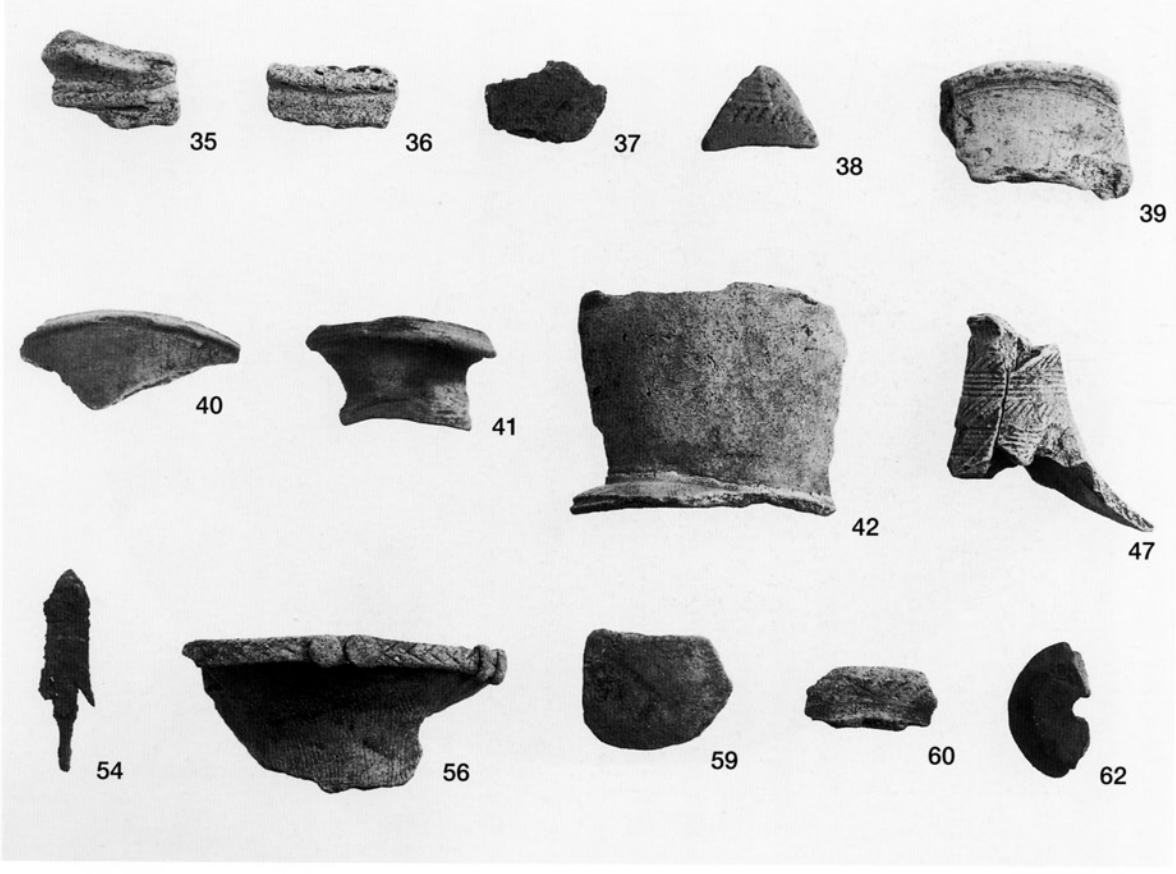
出土遺物（１）（16のみ1：6、他は1：3）



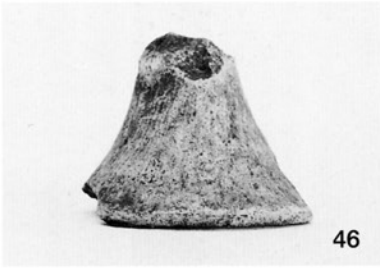
出土遺物（２）（1：3）

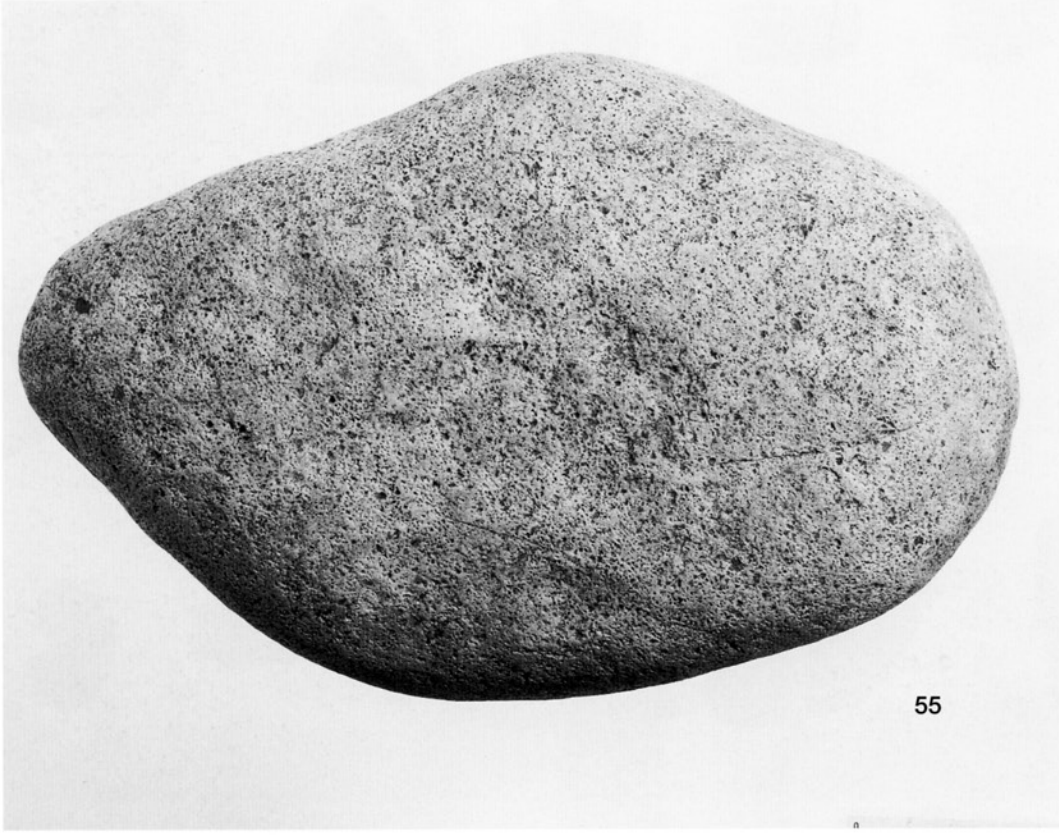
出土遺物（３）（1：3）

出土遺物（４）（1：3）

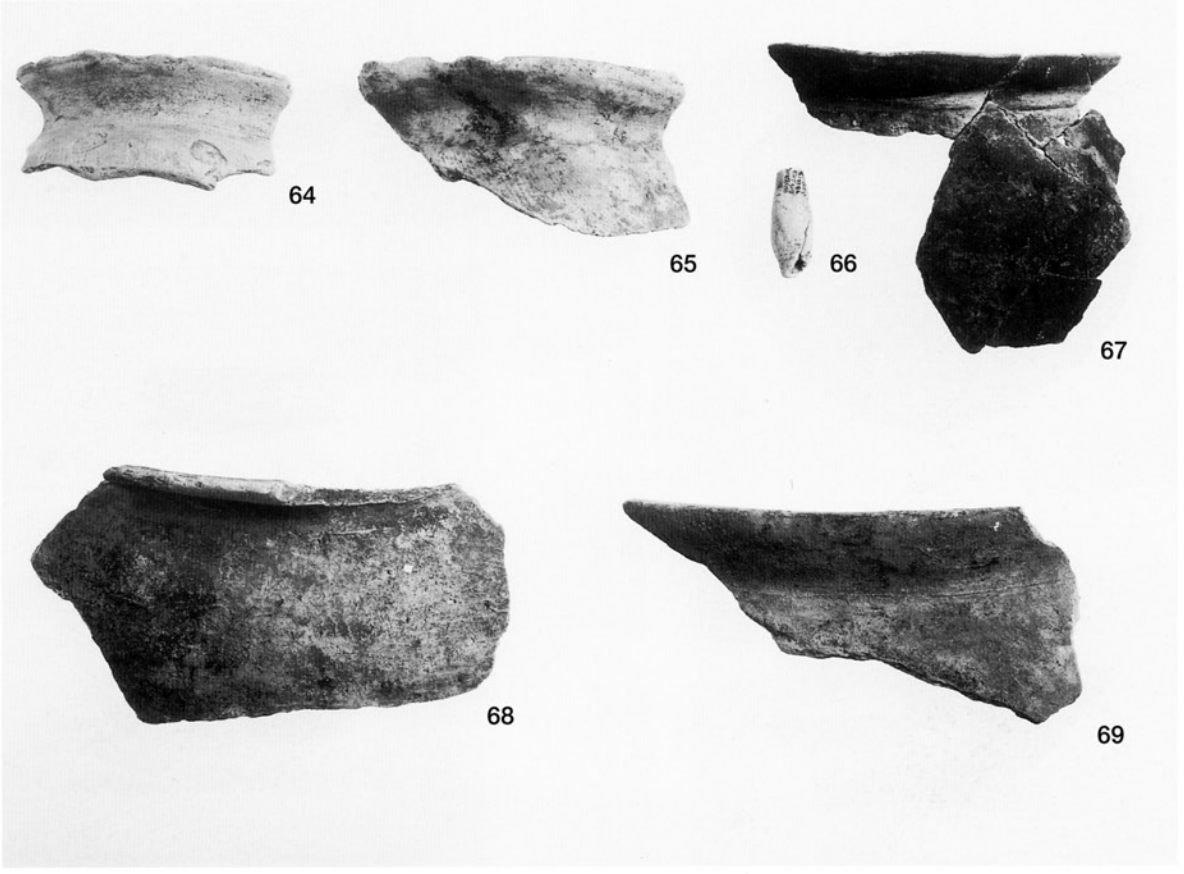


出土遺物（５）（1：3）

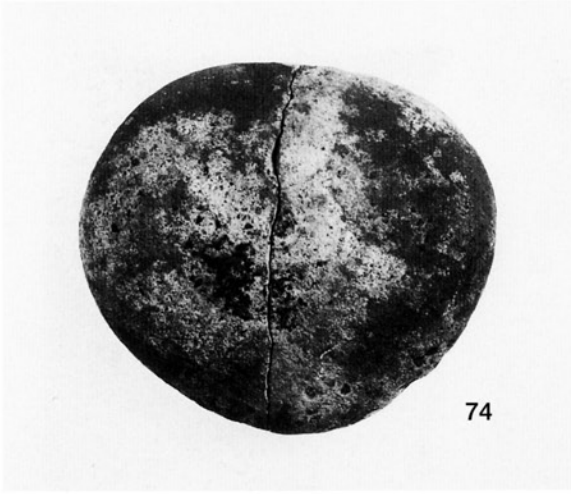


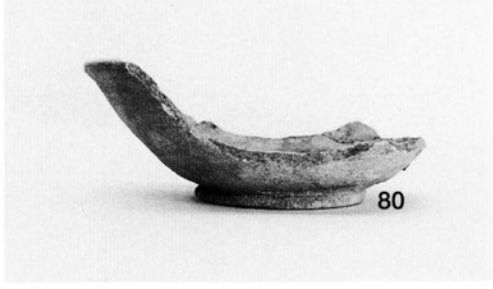


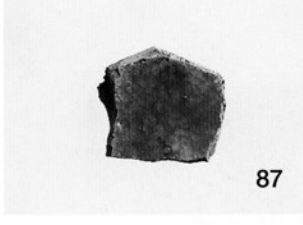
出土遺物（６）（1：3）



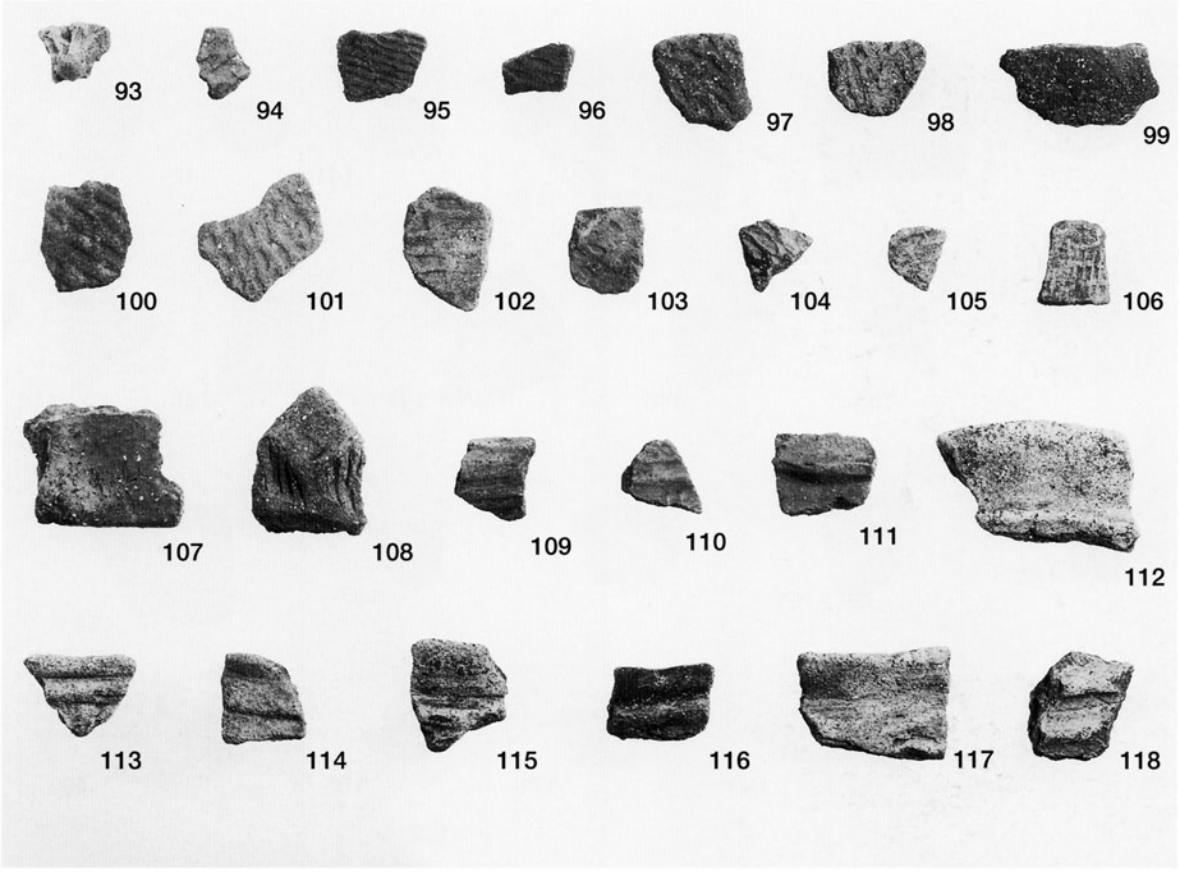
出土遺物（７）（1：3）

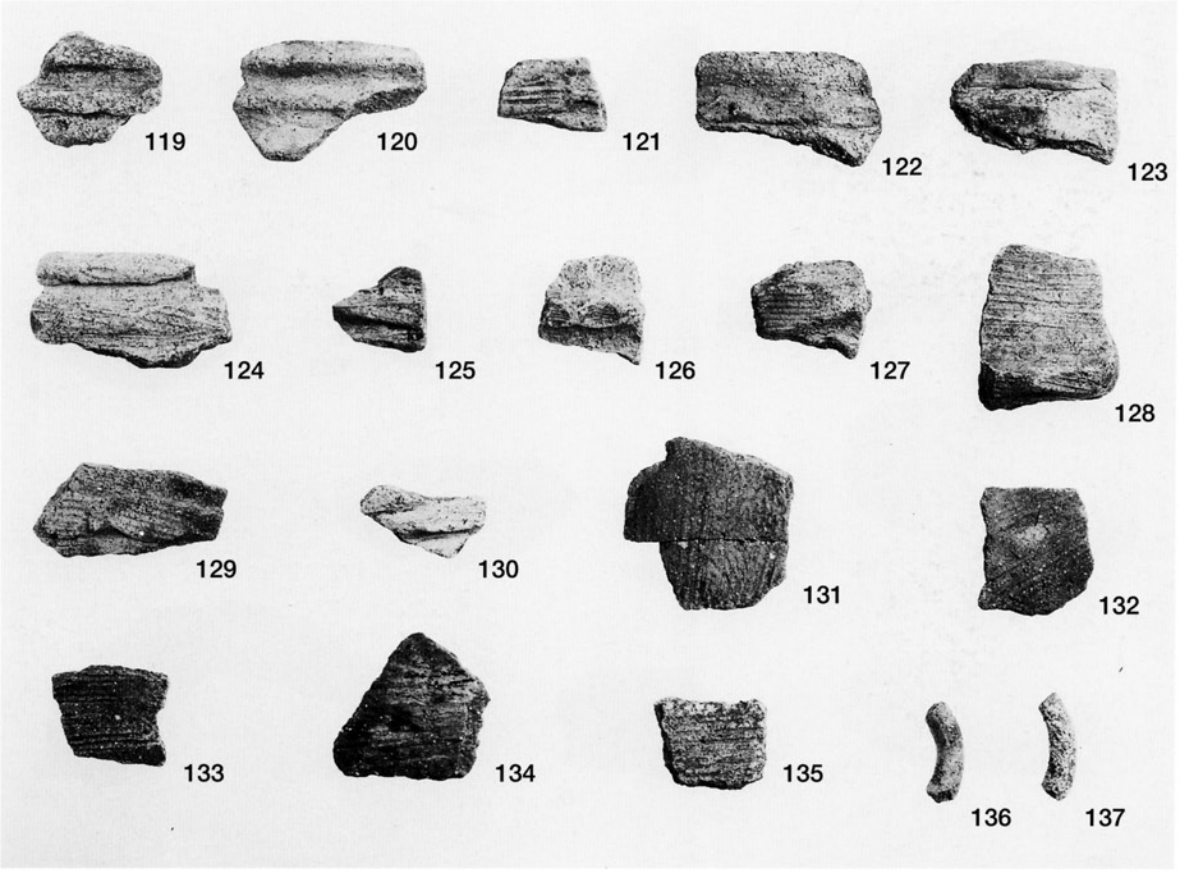




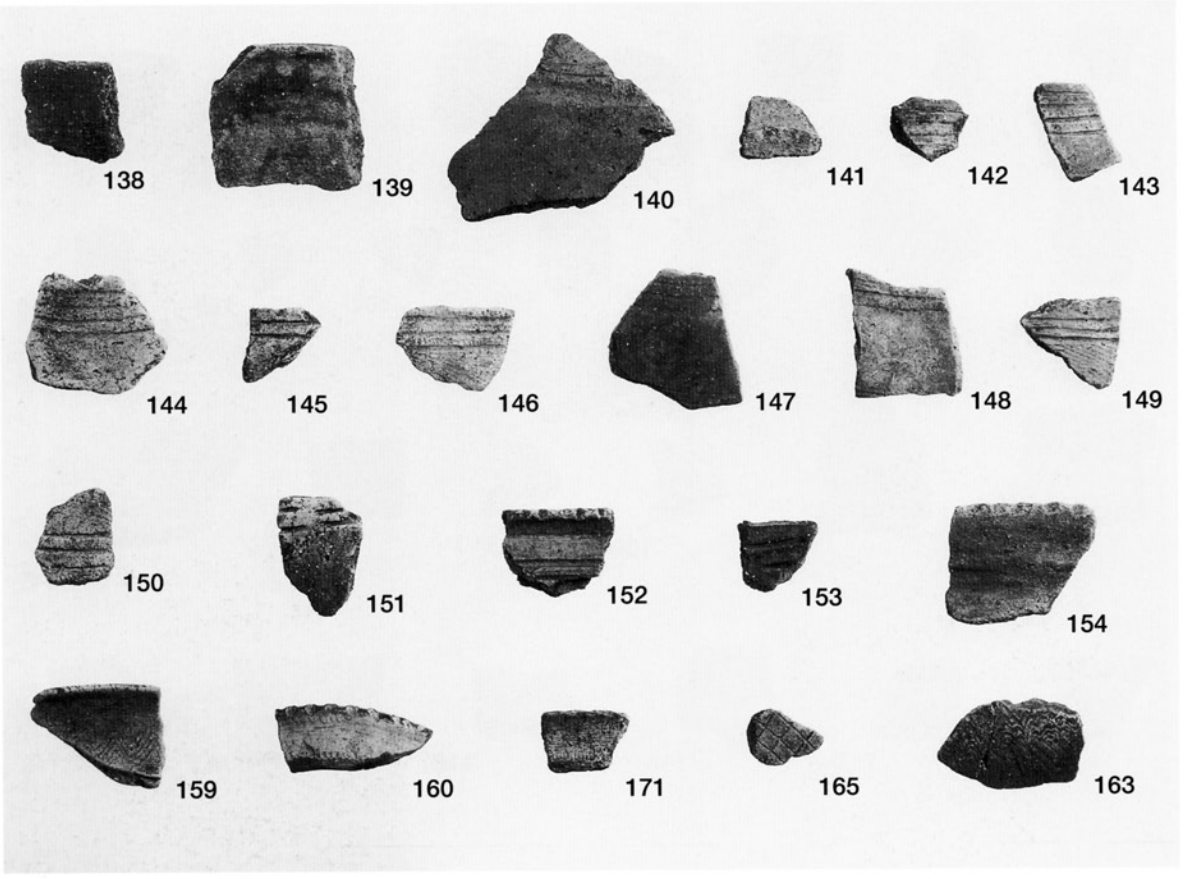


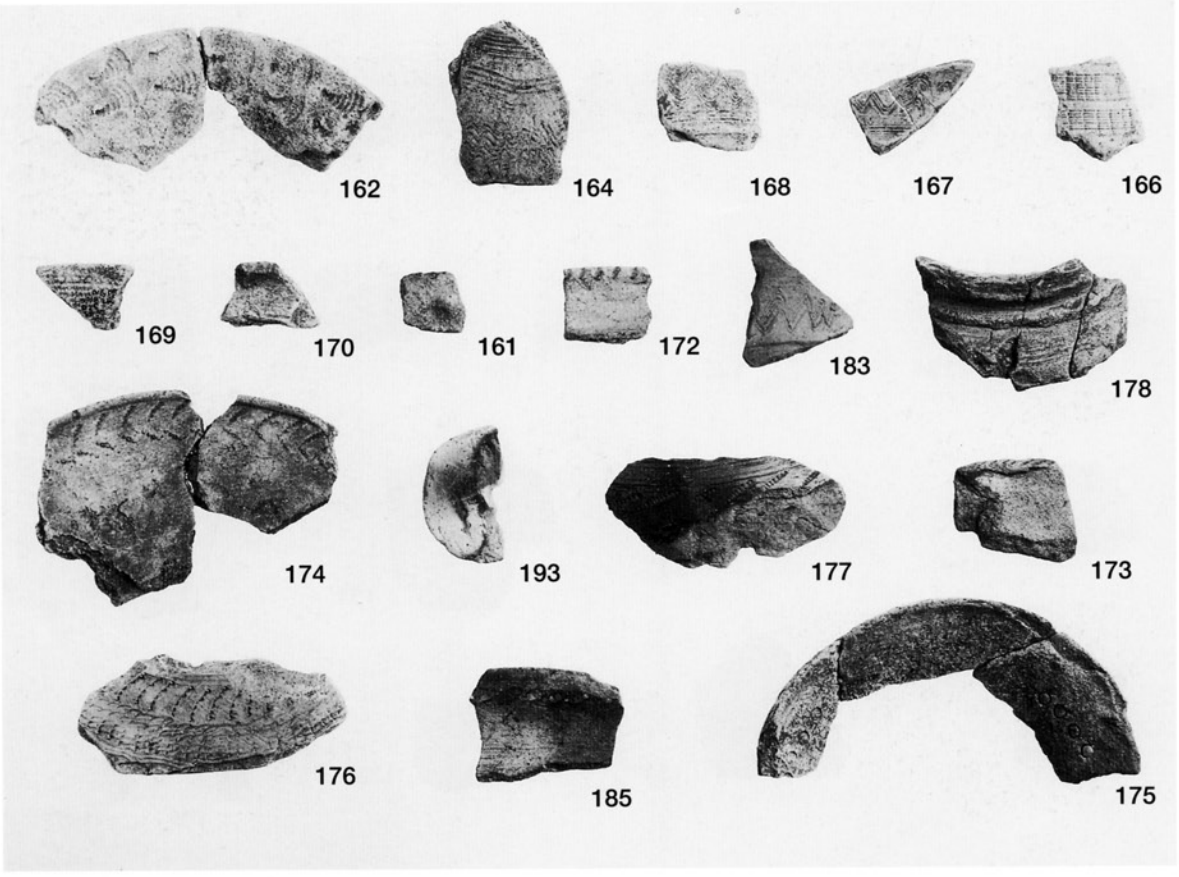
出土遺物（８）（1：3）


93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118


119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137

出土遺物（９）（1：3）

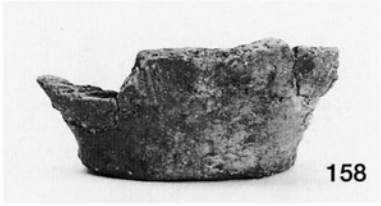

138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
159
160
171
165
163


162
164
168
167
166
169
170
161
172
183
178
174
193
177
173
176
185
175

出土遺物（10）（1：3）

156

157


158

180

187

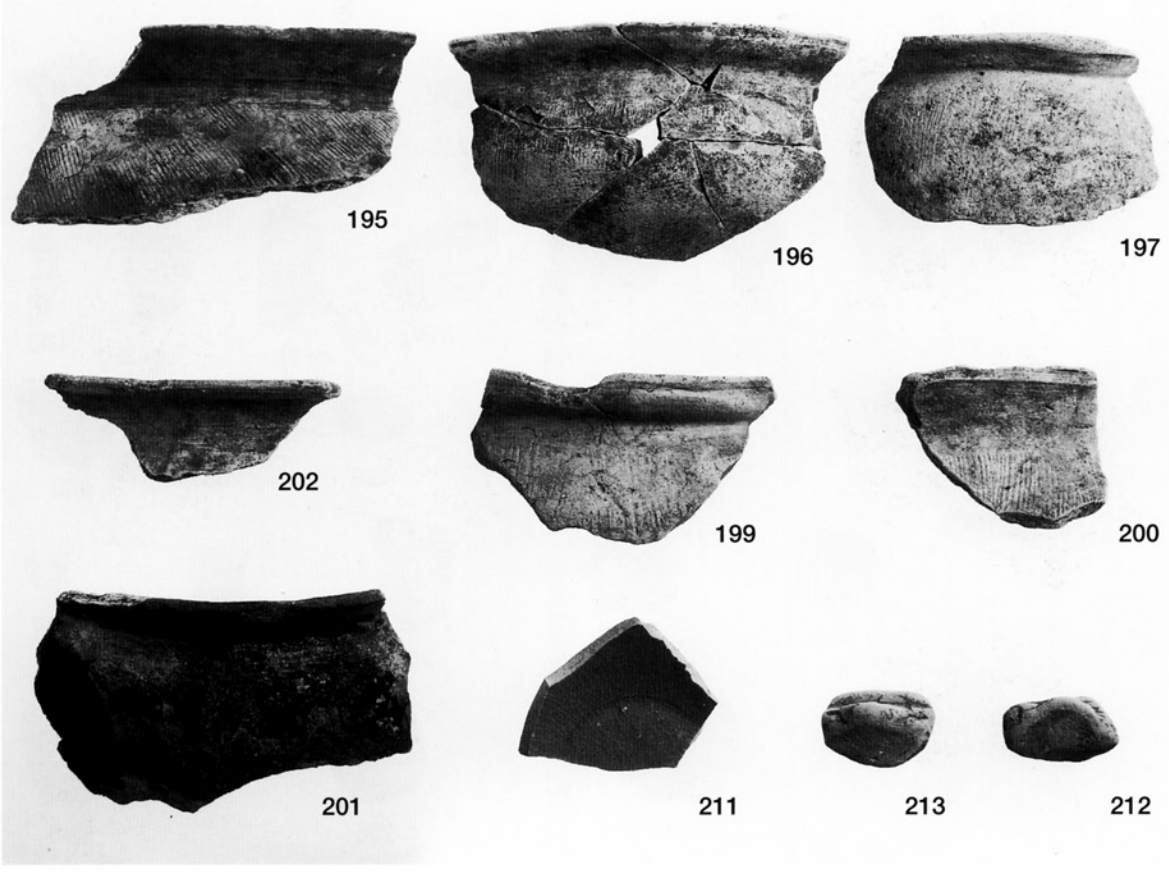
188

189

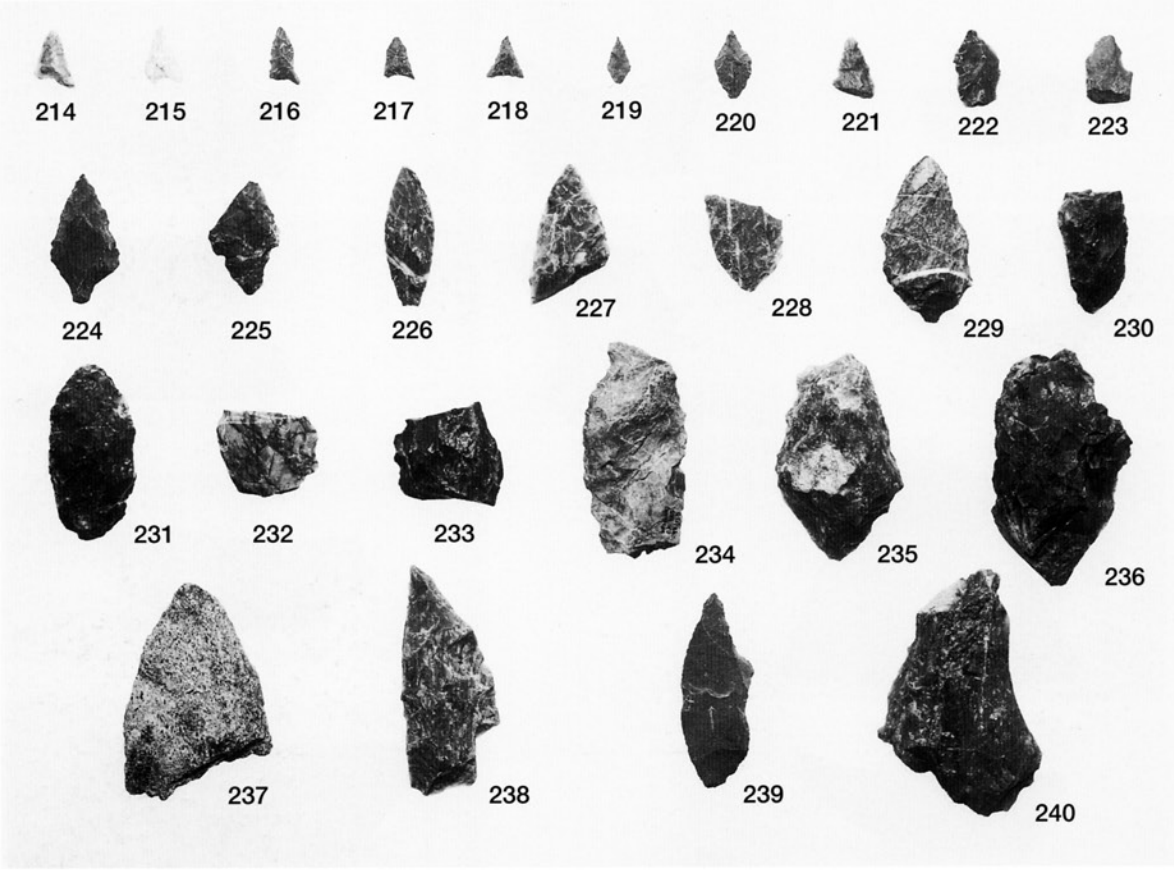
194

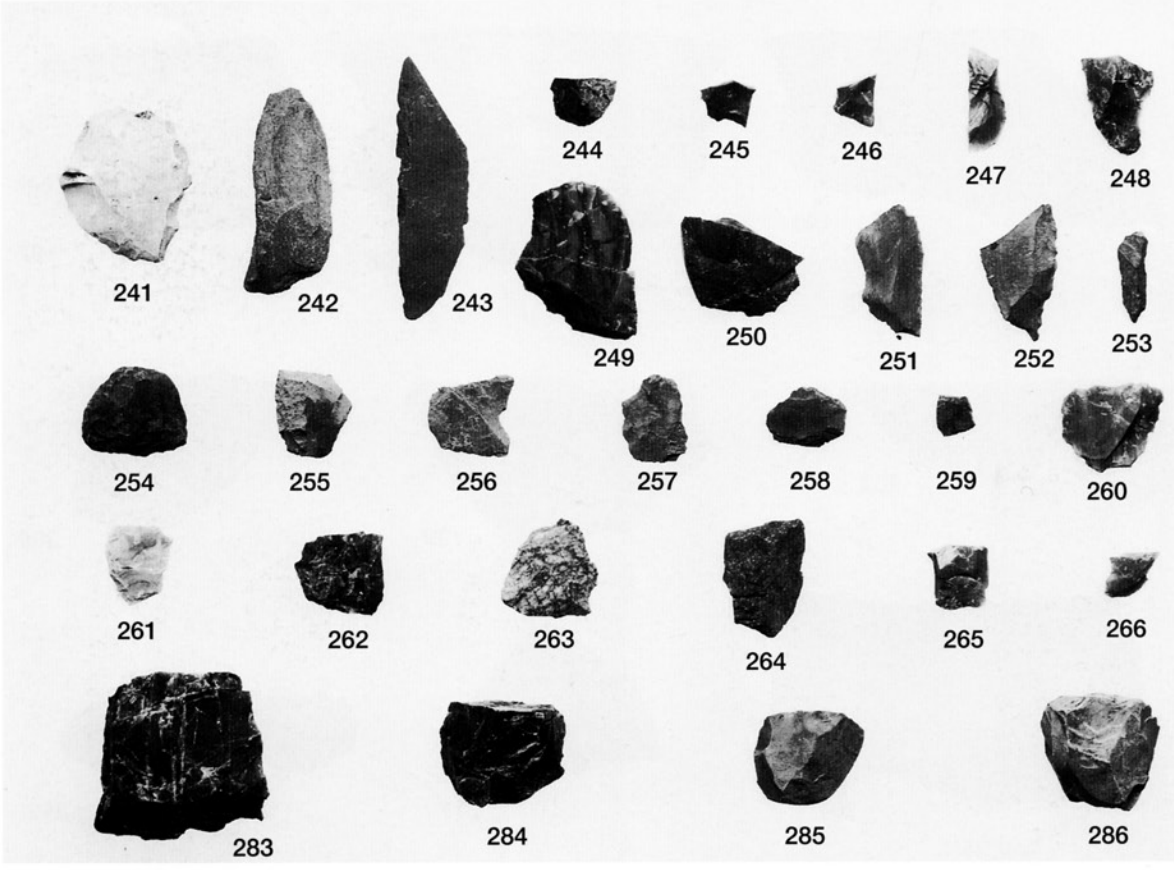
203

210

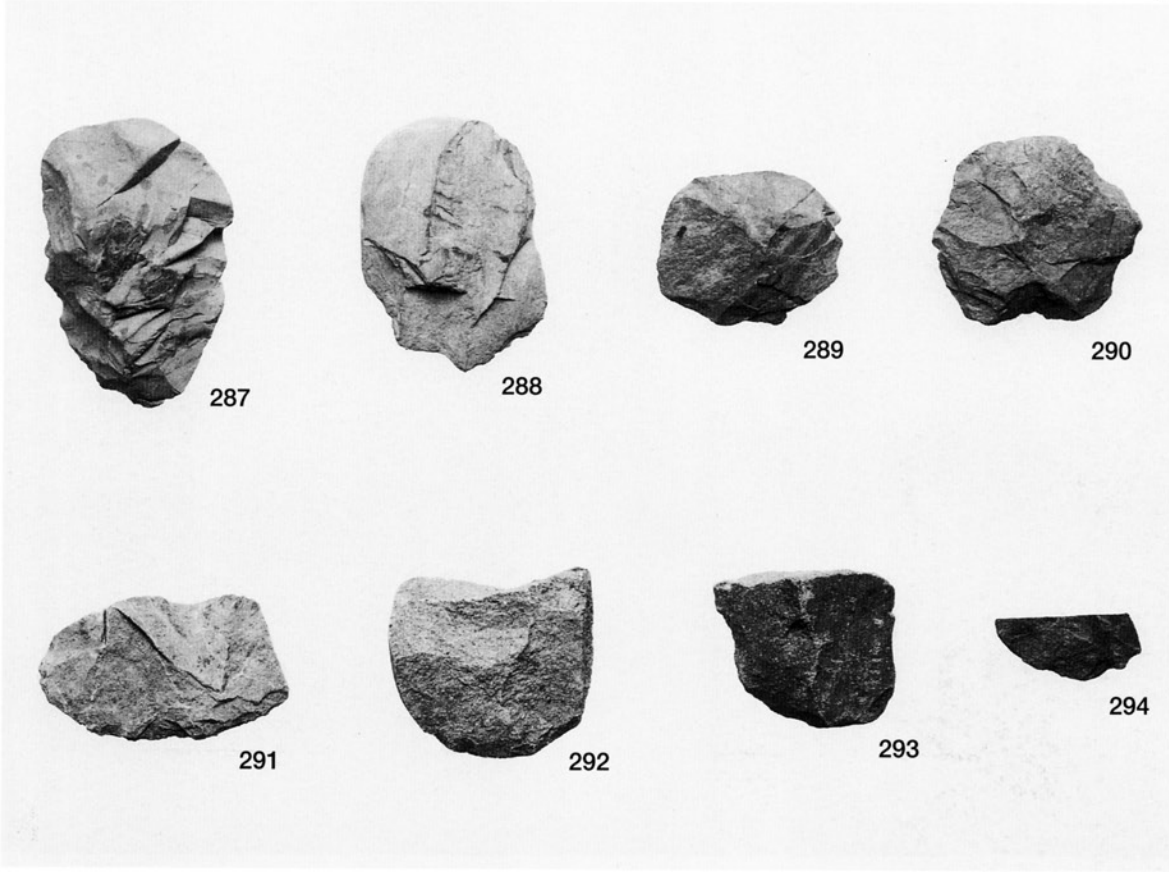


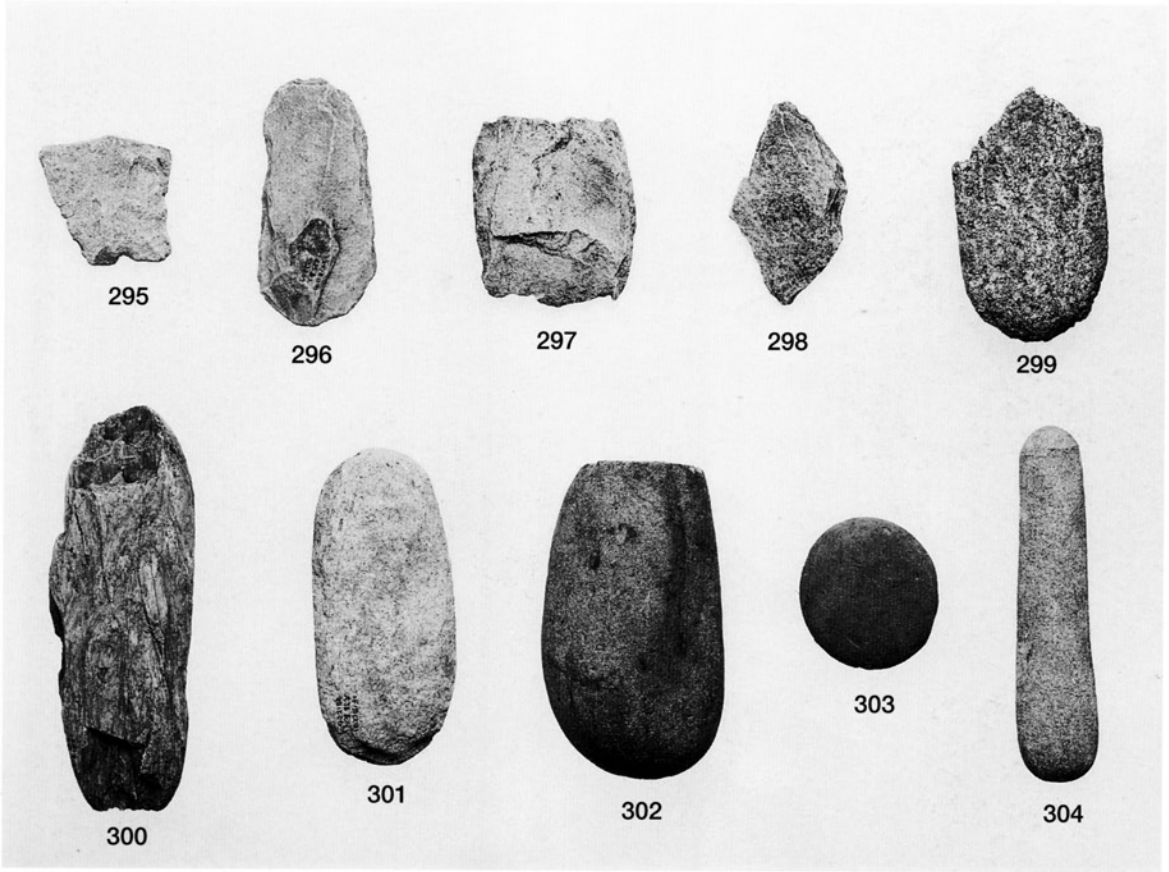
出土遺物（11）（1：3）


214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240


241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
283
284
285
286

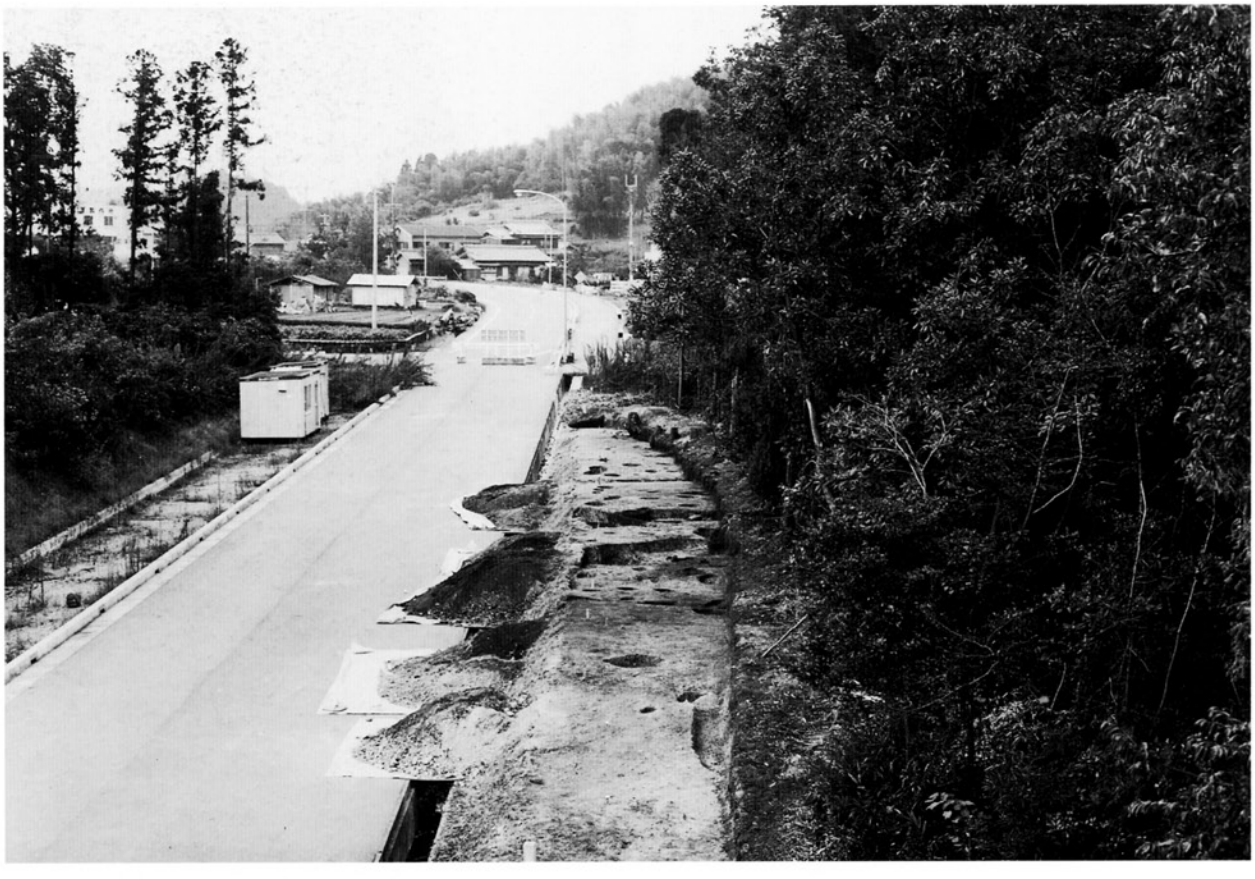
出土遺物（12）（1：3）


287
288
289
290
291
292
293
294


295
296
297
298
299
300
301
302
303
304

出土遺物（13）（1：3）

調査前風景（東から）

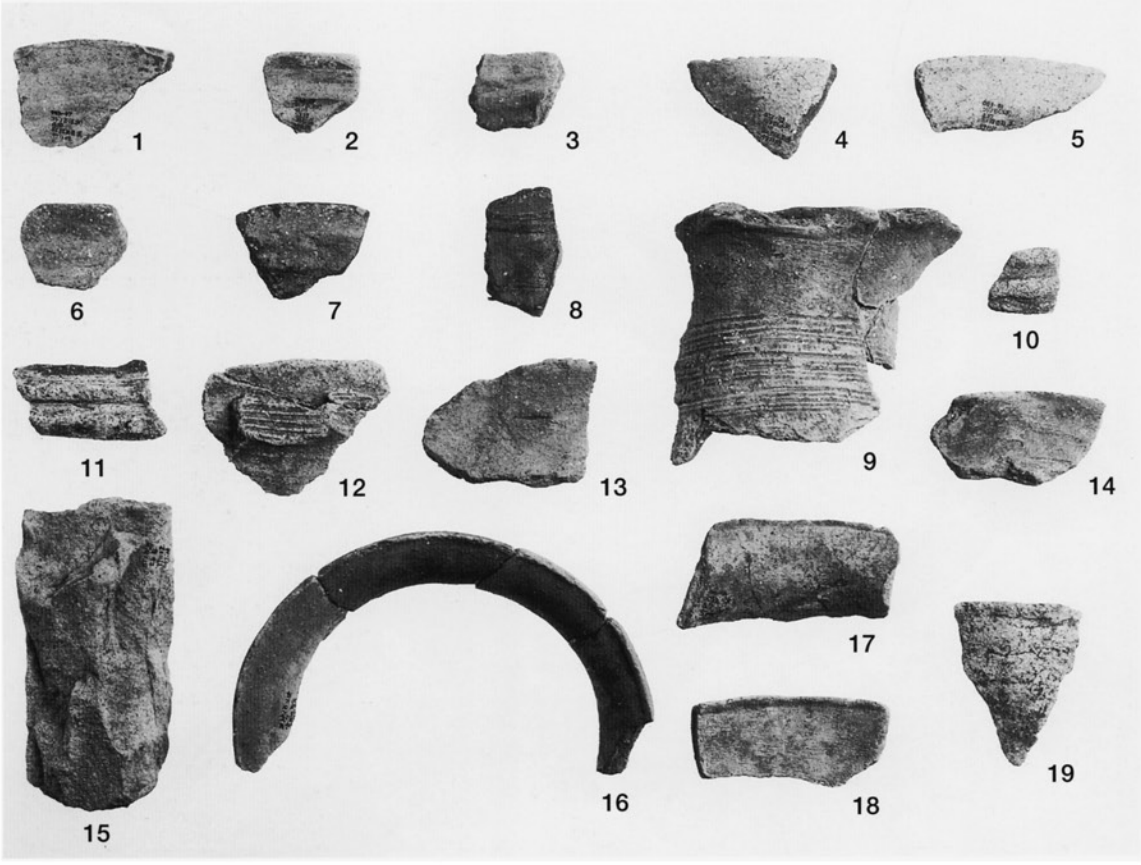


調査区全景（東から）

ＳＸ38（南から）

ＳＢ40（南から）

ＳＢ41（南から）



出土遺物（1：3）

報告書抄録

ふりがな	こどのびぃいせき（だいにじ・だいさんじ）はっくつちょうさほうこく
書名	コドノB遺跡（第2次・第3次）発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	214
編著者名	西出　孝
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515−0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596−52−1732
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
こどのびぃいせき コドノB遺跡 （第2次）	みえけんたきぐん 三重県多気郡 めいわちょううえむらあざ 明和町上村字 こどの コドノ	24−442	167	34° 31′ 21″	136° 35′ 51″	981013 〜 990201	1,900	平成10年度一般地方道多気停車場斉明線緊急地方道路整備工事
こどのびぃいせき コドノB遺跡 （第3次）	みえけんたきぐん 三重県多気郡 めいわちょううえむらあざ 明和町上村字 こどの コドノ	24−442	167	34° 31′ 20″	136° 35′ 48″	991026 〜 991202	300	平成11年度一般地方道多気停車場斉明線緊急地方道路整備工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
コドノB遺跡 （第2次）	集落跡	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代	集石炉 平地式住居 竪穴住居 方形周溝墓 掘立柱建物 土坑 溝	尖頭器・石鏃・石錐 スクレイパー 楔形石器・石斧 石庖丁・縄文土器 弥生土器・紡錘車 土師器・須恵器 ミニチュア土器 鉄鏃・山茶椀 土錘・不明土製品	墳丘の残る方形周溝墓（SX89）
コドノB遺跡 （第3次）	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 中世	方形周溝墓 掘立柱建物 土坑 溝	縄文土器 弥生土器・石斧 土師器	

平成 12(2000) 年 7 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 10 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　２１４

コドノＢ遺跡（第２次・第３次）発掘調査報告

－多気郡明和町上村－

２０００年７月

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　文化印刷有限会社